

# 教育研究年報

(2024 年度)

群馬パース大学

<b>I. 教育活動の記録</b> .....	<b>1</b>
1) 看護学科.....	2
2) 理学療法学科.....	5
3) 作業療法学科.....	7
4) 言語聴覚学科.....	9
5) 検査技術学科.....	11
6) 放射線学科.....	13
7) 臨床工学科.....	15
8) 保健科学研究科保健科学専攻博士前期課程.....	17
9) 保健科学研究科保健科学専攻博士後期課程.....	19
<b>II. 研究活動の記録</b> .....	<b>20</b>
1) 看護学科.....	21
2) 理学療法学科.....	58
3) 作業療法科.....	81
4) 言語聴覚学科.....	95
5) 検査技術学科.....	106
6) 放射線学科.....	121
7) 臨床工学科.....	136
8) 教養部.....	150

## 教育研究年報の背景

本学は、医療系高等教育機関としての質の向上を図る活動の一環として、社会的責任を果たすことを目的に教育活動と研究活動の実績を社会に公表している。

2005年度から2017年度については、(1)各領域の教育活動の総括、(2)教育活動の諸記録、(3)研究活動の諸記録、(4)FD活動の記録、(5)学生サービスの記録、の内容を掲載した「群馬パース大学年報」を年1回発行した。

2018年から2023年度については、上記(1)(4)(5)の内容を自己点検評価書に組み入れ、(2)(3)の内容を「群馬パース大学教育研究年報」として、「教育活動の記録」及び「研究活動の記録」の2部で構成し、自己点検評価書とともに作成・公表した。

2024年度からは、従来の内容を引き継ぐものの、自己点検評価書から独立させた「教育研究年報」として公表している。

### I. 教育活動の記録

教育活動の記録は、各専任教員が担当した科目において実施内容とシラバスとの対応性、授業の方法、使用した教材、成績評価における学習目標の到達度の測定などを教育実績として収集したデータである。

個人、また各学科で毎年教育実績を振り返ることで改善の促進をはかり、PDCAサイクルを機能させることで、大学に求められる役割の一つである「学生の教育の充実」に対する継続的な教育活動の質の向上に繋げ、教育面での自己点検の一環として、一つの指標となっている。

本年度、各専任教員が担当した学部、大学院の各科目の実施内容とシラバスの対応性は、全体で96.8%の科目でシラバス通りに講義が進められており、成績評価における学習目標の到達度の測定においては全体で100%の科目において的確に測定できているという結果となった。

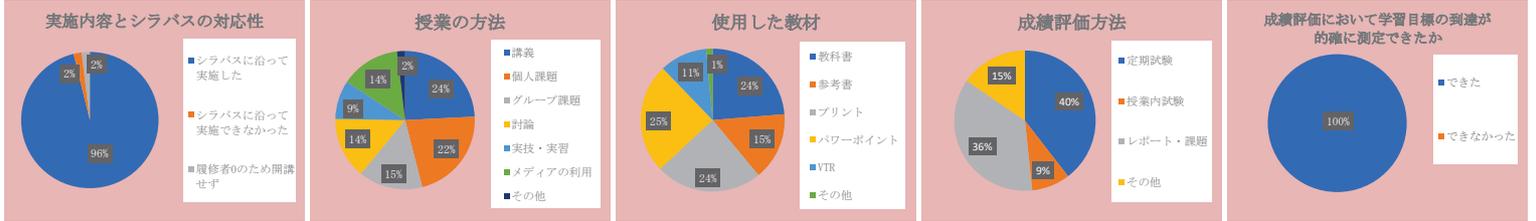
看護学部 看護学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法								使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか									
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考								
心理学	1	後期	選択	2	竹居田 幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○				○	○																		できた		
教育心理学	1	後期	選択	1	竹居田 幸仁	シラバスに沿って実施できなかった		○	○			○																				できた		
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○																			できた		
健康スポーツ実技	1	後期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○						○													できた		
生命倫理	2	後期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○																							できた		
英語リーディング	1	前期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○		○											Microsoft Forms			○			○				多読(聴取達成)	できた	
医療英語リーディング	1	後期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○		○											Microsoft Forms			○			○					できた	
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○					○																		できた		
医療英語会話	2	後期	必修	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○																						できた		
解剖学 I	1	前期	必修	1	浅見 知市郎	シラバスに沿って実施した		○																								できた		
解剖学 II	1	後期	必修	1	浅見 知市郎	シラバスに沿って実施した		○																								できた		
臨床解剖学	4	後期	選択	1	浅見 知市郎	シラバスに沿って実施した		○																								できた		
生理学 I	1	前期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○																								できた		
生理学 II	1	後期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○																								できた		
臨床生理学	4	後期	選択	1	洞口 貴弘	履修者0のため開講せず																												
生化学	1	後期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○																								できた		
病理学	1	後期	必修	1	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○	○																							できた		
臨床病態学 I	2	前期	必修	1	田村 遵一	シラバスに沿って実施した		○																								できた		
臨床病態学 II	2	前期	必修	1	田村 遵一	シラバスに沿って実施した		○																								できた		
臨床病態学 III	2	後期	必修	1	田村 遵一	シラバスに沿って実施した		○																								できた		
臨床病理学	4	後期	選択	1	湯本 真人	履修者0のため開講せず																												
臨床検査学	2	前期	必修	1	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○																								できた		
発達心理学	2	前期	必修	1	竹居田 幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○			○																				できた		
臨床心理学	2	後期	必修	1	竹居田 幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○																							できた		
社会福祉・社会保障制度論	2	後期	必修	1	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○																								できた		
地域保健行政	3	前期	必修	1	小林 亜由美	シラバスに沿って実施した		○																								できた		
リハビリテーション概論	2	後期	選択	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○					○																					
カウンセリング	2	後期	選択	1	竹居田 幸仁	シラバスに沿って実施できなかった		○	○	○																						できた		
看護学概論 I	1	前期	必修	1	萩原 一美	シラバスに沿って実施した		○	○			○																				できた		
看護学概論 II	1	後期	必修	1	萩原 一美	シラバスに沿って実施した		○	○			○																					できた	
基礎看護技術演習	1	前期	必修	1	長嶺 めぐみ	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○																				できた		
コミュニケーション論	1	後期	必修	1	萩原 一美	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○															できた		
日常生活援助学演習 I (認知・食事・排泄)	1	後期	必修	1	千葉 今日子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	○	○	○																できた		
日常生活援助学演習 II (清潔・安楽)	1	後期	必修	1	堀込 由紀	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	○	○	○					自作の動画											できた		
ヘルスアセスメント	2	前期	必修	1	森田 綾子	シラバスに沿って実施した		○	○																							ミニツブーパー	できた	
ヘルスアセスメント演習	2	前期	必修	1	森田 綾子	シラバスに沿って実施した		○	○			○																				実技試験	できた	
看護過程論入門	2	前期	必修	1	堀込 由紀	シラバスに沿って実施した		○	○																							できた		
看護過程展開論演習	2	前期	必修	1	千葉 今日子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	○	○	○																できた		
治療援助学演習	2	後期	必修	1	長嶺 めぐみ	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	○	○	○																できた		
基礎看護学特論	4	後期	選択	1	堀込 由紀	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○																					できた		
地域・在宅看護学概論	1	後期	必修	1	齋藤 基	シラバスに沿って実施した		○	○																								シート評価	できた
地域・在宅看護学方法論	2	前期	必修	1	齋藤 基	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○																						グループワーク評価	できた
地域・在宅看護学展開論	2	後期	必修	1	齋藤 基	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○																						看護過程ワークシート評価	できた
地域・在宅看護学演習	3	前期	必修	1	反町 真由	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○																					できた	
成人看護学総論	1	後期	必修	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○	○																								ゲストスピーカーの招聘	できた
成人看護学方法論	2	前期	必修	1	堀越 政孝	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○																						できた	
慢性期看護論	2	後期	必修	1	金子 吉美	シラバスに沿って実施した		○	○																								できた	
周術期看護論	3	前期	必修	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○	○																								授業時間外に中間試験を実施	できた
クリティカルケア看護論	3	前期	必修	1	堀越 政孝	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	○	○	○																	できた	
成人看護学演習	3	前期	必修	1	金子 吉美	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	○	○	○																	技術試験	できた
成人看護学特論	4	後期	選択	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○	○																								各回のMinutesPaper	できた



看護学部 看護学科 教育活動の記録（専任教員）

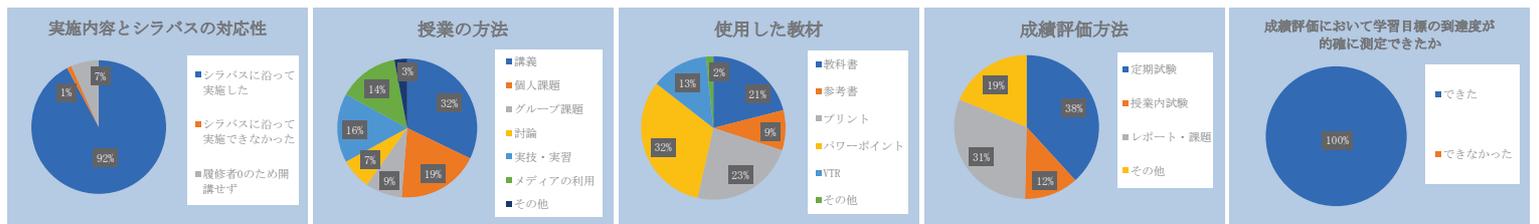
授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか		
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考
統合実習	4	通年	必修	2	中島 久美子	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○	○			○	○	○	○		○		○	実習態度		
公衆衛生看護学実習	4	後期	選択	5	奥野 みどり	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○				○		○					○		できた	
助産学実習	4	後期	選択	11	中島 久美子	シラバスに沿って実施した			○	○		○				○	○	○					○	実習態度		
看護研究概説	3	前期	必修	1	齋藤 基	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○			○		○		できた	
卒業研究	4	通年	必修	4	中島 久美子	シラバスに沿って実施した			○	○	○			研究調査	○	○							○	研究論文・発表・態度		





# リハビリテーション学部 理学療法学科 教育活動の記録 (専任教員)

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性					授業の方法					使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が明確に測定できたか																			
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考																		
支援工学	3	前期	選択	1	目黒 力	シラバスに沿って実施した								○	○			○												○					できた									
国際理学療法	2	後期	選択	1	高橋 正明	シラバスに沿って実施した							○	○			○																		英語でプレゼンテーション	できた								
事例研究法	3	前期	選択	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した															○	○																						
卒業研究	4	後期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した																													○		評価基準をあて定めて担当教員が評価							
理学療法管理学	3	後期	必修	2	岡崎 大資	シラバスに沿って実施した																					○	○								できた								
理学療法診断学	1	後期	必修	1	加茂 智彦	シラバスに沿って実施した																															できた							
基礎理学療法診断学演習	2	前期	必修	1	黒川 望	シラバスに沿って実施した																																授業内実技試験						
運動機能系理学療法診断学演習	2	前期	必修	1	城下 貴司	シラバスに沿って実施した																															できた							
神経機能系理学療法診断学演習	2	後期	必修	1	鈴木 学	シラバスに沿って実施した																																	実技試験					
内部機能系理学療法診断学演習	3	前期	必修	1	田辺 将也	シラバスに沿って実施した																																	できた					
高次脳機能評価学	3	前期	必修	1	竹原 敦	シラバスに沿って実施した																																できた						
基礎運動療法	2	前期	必修	1	田辺 将也	シラバスに沿って実施した																																	できた					
運動機能系理学療法治療学演習	2	後期	必修	1	城下 貴司	シラバスに沿って実施した																																	できた					
脊髄疾患理学療法治療学演習	3	前期	必修	1	城下 貴司	シラバスに沿って実施した																																	できた					
神経機能系理学療法治療学演習 I	2	後期	必修	1	鈴木 学	シラバスに沿って実施した																																		できた				
神経機能系理学療法治療学演習 II	3	前期	必修	1	鈴木 学	シラバスに沿って実施した																																		できた				
内部機能系理学療法治療学演習	3	後期	必修	1	木村 朗	シラバスに沿って実施した																																		できた				
身体活動学	3	後期	必修	1	木村 朗	シラバスに沿って実施した																																		できた				
発達支援理学療法	3	前期	必修	1	橋口 優	シラバスに沿って実施した																																		できた				
理学療法関連領域論	3	後期	必修	1	木村 朗	シラバスに沿って実施した																																		できた				
物理療法学	2	後期	必修	2	黒川 望	シラバスに沿って実施した																																		できた				
物理療法学演習	3	前期	必修	1	目黒 力	シラバスに沿って実施した																																		できた				
装具学	3	前期	必修	2	橋口 優	シラバスに沿って実施した																																		できた				
スポーツ理学療法学	3	後期	必修	1	城下 貴司	シラバスに沿って実施した																																			実技試験			
日常生活活動学	2	後期	必修	2	浅田 春美	シラバスに沿って実施した																					杖、車いす													できた				
高齢者理学療法学演習	3	後期	必修	1	岡崎 大資	シラバスに沿って実施した																																		できた				
リハビリテーション栄養学	3	前期	必修	1	浅田 春美	シラバスに沿って実施した																																		できた				
作業療法理論	3	後期	選択	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した																																		できた				
災害保健学	3	後期	選択	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した																																			できた			
地域理学療法学	3	前期	必修	1	佐藤 満	シラバスに沿って実施した																																			できた			
地域リハビリテーション学	3	後期	必修	1	佐藤 満	シラバスに沿って実施した																																			できた			
生活環境学	3	前期	必修	2	目黒 力	シラバスに沿って実施した																																			できた			
国際保健学	4	後期	選択	1	石井 良和	履修者0のため開講せず																																						
見学実習	2	後期	必修	1	浅田 春美	シラバスに沿って実施した																					○																できた	
評価学実習	3	後期	必修	5	橋口 優	シラバスに沿って実施した																																				できた		
地域理学療法実習	3	後期	必修	1	浅田 春美	シラバスに沿って実施した																					○															できた		
総合臨床実習 I	4	前期	必修	8	鈴木 学	シラバスに沿って実施した																																			できた			
総合臨床実習 II	4	前期	必修	8	鈴木 学	シラバスに沿って実施した																																				できた		



リハビリテーション学部 作業療法学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか											
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考									
心理学	1	後期	必修	2	伊藤 菜	シラバスに沿って実施した		○	○							○											○			できた					
教育心理学	1	後期	選択	2	伊藤 菜	シラバスに沿って実施した		○	○									○										○			できた				
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した		○										○									○	○			できた				
健康スポーツ実技	1	後期	必修	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した																	○					○			できた				
生命倫理	3	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○											○	○			できた				
人工知能・ロボットと社会	1	後期	必修	2	佐藤 満	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○							○									○		○	プレゼンテーション	できた				
人間関係・コミュニケーション論	2	後期	必修	1	伊藤 菜	シラバスに沿って実施した		○	○																			○			できた				
基礎統計学	1	前期	必修	1	富田 浩	シラバスに沿って実施した		○	○									○										○			できた				
医療英語会話	1	後期	必修	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○							○											○			できた				
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	履修者0のため開講せず																													
大学の学び-専門への誘い-	1	後期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した				○	○							○	○	○	○								○			できた			
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○							○	○	○	○								○			できた			
運動器解剖学	1	前期	必修	2	後藤 達佑	シラバスに沿って実施した		○									○		○	○								○	○			できた			
臓器解剖学	1	後期	必修	2	後藤 達佑	シラバスに沿って実施できなかった		○									○		○	○								○	○			できた			
病理解剖学(言語・聴覚・発声・嚥下)	2	後期	選択	1	浅見 知市郎	履修者0のため開講せず																													
解剖学演習	2	前期	必修	1	後藤 達佑	シラバスに沿って実施した		○		○								○	○									○	○			できた			
生理学 I	1	前期	必修	2	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○	○	○							○	○			できた			
生理学 II	1	後期	必修	2	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○	○	○								○	○			できた		
生理学実習	2	前期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した				○							○	○	○	○	○								○	○			できた		
運動学	1	後期	必修	2	高橋 正明	シラバスに沿って実施した		○	○								○	○	○	○	○								○				できた		
運動学実習	2	前期	必修	1	岡崎 大資	シラバスに沿って実施した		○	○									○											○	○			できた		
生化学	1	後期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○										○	○	○	○								○				できた		
人間発達学	2	前期	必修	1	吉岡 和哉	シラバスに沿って実施した		○	○	○								○	○	○	○								○				できた		
生涯発達心理学	2	後期	選択	2	齋藤 吉人	シラバスに沿って実施した				○								○	○	○	○												授業のまとめの提出	できた	
学習・認知心理学	2	前期	選択	2	竹居田 幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○	○								○	○	○	○									○			できた		
心理測定法	2	前期	選択	2	竹居田 幸仁	履修者0のため開講せず																													
行動科学とリハビリテーション	3	後期	選択	1	岡崎 大資	シラバスに沿って実施した		○	○									○	○											○			できた		
病理学	1	後期	必修	2	田村 遼一	シラバスに沿って実施した		○																						○			できた		
公衆衛生学	1	前期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○			○							○	○	○	○									○			できた		
臨床検査・画像診断学演習	2	後期	必修	1	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○										○	○	○	○									○			できた		
臨床医学関連領域論	2	後期	必修	1	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○										○	○	○	○												問題・質問への解答	できた	
整形外科科学	2	前期	必修	1	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○										○	○	○	○												問題・質問への解答	できた	
神経内科学	2	前期	必修	1	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○										○	○	○	○												問題・質問への解答	できた	
精神医学 I	2	前期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○										○	○	○	○												できた		
精神医学 II	2	後期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○		○								○	○	○	○												できた		
リハビリテーション医学	2	後期	必修	2	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○										○	○	○	○												問題・質問への解答	できた	
救急・免疫・感染症学	3	前期	必修	1	佐藤 満	シラバスに沿って実施した		○	○									○	○	○	○												できた		
緩和医療学	3	前期	必修	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○									○	○	○	○												できた		
リハビリテーション概論	1	前期	必修	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○			○							○	○	○	○									○			できた		
チーム医療とリハビリテーション	1	後期	必修	1	馬場 順子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○							○	○	○	○									○			できた		
臨床心理学	2	前期	必修	1	伊藤 菜	シラバスに沿って実施した		○										○												○			できた		
社会福祉・地域サービス論	2	後期	必修	1	金谷 春代	シラバスに沿って実施した		○	○									○	○	○	○												できた		
医療統計学	2	前期	必修	1	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○									○	○	○	○												できた		
作業療法学概論	1	前期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○										○	○	○	○												できた		
基礎作業学	1	前期	必修	1	竹原 敦	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○							○	○	○	○									○	○			できた	
基礎作業学演習	1	後期	必修	1	竹原 敦	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○							○	○	○	○									○	○			できた	
基礎作業学実習	2	前期	必修	1	岡田 直純	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○							○	○	○	○												できた		
生体計測工学	3	後期	選択	1	目黒 力	シラバスに沿って実施した		○	○									○	○	○	○												できた		
作業療法学研究法演習	3	後期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○	○									○	○	○	○												できた		
事例研究法	3	前期	選択	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○							○	○	○	○												できた		
卒業研究	4	後期	選択	2	竹原 敦	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○							○	○	○	○												できた		
作業療法管理学 I	2	前期	必修	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○							○	○	○	○												できた		

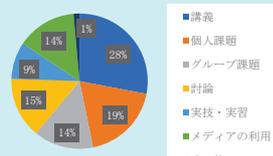
# リハビリテーション学部 作業療法学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法			成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか								
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考				
作業療法管理Ⅱ	3	前期	必修	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○	○						○			○	○									できた		
作業療法評価学	1	後期	必修	2	南 征吾	シラバスに沿って実施できなかった		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○	○				できた	
作業療法評価学演習	2	前期	必修	1	吉岡 和哉	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○						できた	
作業療法評価学実習	2	後期	必修	1	岡田 直純	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○					できた	
作業療法総合評価演習	3	前期	必修	1	岡田 直純	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○					できた	
身体領域の作業療法学	2	後期	必修	2	南 征吾	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○	○				できた	
身体領域の作業療法実習	3	前期	必修	1	南 征吾	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○	○				できた	
認知機能作業療法学	3	前期	必修	1	竹原 敦	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○					できた	
精神領域の作業療法学	2	後期	必修	2	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○	○				○						できた	
精神領域の作業療法実習	3	前期	必修	1	馬場 順子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○					できた	
発達領域の作業療法学	2	後期	必修	1	吉岡 和哉	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○					できた	
発達領域の作業療法演習	3	前期	必修	1	吉岡 和哉	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○		報告会			できた	
老年期の作業療法学	3	前期	必修	1	竹原 敦	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○					できた	
内部障害作業療法学	3	前期	必修	1	南 征吾	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○	○				できた	
作業療法理論	3	後期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○	○							○			できた	
作業療法リーディング	3	後期	必修	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○							○			できた	
義肢装具学	3	前期	必修	1	南 征吾	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○	○				できた	
日常生活活動学	2	前期	必修	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○	○				○						できた	
日常生活活動学実習	3	前期	必修	1	南 征吾	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○	○				できた	
作業療法総合演習	4	後期	必修	1	吉岡 和哉	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○						○	試験			できた	
就労支援技術論	3	後期	必修	1	馬場 順子	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○	○				○	○					できた	
リハビリテーション栄養学	3	前期	必修	1	浅田 春美	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○					できた	
地域作業療法学	3	前期	必修	1	竹原 敦	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○					できた	
生活環境学	3	前期	必修	1	目黒 力	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○	○				○	○					できた	
福祉機器論	3	後期	選択	1	南 征吾	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○	○				できた	
支援工学	3	前期	選択	1	目黒 力	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○	○				○						できた	
国際保健学	4	後期	選択	1	石井 良和	履修者0のため開講せず																								
災害保健学	3	後期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○	○				○						できた	
地域リハビリテーション学	3	後期	必修	1	馬場 順子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○						○				できた	
見学実習	2	後期	必修	2	南 征吾	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○					できた	
作業療法基礎実習Ⅰ	3	後期	必修	3	岡田 直純	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○													学内実習課題・学外実習提出書類			できた	
作業療法基礎実習Ⅱ	3	後期	必修	3	吉岡 和哉	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	報告会				できた	
総合臨床実習Ⅰ	4	前期	必修	8	南 征吾	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○				○	○					できた	
総合臨床実習Ⅱ	4	前期	必修	8	馬場 順子	シラバスに沿って実施した																			学内外による判定				できた	
地域臨床実習	4	後期	必修	1	竹原 敦	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○						○				できた	

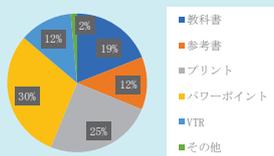
実施内容とシラバスの対応性



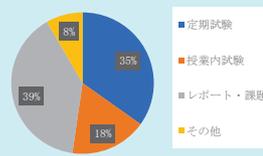
授業の方法



使用した教材



成績評価方法



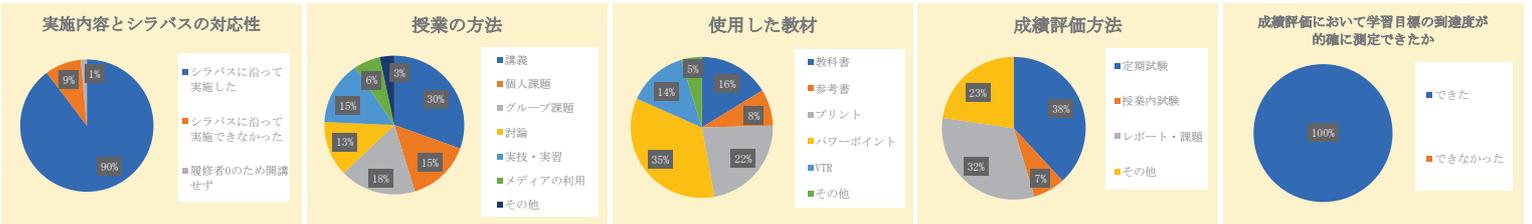
成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか





リハビリテーション学部 言語聴覚学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか					
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考		
発声発語・嚥下障害評価法	2	後期	必修	2	三浦 康子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○	○	OSによる講義とグループワーク	○	○	○	○	○		○		○	グループワークへの参加態度	できた	若干個人差があり、目標レベルが難しいと感じた	
器質性・機能的発話障害支援論	3	前期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○	○						できた			
運動性発話障害支援論	3	後期	必修	2	酒井 哲郎	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○					○	○				○		できた			
聴覚障害学	2	前期	必修	2	岡野 由実	シラバスに沿って実施した		○	○	○								○	○				○		できた			
聴覚検査法	2	後期	必修	2	岡野 由実	シラバスに沿って実施した		○	○	○								○	○				○		できた			
聴覚補償	3	前期	必修	1	岡野 由実	シラバスに沿って実施した		○										○	○				○		できた			
先天性聴覚障害支援論	3	後期	必修	2	岡野 由実	シラバスに沿って実施した		○										○	○				○		できた			
後天性聴覚障害支援論	3	前期	必修	1	岡野 由実	シラバスに沿って実施した		○										○	○				○		できた			
地域参加支援演習Ⅰ	2	後期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○		○	○														ゼミ活動への貢献度	できた		
地域参加支援演習Ⅱ	3	前期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○		○	○			事業の実施											ゼミ活動への貢献度	できた		
聴覚障害演習	3	前期	選択	2	岡野 由実	シラバスに沿って実施できなかった				○	○	○											○	○	通常のお子さん、聴覚表聴者にお越しいただいた	できた		
運動系障害演習	3	後期	選択	2	丹下 弥生	シラバスに沿って実施した		○		○													○	○				
言語系障害演習	3	前期	選択	2	三浦 康子	シラバスに沿って実施できなかった	学生の習熟度、高次系他科目の進捗度に対応し修正	○	○	○	○	○	○		外部演習協力者		○	○	○	○				○	○	演習等の参加内容と評価	できた	バツキあるも概ね達成
小児系障害演習	3	後期	選択	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○		○													○		できた			
見学実習	1	後期	必修	1	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○																	評価表による	できた		
観察実習	2	後期	必修	3	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○																	評価表による	できた		
評価実習	3	後期	必修	6	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○		○															実習評価票	できた		
統合実習	4	前期	必修	6	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○		○															実習評価票	できた		

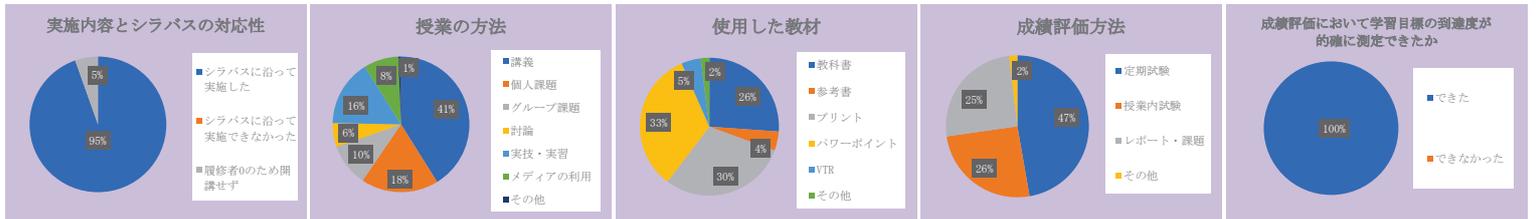


医療技術学部 検査技術学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法								使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか									
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考								
心理学	1	後期	選択	2	竹居田 幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○								○		○							○		できた						
教育心理学	1	後期	選択	2	竹居田 幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○								○		○								○		できた					
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○						○		○						○		できた					
健康スポーツ実技	1	後期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○							○		○					○		○	できた				
生命倫理	2	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○			○							○							○	○			できた				
英語リーディング	1	前期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○	○				○						Microsoft Forms							○			多読 (時数達成)	できた			
医療英語会話	1	後期	必修	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○			○							○		○									できた			
医療英語リーディング	2	後期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○	○			○							Microsoft Forms							○	○	○			できた		
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○			○							○		○										できた		
英語アカデミックリーディング・ライティング	3	前期	選択	1	David Andrews	履修者0のため開講せず																												
データサイエンス入門	1	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																												
大学の学び—専門への誘い	1	前期	必修	1	松下 誠	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○														○	○				できた		
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	松下 誠	シラバスに沿って実施した		○	○	○																							できた	
解剖学Ⅰ	1	前期	必修	1	浅見 知市郎	シラバスに沿って実施した		○											○								○					できた		
解剖学Ⅱ	1	後期	必修	1	浅見 知市郎	シラバスに沿って実施した		○											○								○					できた		
生理学Ⅰ	1	前期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○											○		○						○					できた		
生理学Ⅱ	1	後期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○											○		○						○					できた		
生化学	1	後期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○											○		○						○	○				できた		
組織学	2	前期	必修	1	浅見 知市郎	シラバスに沿って実施した		○											○								○					できた		
組織学実習	2	後期	必修	1	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○	○	○																	○		○			できた		
基礎発生工学	1	前期	必修	1	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○	○												○							○	○				できた	
病理学	1	後期	必修	1	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○	○												○		○									できた		
内科学	2	前期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○														○						○				できた		
老年医学	2	後期	必修	1	田村 遵一	シラバスに沿って実施した		○													○		○									できた		
遺伝と病気	1	後期	選択	1	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○													○		○					○	○			できた		
感染と免疫	1	後期	必修	1	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○												○		○						○	○			できた		
健康食品学	3	前期	必修	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○													○		○					○	○					
生殖医療技術学	2	後期	必修	1	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○	○				○								○		○					○	○			できた		
医学概論	1	前期	必修	2	古田島 伸雄	シラバスに沿って実施した		○														○											できた	
公衆衛生学	1	前期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○				○																○					できた	
カウンセリング	2	前期	選択	1	伊藤 稔	シラバスに沿って実施した		○	○													○								○			できた	
臨床心理学	1	後期	選択	1	竹居田 幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○											○		○								○			できた	
社会福祉・地域サービス論	2	後期	必修	1	金谷 春代	シラバスに沿って実施した		○	○					○															○				できた	
医用電子工学	3	前期	必修	1	花田 三四郎	シラバスに沿って実施した		○														○		○							中間テスト	できた		
医用電子工学実習	3	前期	必修	1	石垣 宏尚	シラバスに沿って実施した		○														○		○								できた		
医療システムとマネジメント	2	前期	選択	1	古田島 伸雄	履修者0のため開講せず																												
情報科学概論	3	後期	必修	1	古田島 伸雄	シラバスに沿って実施した		○															○										できた	
生体計測工学	3	後期	選択	1	富田 浩	履修者0のため開講せず																												
医療統計学	1	前期	必修	1	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○														○		○			○		○			できた	
臨床検査解析学 (Reversed CPC) II	3	後期	必修	1	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○																									できた	
電気泳動分析病態解析学	3	後期	必修	2	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○						○																			できた	
ビットフォール解析学	3	前期	必修	2	松下 誠	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○																				できた	
血液検査学	2	通年	必修	2	林 由里子	シラバスに沿って実施した		○															○		○								できた	
血液検査学実習	3	前期	必修	2	林 由里子	シラバスに沿って実施した		○				○										○		○									できた	
病理検査学	2	前期	必修	2	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○	○																								できた	
病理検査学実習	3	後期	必修	2	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○	○	○																							できた	
細胞診断学	2	後期	必修	1	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○	○																								できた	
臨床検査学総論	2	前期	必修	1	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○																									できた	
医動物学実習	1	前期	必修	1	石垣 宏尚	シラバスに沿って実施した		○						○																			できた	
免疫検査学	2	通年	必修	2	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○		○																							できた	
免疫検査技術学実習	3	前期	必修	2	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○			○																						できた	
臨床化学検査学	2	通年	必修	2	松下 誠	シラバスに沿って実施した		○	○																								できた	

医療技術学部 検査技術学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性						授業の方法						使用した教材						成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか				
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考						
臨床化学検査学実習	3	後期	必修	2	石垣 宏尚	シラバスに沿って実施した						○				○		○				○		○							できた	
RI検査学	3	後期	必修	1	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○								○		○				○	○									
食品衛生学	3	前期	選択	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○								○		○				○	○									
遺伝子検査学	2	前期	必修	1	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○									○					○	○									できた
遺伝子検査学実習	2	後期	必修	1	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○				○					○		○				○	○								できた
輸血検査学	3	前期	必修	2	林 由里子	シラバスに沿って実施した		○		○		○				○		○				○										
輸血検査学実習	3	後期	必修	2	高橋 あゆ子	シラバスに沿って実施した						○					○		○			○										できた
微生物検査学	2	後期	必修	2	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○								○		○				○										できた
微生物検査学実習	3	前期	必修	2	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○	○			○				○		○				○	○	○								できた
ウイルス検査学	2	前期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○			○					○		○				○										できた
生理機能検査学実習	3	前期	必修	2	古田島 伸雄	シラバスに沿って実施した						○				○		○					○									できた
画像解析検査学	3	前期	必修	2	古田島 伸雄	シラバスに沿って実施した		○								○		○				○										できた
生理検査判読学演習	3	後期	必修	2	古田島 伸雄	シラバスに沿って実施した		○	○			○				○							○									できた
医療現場と臨床検査	2	後期	必修	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○			○					○		○				○		○								
関係法規	1	前期	必修	2	石垣 宏尚	シラバスに沿って実施した		○								○		○				○										できた
臨床検査学総合演習Ⅰ	3	後期	必修	2	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○								○		○				○										できた
臨床検査学総合演習Ⅱ	4	後期	必修	2	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○								○		○				○										できた
医療安全管理学演習	2	前期	必修	1	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○				○				○		○		○		○										できた
医療機器管理学	1	後期	必修	1	石垣 宏尚	シラバスに沿って実施した						○				○		○				○		○								できた
総合実習（臨地実習前技能評価）	3	後期	必修	1	松下 誠	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○			○	○	○	○	○			○	○								できた
臨地実習	4	前期	必修	11	松下 誠	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○			○	○	○							できた
卒業研究	4	通年	必修	8	松下 誠	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○				○								できた

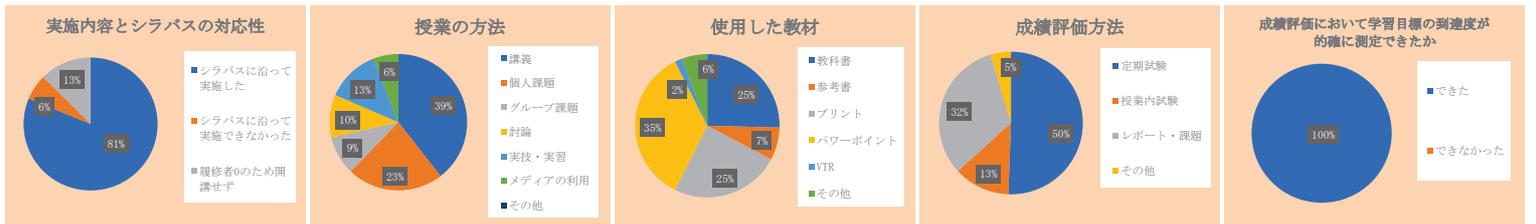


医療技術学部 放射線学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか										
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考								
心理学	1	後期	選択	2	伊藤 菜	シラバスに沿って実施した		○	○							○										○		できた						
教育心理学	1	後期	選択	2	伊藤 菜	シラバスに沿って実施した		○	○																		○		できた					
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○													○		できた						
健康スポーツ実技	1	後期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○						○		板書					○	○	できた						
生命倫理	2	後期	選択	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○															○	○	できた						
哲学	1	前期	選択	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○															○	○	できた						
基礎化学	1	前期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○																		○		できた						
化学	1	後期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○																		○		できた						
英語リーディング	1	前期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○	○																○	○	多読（語数達成数）	できた					
医療英語リーディング	2	後期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○	○																○	○	○	できた					
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	履修者0のため開講せず																												
英語アカデミックリーディング・ライティング	3	前期	選択	1	徳永 慎也	履修者0のため開講せず																												
情報リテラシー	1	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																												
データサイエンス入門	1	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																												
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した		○	○																		○		できた					
解剖学Ⅰ	1	前期	必修	1	浅見 知市郎	シラバスに沿って実施した		○																		○		できた						
解剖学Ⅱ	1	後期	必修	1	浅見 知市郎	シラバスに沿って実施した		○																		○		できた						
病理学	1	前期	必修	1	田村 遼一	シラバスに沿って実施した		○																		○		できた						
生化学	1	前期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○																		○		できた						
公衆衛生学	1	後期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○	○	○																○								
看護技術論	2	後期	選択	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○			○	○															○	各回のMinutesPaper	できた					
臨床心理学	2	前期	選択	1	伊藤 菜	シラバスに沿って実施した		○																			○		できた					
画像診断学Ⅰ	2	後期	必修	2	渡邊 城大	シラバスに沿って実施した		○																		○	○	できた						
画像診断学Ⅱ	3	前期	選択	2	渡邊 城大	シラバスに沿って実施した		○																		○	○	できた						
医療基礎数学	1	前期	選択	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○																	自作ノート	○		できた					
医療基礎化学	1	前期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施できなかった		○																		○		できた						
医療基礎物理学	1	前期	必修	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○																									
医療電気・電子工学Ⅰ	1	前期	必修	2	高橋 哲彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○															○	○	できた						
医療電気・電子工学Ⅱ	1	後期	選択	2	高橋 哲彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○															○	○	できた						
医療電気・電子工学実験	2	後期	選択	1	高橋 哲彦	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○														○		できた					
医療統計学	2	後期	必修	1	今尾 仁	シラバスに沿って実施した		○	○																	○		データ解析用ソフトウェア	○	○	できた			
放射線医療学概論	1	前期	必修	2	渡邊 城大	シラバスに沿って実施した		○		○																	○		できた					
放射線救急医学	2	後期	選択	1	加藤 英樹	履修者0のため開講せず																												
放射線文獻講読Ⅰ	3	前期	選択	1	渡邊 浩	履修者0のため開講せず																												
放射線文獻講読Ⅱ	3	後期	選択	1	西澤 徹	履修者0のため開講せず																												
放射線物理学Ⅰ	2	前期	必修	2	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○																	自作ノート	○	○	できた					
放射線物理学Ⅱ	2	後期	必修	2	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○																	自作ノート	○	○	できた					
放射化学	2	前期	必修	2	酒井 健一	シラバスに沿って実施できなかった		○																		○		できた						
放射化学演習	2	後期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○		○																	○		できた					
放射線生物学	1	後期	必修	2	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○																			○		できた					
放射線計測学Ⅰ	2	後期	必修	2	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○																			○		できた					
放射線計測学Ⅱ	3	前期	必修	1	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○																			○		できた					
放射線計測学実験	3	前期	必修	1	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○																			○	○	できた					
診療放射線学概論	1	前期	必修	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○														○	○	○	○	できた				
診療画像検査学概論	1	後期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施できなかった		○	○																	○	○		○	○	できた			
診療放射線学総合臨床実習	4	前期	必修	2	西澤 徹	シラバスに沿って実施した					○																		実習先評価	○	○	できた		
診療画像解析学Ⅰ	1	後期	必修	2	渡邊 城大	シラバスに沿って実施した		○																		○	○			○	○	できた		
診療画像解析学Ⅱ	2	前期	必修	2	今尾 仁	シラバスに沿って実施した		○																		○				○	○	できた		
診療画像解析学実習Ⅰ	3	前期	必修	1	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した					○															○	○			○	○	できた		
診療画像解析学実習Ⅱ	3	前期	必修	1	今尾 仁	シラバスに沿って実施した					○															○	○			○	○	できた		
診療画像解析学実習Ⅲ	3	後期	必修	1	渡邊 城大	シラバスに沿って実施した					○															○	○			○	○	できた		
診療画像解析学特論	3	後期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○	○		○															○	○			○	○	○	○	できた

医療技術学部 放射線学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか									
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考						
医療放射線機器学Ⅰ	1	後期	必修	2	高橋 哲彦	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○	○	○			○					○			できた			
医療放射線機器学Ⅱ	2	前期	必修	2	今尾 仁	シラバスに沿って実施した		○							○						○							○		できた		
診療画像解剖学Ⅰ	1	後期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○	○				○		○	○	○	○			○	○	○					○		できた		
診療画像解剖学Ⅱ	2	前期	必修	2	渡邊 城大	シラバスに沿って実施した		○							○						○	○							○		できた	
核医学検査技術学Ⅰ	2	前期	必修	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した		○	○						○						○		○						○		できた	
核医学検査技術学Ⅱ	2	後期	必修	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した		○	○						○						○		○						○		できた	
核医学機器工学	3	前期	必修	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した		○	○						○						○		○						○		できた	
放射線防護学	3	後期	必修	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した		○	○						○						○		○						○		できた	
核医学検査技術学実習	3	後期	必修	1	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した			○	○			○			○	○	○			○		○						○		できた	
核医学検査技術学臨床実習	4	前期	必修	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した			○				○																	臨床実習病院評価に基づいて最終評価	できた	
医療画像情報学Ⅱ	2	後期	必修	2	土田 拓治	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○	○	○			○	○							○		できた	
医療画像工学	3	前期	必修	1	星野 洋満	シラバスに沿って実施した		○									○				○								○		できた	
放射線安全管理学	3	前期	必修	2	島崎 綾子	シラバスに沿って実施した		○							○						○	○							○		できた	
放射線関係法規	2	後期	必修	1	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○									○				○								○		できた	
放射線感染制御学	3	後期	必修	2	星野 洋満	シラバスに沿って実施できなかった		○	○	○			○	○							○		○						○		できた	
医療安全管理学	3	前期	必修	2	島崎 綾子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○		○		○	○			○		○						○		できた	
放射線科学特別講義	4	前期	選択	1	渡邊 浩	履修者0のため開講せず																										
診療放射線学総合演習	4	通年	必修	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した		○							○						○		○						○		できた	
診療放射線技術と研究	3	後期	必修	1	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した		○	○																				○		できた	
診療放射線学研究Ⅰ	3	後期	必修	1	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○					○	○											○		できた	
診療放射線学研究Ⅱ	4	通年	必修	4	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○					○	○											○		できた	

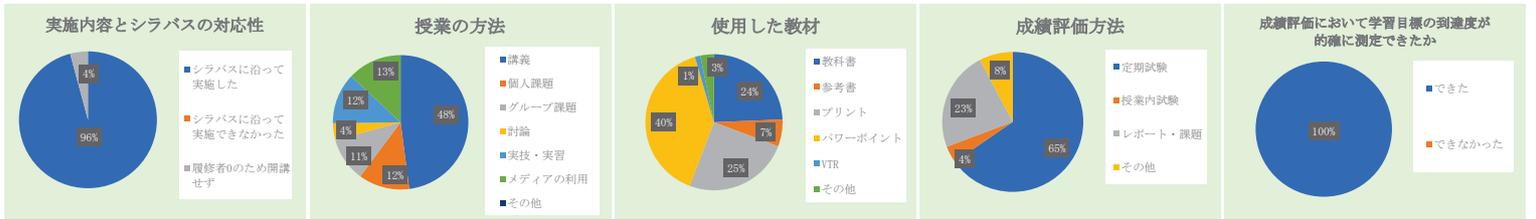


医療技術学部 臨床工学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法								使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか										
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考									
心理学	1	後期	必修	2	伊藤 葵	シラバスに沿って実施した		○	○								○								○				できた						
教育心理学	1	後期	選択	2	伊藤 葵	シラバスに沿って実施した		○	○										○							○				できた					
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○						○	○					○					できた					
健康スポーツ実技	1	後期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○							○	○	○				○	○				できた				
生命倫理	2	後期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○								○	○					できた				
哲学	1	前期	選択	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○								○						○	○					できた				
基礎化学	1	前期	必修	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○											○						○						できた				
化学	1	後期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○											○						○						できた				
英語リーディング	1	前期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○	○			○							○		○				○		○		多読 (語彙量)		できた			
医療英語リーディング	2	後期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○	○			○							○		○				○	○	○				できた			
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	履修者0のため開講せず																													
英語アカデミックリーディング・ライティング	3	前期	選択	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○					○														○					できた			
情報リテラシー	1	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																													
大学の学び—専門への誘い—	1	後期	必修	1	大瀨 和也	シラバスに沿って実施した				○	○	○	○													○						できた			
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	大瀨 和也	シラバスに沿って実施した				○	○	○	○														○						できた		
解剖学 I	1	前期	必修	1	浅見 知市郎	シラバスに沿って実施した		○											○		○					○						できた			
解剖学 II	1	後期	必修	1	浅見 知市郎	シラバスに沿って実施した		○											○		○					○						できた			
生理学演習	2	後期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○	○										○		○					○						できた			
生化学	1	前期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○										○	○	○						○						できた			
基礎医学実習	2	前期	必修	1	西村 裕介	シラバスに沿って実施した		○	○	○			○															○					できた		
医学概論	1	前期	必修	1	大瀨 和也	シラバスに沿って実施した		○											○	○	○					○							できた		
公衆衛生学	1	後期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○		○									○		○					○							できた		
病理学	1	前期	必修	1	田村 遵一	シラバスに沿って実施した		○											○		○					○							できた		
病理学演習	2	後期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○	○										○		○					○							できた		
臨床免疫学	2	後期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○											○		○					○							できた		
薬理学演習	2	後期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○	○										○		○					○							できた		
臨床心理学	2	前期	選択	1	伊藤 葵	シラバスに沿って実施した		○										○		○								○					できた		
臨床検査学総論	2	後期	選択	2	高橋 あゆ子	履修者0のため開講せず																													
応用数学	1	後期	必修	2	花田 三四郎	シラバスに沿って実施した		○											○	○						○							できた		
医用電気工学実習	1	後期	必修	1	松岡 雄一郎	シラバスに沿って実施した							○						○	○							実習器材		○				できた		
医用電子工学	2	前期	必修	2	松岡 雄一郎	シラバスに沿って実施した		○											○		○					○							できた		
医用電子工学実習	2	前期	必修	1	松岡 雄一郎	シラバスに沿って実施した							○							○	○						実習器材		○				できた		
計測工学	1	後期	必修	2	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○											○		○					○							できた		
医用超音波工学	2	前期	必修	1	松岡 雄一郎	シラバスに沿って実施した		○											○		○					○							できた		
放射線工学概論	2	後期	必修	1	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○												○		○				○							できた		
医用機械工学	2	前期	必修	2	花田 三四郎	シラバスに沿って実施した		○											○	○	○					○							できた		
基礎工学実験	1	後期	必修	1	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した				○		○							○	○								○					できた		
医療情報処理工学	2	後期	必修	2	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○											○		○					○							できた		
医用情報通信工学	3	前期	必修	1	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○											○		○					○							できた		
医用工学概論	1	前期	必修	1	大瀨 和也	シラバスに沿って実施した		○					○						○		○					○							できた		
人間工学	2	前期	必修	2	松岡 雄一郎	シラバスに沿って実施した		○		○									○		○					○							グループ発表内容	できた	
医用レーザ工学	3	前期	選択	2	松岡 雄一郎	シラバスに沿って実施した		○											○		○					○							できた		
生体物性工学	3	前期	必修	2	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○											○		○					○							できた		
医用機器学概論	1	後期	必修	1	大瀨 和也	シラバスに沿って実施した		○					○						○	○						○							できた		
医用治療機器学	2	後期	必修	2	西村 裕介	シラバスに沿って実施した		○					○						○		○					○							できた		
医用治療機器学	3	前期	必修	2	西村 裕介	シラバスに沿って実施した		○					○						○		○					○							できた		
医用治療機器学実習	3	後期	必修	1	西村 裕介	シラバスに沿って実施した		○	○	○		○							○		○							○					できた		
生体計測装置学	2	前期	必修	2	島崎 直也	シラバスに沿って実施した		○											○		○					○							できた		
生体計測装置学演習	2	後期	必修	1	島崎 直也	シラバスに沿って実施した		○											○		○					○							できた		
生体機能代行技術学 (呼吸)	2	後期	必修	1	近土 真由美	シラバスに沿って実施した		○					○		○				○		○					○							できた		
生体機能代行技術学 (循環)	2	後期	必修	1	齋藤 慎	シラバスに沿って実施した		○											○		○					○							できた		

医療技術学部 臨床工学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか								
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考						
生体機能代行技術学（代謝）	2	後期	必修	1	大演 和也	シラバスに沿って実施した		○					○				○	○									○				できた	
生体機能代行装置学Ⅰ	3	前期	必修	2	大演 和也	シラバスに沿って実施した		○					○				○	○										○			できた	
生体機能代行装置学Ⅱ	3	前期	必修	2	齋藤 慎	シラバスに沿って実施した		○								○												○			できた	
生体機能代行装置学実習	3	後期	必修	1	近土 真由美	シラバスに沿って実施した			○				○	○			○	○	○	○									○		できた	
呼吸療法技術学	3	前期	必修	2	近土 真由美	シラバスに沿って実施した		○						○			○	○	○	○								○			できた	
呼吸療法技術学実習	3	後期	必修	1	近土 真由美	シラバスに沿って実施した			○				○	○			○	○	○	○									○		できた	
体外循環技術学	3	前期	必修	2	齋藤 慎	シラバスに沿って実施した		○								○												○			できた	
体外循環技術学実習	3	後期	必修	1	齋藤 慎	シラバスに沿って実施した							○				○												○		できた	
血液浄化療法技術学	3	前期	必修	2	近土 真由美	シラバスに沿って実施した		○						○			○	○	○	○								○			できた	
血液浄化療法技術学実習	3	後期	必修	1	宮川 浩之	シラバスに沿って実施した		○	○	○			○	○			○	○	○	○									○	実技試験	できた	
医用機器安全管理学Ⅰ	2	前期	必修	2	宮川 浩之	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○	○	○								○			できた	
医用機器安全管理学Ⅱ	2	後期	必修	2	大演 和也	シラバスに沿って実施した		○									○	○										○			できた	
医療安全工学	2	後期	選択	2	宮川 浩之	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○										○			できた	
生体計測装置学実習	2	後期	必修	1	島崎 直也	シラバスに沿って実施した				○			○			○												○	プレゼンテーション	できた		
関係法規	3	前期	必修	1	齋藤 慎	シラバスに沿って実施した		○									○											○			できた	
臨床医学総論Ⅰ	2	前期	必修	2	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○								○												○			できた	
臨床医学総論Ⅱ	2	後期	必修	2	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○								○												○			できた	
臨床医学総論Ⅲ	3	前期	必修	2	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○								○												○			できた	
救急救命医学	3	前期	選択	2	西村 裕介	シラバスに沿って実施した		○						○				○										○			できた	
臨床実習Ⅰ	4	前期	必修	4	大演 和也	シラバスに沿って実施した							○																○		できた	
臨床実習Ⅱ	4	前期	必修	3	大演 和也	シラバスに沿って実施した							○																○		できた	
臨床工学総合演習Ⅰ	3	通年	必修	2	近土 真由美	シラバスに沿って実施した		○		○	○					○	○	○	○										○	中間試験	できた	
臨床工学総合演習Ⅱ	4	後期	必修	2	大演 和也	シラバスに沿って実施した		○									○	○										○			できた	
臨床工学英文講読	3	後期	選択	2	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○											○			できた	
臨床工学研究セミナー	4	前期	選択	2	花田 三四郎	シラバスに沿って実施した		○								○	○											○			できた	
卒業研究	4	通年	必修	4	大演 和也	シラバスに沿って実施した				○	○	○						○												発表、論文	できた	

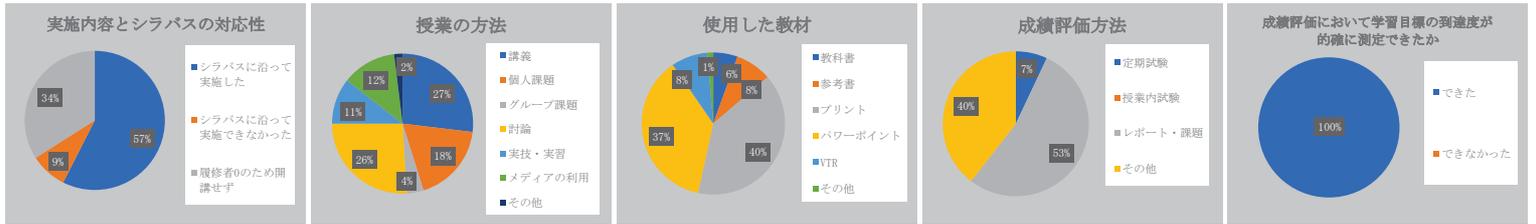


保健科学研究科保健科学専攻博士前期課程 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか											
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考									
医療倫理学特論	1・2	後期	選択	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○														○	○			できた								
公衆衛生学総論	1・2	前期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した					○																討議	できた							
生薬補助医療技術学特論	1・2	前期	選択	2	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○	○																			○	できた						
データ分析特論	1・2	前期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○							○									○				○	できた					
医療安全管理学特論	1・2	前期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した					○																	討議	できた						
情報アクセシビリティ学特論	1・2	前期	選択	2	木村 朗	履修者0のため開講せず																													
研究方法特論	1	前期	必修	1	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○																					討議						
保健科学特別セミナー	1	後期	必修	2	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○																					○	できた					
看護学研究方法論	1	前期	選択	1	齋藤 基	履修者0のため開講せず																													
成人看護学特論	1	前期	選択	2	萩原 英子	履修者0のため開講せず																													
成人看護学演習	1	後期	選択	2	萩原 英子	履修者0のため開講せず																													
ウイメンズヘルス・助産学特論	1	前期	選択	2	中島 久美子	履修者0のため開講せず																													
ウイメンズヘルス・助産学演習	1	後期	選択	2	中島 久美子	履修者0のため開講せず																													
発達看護学特論	1	前期	選択	2	中下 富子	履修者0のため開講せず																													
発達看護学演習	1	後期	選択	2	中下 富子	履修者0のため開講せず																													
地域・在宅看護学特論	1	前期	選択	2	齋藤 基	履修者0のため開講せず																													
地域・在宅看護学演習	1	後期	選択	2	小林 亜由美	履修者0のため開講せず																													
看護学特別研究	2	通年	選択	10	中島 久美子	シラバスに沿って実施できなかった			○																				○	プレゼンテーション・学術論文	できた				
リハビリテーション学研究方法論	1	前期	選択	1	佐藤 満	シラバスに沿って実施できなかった		開講額を変更した	○																					○	できた				
総合学療法学特論	1	後期	選択	2	佐藤 満	シラバスに沿って実施できなかった		開講額を変更した	○																						○	討議の内容	できた		
総合学療法学演習	1	後期	選択	2	佐藤 満	シラバスに沿って実施できなかった		開講額を変更した	○																						○	討議の内容	できた		
病因・病態検査学研究方法論	1	前期	選択	1	松下 誠	シラバスに沿って実施した			○	○		○	○			○																○	できた		
遺伝子・血液情報検査学演習	1	後期	選択	2	林 由里子	履修者0のため開講せず																													
生体分子情報検査学特論	1	前期	選択	2	松下 誠	シラバスに沿って実施した			○	○		○	○			○																○	できた		
生体分子情報検査学演習	1	後期	選択	2	松下 誠	シラバスに沿って実施した			○	○		○	○			○																○	できた		
組織細胞・生薬補助技術学特論	1	前期	選択	2	岡山 香里	履修者0のため開講せず																													
組織細胞・生薬補助技術学演習	1	後期	選択	2	岡山 香里	履修者0のため開講せず																													
病因・病態検査学特別研究	2	通年	選択	10	松下 誠	シラバスに沿って実施した			○	○		○	○																		○	できた			
病因・病態検査学特別研究	2	通年	選択	10	亀子 光明	シラバスに沿って実施した			○			○																			○	できた			
病因・病態検査学特別研究	2	通年	選択	10	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した				○		○																				論文、実験書、学会参加等	研究論文の作成および論文発表会	できた	
病態検査解析学特論	1	前期	選択	2	松下 誠	シラバスに沿って実施した			○	○		○	○																			○	できた		
放射線学研究方法論	1	前期	選択	1	渡邊 浩	履修者0のため開講せず																													
放射線教育学特論	1	前期	選択	2	西澤 徹	履修者0のため開講せず																													
放射線教育学演習	1	後期	選択	2	西澤 徹	履修者0のため開講せず																													
放射線防護学特論	1	前期	選択	2	渡邊 浩	履修者0のため開講せず																													
放射線防護学演習	1	後期	選択	2	渡邊 浩	履修者0のため開講せず																													
放射線利用学特論	1	前期	選択	2	酒井 健一	履修者0のため開講せず																													
放射線利用学演習	1	後期	選択	2	酒井 健一	履修者0のため開講せず																													
放射線学特論	1	後期	選択	2	加藤 英樹	履修者0のため開講せず																													
臨床工学研究方法論	1	前期	選択	1	大瀧 和也	シラバスに沿って実施した			○	○																						○	できた		
生体情報医学特論	1	前期	選択	2	花田 三四郎	シラバスに沿って実施した																										○	討議による理解	できた	
生体情報医学演習	1	後期	選択	2	花田 三四郎	シラバスに沿って実施した																										○	実習による達成度	できた	
臨床工学特別研究	2	通年	選択	10	大瀧 和也	シラバスに沿って実施した			○	○																						○	できた		
臨床工学特別研究	2	通年	選択	10	湯本 真人	シラバスに沿って実施した																										○	できた		
臨床工学特論	1	後期	選択	2	大瀧 和也	シラバスに沿って実施した			○	○																						○	できた		
疫学特論	1・2	前期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した																											討議	できた	
生物統計学特論	1・2	前期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した			○	○																							○	できた	
健康行動科学特論	1・2	前期	選択	2	小林 亜由美	シラバスに沿って実施した			○	○																						○	プレゼンテーション	できた	
公衆衛生学研究方法論	1	前期	選択	1	木村 博一	シラバスに沿って実施した																										○	討議	できた	
感染症疫学・感染制御学特論	1	前期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した																										○	討議	できた	
感染症疫学・感染制御学演習	1	後期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した																											○	演習結果、討議	できた

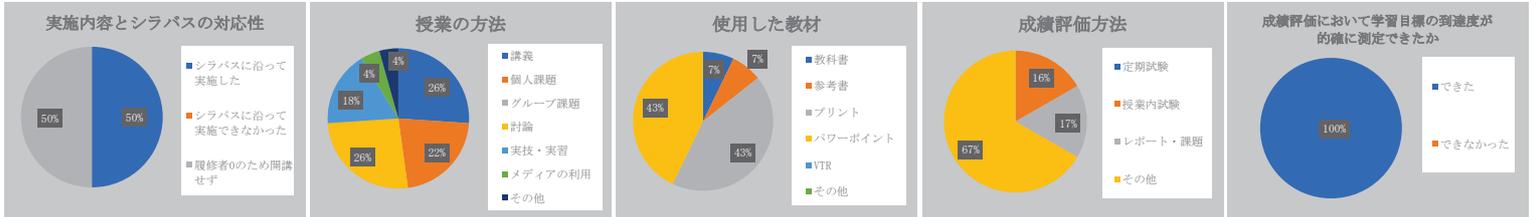
保健科学研究科保健科学専攻博士前期課程 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法			成績評価において学習目標の到達度的に測定できたか					
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考		
公衆衛生看護学特論	1	前期	選択	2	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○	○		○							○	○					○			できた	
公衆衛生看護学演習	1	後期	選択	2	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○	○		○							○	○					○			できた	
身体活動疫学特論	1	前期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○				○	○	○			○		○			できた	
身体活動疫学演習	1	後期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○				○	○	○			○		○			できた	
保健医療情報学特論	1	前期	選択	2	星野 修平	履修者0のため開講せず																						
保健医療情報学演習	1	後期	選択	2	星野 修平	履修者0のため開講せず																						
公衆衛生学特別研究	2	通年	選択	10	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○	○		○	○						○	○							左記を総合的に勘案	できた	
公衆衛生学特別研究	2	通年	選択	10	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○		○	○	○	学会参加経験			○	○	○	○				○			できた	
感染症学特論	1	後期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○			○							○	○						討論		できた	
先端感染制御学特論	2	前期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○			○							○	○						討論		できた	



保健科学研究科保健科学専攻博士後期課程 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか												
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考										
生命研究倫理論	1	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した			○	○		○														○						できた				
医療科学研究法 (生体分子・病原体遺伝子)	1	前期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した			○	○		○	○																				右記を総合的に勘案	できた		
医療科学研究法 (細胞機能・生体補助技術)	1	前期	選択	2	荒木 泰行	履修者0のため開講せず																														
医療科学研究法 (生体機能)	1	前期	選択	2	木村 朗	履修者0のため開講せず																														
特講 (生体分子・病原体遺伝子)	1	前期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した			○			○																						討論	できた	
特講 (細胞機能・生体補助技術)	1	前期	選択	2	荒木 泰行	履修者0のため開講せず																														
特講 (生体機能)	1	前期	選択	2	木村 朗	履修者0のため開講せず																														
演習 (生体分子・病原体遺伝子)	1	後期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した			○	○		○	○																					右記を総合的に判断	できた	
演習 (細胞機能・生体補助技術)	1	後期	選択	2	荒木 泰行	履修者0のため開講せず																														
演習 (生体機能)	1	後期	選択	2	木村 朗	履修者0のため開講せず																														
医療科学特別研究	1-2	通年	必修	6	木村 博一	シラバスに沿って実施した			○	○		○	○																					右記を総合的に勘案	できた	
医療科学特別研究	1-2	通年	必修	6	木村 朗	シラバスに沿って実施した			○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○														学位論文のまとめが決定した後、再見学期に入りができなかったが、研究は完遂行された	できた



## II. 研究活動の記録

研究活動の記録は、専任教員の研究活動状況について収集したデータである。

研究活動状況を広く社会へ公表することにより、地域の方々と連携した生涯学習や課題解決に取り組んだり、企業等との受託研究や共同研究などのかたちで研究成果の社会還元を促進したりすることを通じて、大学の目的である「地域社会への貢献」を恒常的に実施し、定着させることを目的としている。また、個人で毎年研究実績を振り返ることにより PDCA サイクルを機能させ、研究活動の推進と質の向上を図っている。

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学部 氏名 齋藤 基

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1 病院の勤務経験を有する新人訪問看護師の職業的アイデンティティのゆらぎ自己評価尺度の開発 (査読付)	共著	2024年9月	日本看護研究学会雑誌 第47巻4号 pp. 813-823	<p>病院勤務経験を有する新人訪問看護師の職業的アイデンティティのゆらぎを測定する自己評価尺度の開発を目的とした。病院勤務経験3年以上、訪問看護歴2年未満の看護師10,000人に55項目の質問紙調査を行い、有効回答917人を対象として分析した。探索的因子分析により4因子23項目が抽出され、尺度全体の信頼性（Cronbach's <math>\alpha</math> = .903）および再テスト信頼性（ICC = .755）は高水準であった。さらに、確認的因子分析や既知グループ法、収束的妥当性の検討においても統計学的に妥当性が確認された。以上の結果から本尺度は新人訪問看護師の職業的アイデンティティのゆらぎの強さを評価する尺度として活用可能性が示唆された。</p> <p>本人担当部分：研究計画立案、データ収集、データ分析、論文作成を共同で担当した。 共著者：浅井直美、飯田苗恵、<b>齋藤 基</b>、大澤真奈美</p>
2 地域・在宅看護展開論における模擬患者参加型シミュレーション教育の実践 (査読付)	共著	2025年3月	群馬パース大学紀要 第31号 pp. 23-29	<p>地域・在宅看護展開論において模擬患者を活用したシミュレーション教育を実施した。今回の訪問看護演習では、在宅療養の場面において、問いかけや関わりの工夫によって得られる情報の質の違いを学生が実感する機会となった。実践を通して傾聴や観察、非言語的な反応への配慮の重要性に気づく学生も多く、学修意欲や主体的な学びの姿勢が促進された。一方で、教員のファシリテーション力のさらなる向上や、学生の学修成果をどのように評価するかといった課題も浮き彫りとなった。今後は、より効果的な教育手法の工夫とともに学修評価の枠組みの構築が求められる。</p> <p>本人担当部分：研究計画立案、データ収集、データ分析、論文作成を共同で担当した。 共著者：反町真由、林 恵、<b>齋藤 基</b></p>

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 医療的ケア児の児童発達支援または保育所等の利用に対する親の認識の構造	—	2024年12月	第44回日本看護科学学会学術集会 (熊本県熊本市)	<p>医療的ケア児の児童発達支援等の利用に対する親の認識の要素とその構造を明らかにし、必要な支援を検討することを目的とした。A県内の6市町村に在住する児童発達支援等の利用を経験した医療的ケア児の親10人を対象に半構造化面接を実施し、KJ法で分析した。その結果、親の認識は3要素に統合され、【就学を見据え、発達のため障害レベルに応じた所に、安全に楽しく通わせたい】【子育て優先を強いられず、仕事復帰や家事のため9時5時で毎日保育園に預けたい】の希望から利用手続きに進むが、【療育に追われ健常児への引け目や障害の開示に抵抗がある中で、分かりにくい利用手続きは負担だ】というように葛藤がある構造であった。</p> <p>共同発表者：林恵、飯田苗恵、反町真由、<b>齋藤基</b></p>
2 児童虐待に関わる市町村保健師の実践活動に関する文献レビュー	—	2025年1月	第13回日本公衆衛生学会学術集会 (愛知県名古屋市)	<p>市町村保健師の児童虐待に関する実践活動を明らかにするため、2019年以降に発表された文献の中から市町村保健師に関する8件を質的記述的に分析した。その結果、保健師の活動は8カテゴリに分類され、【関係者・関係機関の連携および協働を促す】【虐待予防に向けて地域の見守り体制を構築する】【保健師に徹し、母親に寄り添いながら母親を育てる】【常に子どもに目を向け、健全育成を目指している】【母親とともに、日常生活の基盤を整える】【母親の身近な存在として、母親を受けとめ信頼関係を構築する】【家族の成長を促す】に関する7カテゴリおよび保健師の想いとして【保健師は不全感を抱きながら児童虐待の支援にあたっている】に関する1カテゴリであった。また、保健師が支援の中で不全感を抱く現状も示され、今後さらなる研究が必要であることが示唆された。</p> <p>共同発表者：赤堀八重子、中山直子、坪井りえ、<b>齋藤基</b>、倉林しのぶ、武居明美、黒岩あゆみ</p>

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属      看護学科      氏名      矢島正榮

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
教育評価準備委員会活動報告	共著	2024年5月	保健師教育保健師教育 Vol. 8 No. 1 p. 49	保健師教育の質保証を図るための分野別外部評価機構の設立を目的とする本委員会の2023年度の活動について、2022年度に実施したニーズ調査の詳細分析に基づく組織・運営体制、経費シミュレーション、保健師教育評価のフロー並びに評価項目の検討の進捗状況について報告した。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (村嶋幸代、神崎由紀、中山直子、矢島正榮、西出りつ子、小野治子、麻原きよみ、荒木田美香子、岩本里織)

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 小林 亜由美

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
新型コロナウイルス感染症パンデミックによる女性看護職の業務と生活への影響 —日本ナースヘルス研究・WEB特別調査より—（査読付）	共著	2024年10月	日本健康学会誌Vol. 90 No. 5 pp141-154	新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックが看護師の業務と日常生活にどのような影響を与えたかを明らかにするため、ウェブ調査を実施した。2020年のパンデミック開始時に看護師として勤務していた2,322名のうち、1,225名（52.8%）がパンデミックの2年間にCOVID-19関連の業務を経験し、COVID-19に関する業務への従事によって勤務時間が増加していた。一方で感染拡大防止のため業務を自重したり、自身の健康を考慮して就業を制限したり、社会的要請を受け復職する、など業務状況の変化を経験していた。運動や趣味の時間が減るなどの生活の変化も見られたことから、COVID-19関連業務への従事は看護師の負担を増加させていることが示唆された。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共著者：伊藤 歩美，宮崎 有紀子，小林 亜由美，李 廷秀，長井 万恵，井手野 由季，林 邦彦

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 早川有子

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
学会発表 在留外国人の母親・医療スタッフが共有できる母乳育児支援教材の開発と活用 の実践	共著	令和6年9月7日	第37回日本保健福祉学会	在留外国人が増える中、わが国で出産する子どもの数も増えており、その中でも母乳育児に支援が必要な症例が増えている。我々は、第35回日本母乳哺育学会・学術集会で、既に日本に在留する外国人母親の母乳育児支援に対する実態調査と教材開発について報告した（2021年9月）。その後、開発した教材をさらに改良し冊子を完成させた（9ヶ国語翻訳2022年9月）。そこで、今回はこの冊子の紹介と母親・医療スタッフが冊子の活用を試みたので報告する。

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属                      看護学科                      氏名                      中下 富子

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
外国人の親をもつ児童生徒の健康課題解決に向けた養護教諭による支援プロセス（査読付）	共著	令和6年8月	日本看護科学学会誌, Vol. 44, 922-931, 2024	本研究は、外国人の親をもつ児童生徒の心身の健康課題解決に向けた養護教諭の支援プロセスを明らかにした。対象養護教諭10名に対し半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにより分析を行った。結果、養護教諭による支援は、児童生徒の「健康課題の発生」から始まり、言葉と文化の違いにより、健康課題への対応が速やかにできないため、連携して【言葉と文化の違いを補って健康課題を明確化】し、傷病の予防や管理ができるよう子どもと保護者に健康管理の方法を伝えるとともに、学校外のネットワークを活用して【国は違っても子供は同じという認識のもとに保護者を巻き込み支援する】段階へと変化し、健康課題への「自己管理を評価する」プロセスが導き出された。 （調査の遂行、全体の考察、執筆を担当）（筆頭論文） （中下 富子, 桐生 育恵, 生方 明日香, 内山 かおる, 佐藤 由美）

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属      看護学科      氏名      西川 薫

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
精神科病院における看護職員の看取りに対する看護部長の評価（査読付）	共著	令和7年3月	仏教看護・ビハーラ	本研究は、精神科病院における看護職員による終末期ケアに関する看護部長の評価を明らかにすることを目的とした。研究対象者は、2015年5月末時点で日本精神科病院協会に登録されていた単科精神科病院801箇所の全数に所属する看護部長とした。分析方法は、看護部長の終末期ケアに関する認識に関する探索的因子分析を用いて目標因子を導出した。また、看護職員の特性やその他の変数を含む複数の説明因子を用いたステップワイス重回帰分析を実施した。その結果、看護助手・准看護師数、および看護師の平均勤続年数に関して有意な増加が認められた。（共同研究につき、本人分担部分抽出不可能） 共著者：西川 薫、佐藤和也、傳谷典子、瀧口徹

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 萩原英子

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
なし				

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
A Qualitative Study of Peer Support Sought by Young Survivors with Female Specific Cancer (若年女性がんサバイバーがピア・サポーターに求める支援) (査読付)	共著	令和7年2月	THE KITAKANTO MEDICAL JOURNAL (北関東医学) 75巻1号 p. 49-54	若年女性がんサバイバーがピアサポーターに求めている支援を明らかにすることを目的とし、診断時年齢20～39歳の婦人科がんまたは乳がんサバイバー12名を対象に半構造化面接調査を実施した。分析の結果、【インターネット上でのピアサポーターのリアルな体験による助けが欲しい】【ピアサポーターとの関わりで不安をやわらげたい】【より自分に近い状況のピアサポーターと関わりを持ちたい】【ピアサポーターと育児・就労への支障について相談したい】の4つが抽出された。使い慣れた身近なツールであるSNSを活用することの有用性が示唆されたが、SNSを利用したピアサポートが安全に行われるためにはセキュリティ面への配慮や情報に翻弄されないため支援が必要である。また、共通点の多いピアとの関わりを設けることによって不安の軽減を図るだけでなく、育児や子育て、就労など、若年女性がん患者個々のライフスタイルに関する悩みに応じたピアサポートを推進するための支援の必要性が示唆された。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (Saori Hashimoto, Noriko Tsukagoshi, Ayumi Kyota, Maiko Senuma, Eiko Hagiwara, Masataka Horikoshi, Yuka Kondo)

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
なし				

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 中島久美子

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 保育所に乳児を預ける母親の母乳育児支援に対する思い	—	2024年9月	第38回日本母乳哺育学会学術集会（日赤広尾ホール）	保育所入所後の母親の母乳育児支援に対する思いを明らかにすることを目的として保育所に乳児を預けている母親を対象に自記式無記名調査を行った。結果、母親は保育所入所後も母乳育児を継続したいという要望があることが明らかとなった。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 白井淳美、中島久美子
2. 保育所における母乳育児支援の実態調査	—	2024年9月	第38回日本母乳哺育学会学術集会（日赤広尾ホール）	保育所に勤務する保育士の母乳育児支援に対する思いと支援の実態を明らかにすることを目的に保育士を対象に自記式無記名調査を行った。結果、保育士は保育所入所後も母乳育児を継続したいという母親への支援に悩みを抱えている現状が明らかとなった。保育所における母乳育児支援プログラムの開発の必要性が示唆された。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 白井淳美、中島久美子
3 妊娠中から産後1カ月における「妻への夫の関わり満足感尺度」改訂版を用いた夫婦面接	—	2024年10月	第38回日本助産学会学術集会（オンライン開催）	「妻への夫の関わり満足感尺度」改訂版を用いて夫婦面接を行い、夫婦の認識を捉え、相互理解を促す看護支援について検討した。尺度を使用した夫婦面接の実施は夫婦の良好な関係性の構築に働きかける可能性があることが示唆された。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 綿貫真歩、小栗一紗、平松まどか、中島久美子
4 Effectiveness of peer education in preventing dating violence among university students （大学生のデートDV予防におけるピア・エデュケーションの効果）	—	2025年2月	28th EAFONS 東アジア国際フォーラム（韓国ソウル）	アサーションを取り入れたデートDV予防プログラムをピアエデュケーションを活用しながら実施し、知識・意識への効果及びコミュニケーションへの効果を検討した。結果、デートDVの知識やアサーションの認識を高め、ロールプレイでの実践がアサーションの実践に繋がることが示唆された。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 綿貫真歩、中島久美子

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5 Health behavior changes associated with preconception care in nursing students based on health promotion theory (ヘルスプロモーション理論に基づく看護学生のプレコンセプションケアに伴う健康行動の変化)	—	2025年2月	28th EAFONS 東アジア国際フォーラム (韓国ソウル)	プレコンセプションケアを見据えた看護学生の健康行動の変容をヘルスプロモーション理論を用いて明らかにした。高得点群では具体的に柔軟性のある計画修正ができていたが、低得点群では柔軟性が乏しく、行動変容に心理的負担を強いられていた。若者自らがプレコンセプションを見据えたヘルスケアに活用できることが示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 中島久美子、綿貫真歩

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 奥野みどり

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
「1歳6か月児健康診査からの早期スクリーニング：渋川市におけるSocial Attention and Communication Surveillance-Japan (SACS-J) の有効性とカットオフ値の検討」 (査読付)	共著	2024年6月1日	保健師ジャーナル Vol. 80 No. 6 pp507-5013	乳幼児健康診査へのSACS-J (Social Attention and Communication Surveillance-Japan) の導入が自閉症を含めた神経発達症の早期発見に有効であるかを検討した。群馬県渋川市で20216年から1歳6か月児健診を受け、2023年4月までに就学となった子ども1203人を対象に、就学までに神経発達症群に属する診断を受けた「診断あり群」と、診断のない「診断なし群」の各健診でのSACS-J項目の不通過率の比較し、カットオフ値と感度について検証した。感度は73.3～76.5%であり、1歳6か月児健診を端緒とした継続的なSACS-Jの実施が、「神経発達症」の早期発見・支援に有効であることが示唆された。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) 共著者：Youko O, Yuka U, Midori O, Emiko K.
乳幼児健康診査におけるスクリーニングー群馬県におけるSocial Attention and Communication Surveillance-Japan (SACS-J) の活用ー (査読付)	共著	2024年12月1日	臨床発達心理実践研究 Vol. 19 pp51-57	群馬県と著者らが協働し、発達障害児の早期発見支援へ取り組んだ10年間 (平成27年度からR4年) の歩みをまとめた。具体的には、乳幼児健診にSACS-Jを導入する取り組みのための継続した県、管内保健福祉事務所、各市町村主催の継続した研修会の実施や、SACS-J (Social Attention and Communication Surveillance-Japan) 導入、SACS-J実施マニュアルと動画が作成されるまでの経緯と今後の課題についてまとめた。 (研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) (筆頭論文) 奥野みどり、増田さゆり

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Effectiveness of the social attention and communication surveillance-Japan (SACS-J) for early detection of neurodevelopmental disabilities. 神経発達症の早期発見におけるSocial Attention and Communication Surveillance-Japan (SACS-J) の有効性	—	2024年5月	Poster presented at the International Society for Autism Research Annual Meeting (INSR), 2024	2016年度から1歳から2歳にわたる乳幼児健診へのSACS-J (Social Attention and Communication Surveillance-Japan) の導入が自閉症を含めた神経発達症の早期発見に有効であるかを検討した。群馬県渋川市で2021年から1歳6か月児健診を受け、2023年4月までに就学となった子ども1203人を対象に、就学までに神経発達症群に属する診断を受けた「診断あり群」と、診断のない「診断なし群」の各健診でのSACS-J項目の不通過率の比較し、カットオフ値と感度について検証した。感度は73.3～76.5%であり、1歳6か月児健診を端緒とした継続的なSACS-Jの実施が、「神経発達症」の早期発見・支援に有効であることが示唆された。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：Youko O, Yuka U, Midori O, Emiko K.
Feasibility of using the autism detection in early childhood-Japanese (ADEC-J) at a Japanese public health center. 日本の保健センタにおけるautism detection in early childhood-Japanese (ADEC-J) 実行可能性	—	2024年5月	Poster presented at the International Society for Autism Research Annual Meeting (INSR), 2024	日本の早期の幼児健康診査の事後指導事業にADEC-J (Autism Detection in Early Childhood-Japanese) を導入し、その実施可能性を検討した。実施方法は、1. 保健師へのADEC-J研修2. 保健センターにおける現行実践の予備調査3. グループ介入プログラムにおけるADEC-Jの実施4. フィードバック調査である。結果、母子保健業務に従事する保健師8名がADEC-Jの研修プログラムを受講し、7名の保健師とトレーナーとの一致率は良好 (Cohenのカッパ係数の平均値は、第1回0.635、第2回0.761) であった。2回の自己評価の比較では、ADEC-Jの理解および実施に対する自信が向上した一方で、評価結果を保護者に報告する自信は低下した。ADEC-Jの利点に対する認識はほぼ変わらなかった。ADEC-J研修プログラムの成果は、標準化された自閉症スクリーニングツールをフォローアップサービスの実践に組み込むための有望な第一歩であることが示唆された。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：Hiroko K, Midori O, Emiko K.
群馬県における1歳6か月児健康診査からの発達障害の早期スクリーニング (SACS-J) の取り組み	—	2024年10月	第83回日本公衆衛生学会学術集会	群馬県における発達障害の早期発見を目的とした1歳6か月児健康診査にSACS-J (Social Attention and Communication Surveillance-Japan) の行動観察の導入を推奨し、市町村に対して継続的な研修を実施してきた取り組みの各市町村における現状と課題を明らかにした。取り組みにより、SACS-Jは県内市町村に根付いてきているが、1歳6か月児健康診査に加えて2歳/2.6か月児での実施の促しと、精度管理の視点からと取り組みに課題があることが明らかになった。 (研究の遂行、全体の考察、発表を担当) 共同発表者：奥野みどり・増田さゆり

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属      看護学科      氏名      堀越 政孝

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
38. A Qualitative Study of Peer Support Sought by Young Survivors with Female Specific Cancer (査読付) 若年女性がんサバイバーがピア・サポーターに求める支援	共著	2025年2月	The Kitakanto Medical Journal, 75(1):49-54	若年女性がんサバイバーがピア・サポーターに求める支援の内容は95記録単位14サブカテゴリ4カテゴリ【インターネット上でのピアの体験を参考にがん治療に臨むため心身を整えたい】【ピアとの関わりで心を休めたい】【自分に近い状況のピアと関わることで共鳴したい】【ピアと話し合うことで育児・子育て・就労への支障を解決していきたい】から構成された。若年女性がんサバイバーへの看護支援としてSNS上でピア・サポートが安全に行われるための支援、ピアからの情報に翻弄されないための支援、ライフスタイルの悩みに応じたピア・サポートを推進するための支援、という3つの内容が示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：Hashimoto Saori, Tsukagoshi Noriko, Kyota Ayumi, Senuma Maiko, Hagiwara Eiko, Horikoshi Masataka, Kondo Yuka

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
59. 退院支援研修に対するニーズを把握した研修計画の立案にむけて 病棟看護師が求める退院支援研修とは	共著	2024年10月	第78回国立病院総合医学会(大阪府大阪市)	【研究目的】病棟看護師が退院支援研修に求める内容を明らかにする。【方法】A病院看護基礎領域研修生166名を対象とし、アンケート調査を行った。調査内容は患者さんの入院費用や利用できるサービスについてなど全14項目であり、分析は項目ごとに平均値を算出した。【結果】14項目中、最も平均値が高かったのは「患者さんが利用できるサービスについて」「患者・家族間の意見が相違した時の対応について」「患者・家族の不安に対する対応方法について」「退院後の社会資源の活用について」の4項目であった。【考察】研修生の多くは退院支援システムの理解に加え、より実践的な患者への支援方法について学びたいと考えていることが明らかとなった。病棟看護師が退院システムを理解し、患者への具体的な支援方法を提供できる満足度の高い研修が必要である。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：小島美津穂, 堀越政孝

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属                      看護学科                      氏名                      関 妙子

### 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

### 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

### その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
第29回日本老年看護学会学術集会	共同研究	2024年6月	日本老年看護学会	看護学生の高齢者に対するイメージ・態度を評価するために、狩野らが開発した新規尺度を用い、看護学生の高齢者に対するイメージ・態度と関連要因を分析することを目的とした。総合・下位尺度は祖父母との同居経験や介護経験の有無と有意な関連は見られなかったが、「生き方の理解と価値付け」で同居経験者でネガティブな評価となった。また、過去4～5ヶ月の高齢者との交流体験との関連については、「高齢者のおしゃれに感激する機会があった」「高齢者に対する自信の肯定感を高める機会があった」「高齢者との間で嫌な気持ちになる経験があった」などの評価に相関が見られた。 (共同研究のため担当部分抽出不可能) 共同発表者：狩野太郎・関妙子・上山真美・樋口友紀・福島昌子

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属      看護学科      氏名      金子 吉美

---

### 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要
なし				

### 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
なし				

### その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
国立病院機構 渋川医療センター看護師への研究指導		2024年		4件の研究課題に関し、サポートを行い、2024年に3件、研究発表に至った。 「キャリアアップ支援プログラムの開発に向けたニーズ評価 -子育てを行う看護師の現状と課題-（第78回国立病院総合医学会）」 「日常業務に対する看護師の意識変化-ジョブ・クラフティングを活用して-（第22国立病院看護研究学会学術集会）」 「重症心身障害児者病棟に異動してきた看護師のやりがいに関する調査（第49回日本重症心身障害学会学術集会）」

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 萩原 一美

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
看護部長が語る看護師長時代の「看護管理」の構成要素	—	2024. 12. 7	第44回 日本看護科学学会 学術集会	看護部長が語った「看護管理の経験」から中間管理職である看護師長の看護管理の構成要素を明らかにするために、8名の看護部長へ半構造化インタビューを60分程度実施した。結果、「看護師長の職位前の経験」《目標とする看護師長像をイメージ》《変革を必要とする自部署の組織課題の把握》《現在の自身の看護管理能力の査定》《課題解決のための方法》《実践の評価》と《経験の蓄積》の7つのカテゴリに分類された。各カテゴリはそれぞれにらせん状に関連しており、この7つの看護師長としての看護管理の構成要素は、その後の看護管理者の成長に大きく影響を及ぼしていると考えられた。
看護基礎教育において摂食嚥下障害看護認定看護師が食事援助の講義を享受する意義	—	2024. 10. 27	第22回 日本看護技術学会 学術集会	摂食嚥下障害認定看護師が担当した食事の援助に関する教授活動と成果を明らかにするために、演習後の学生レポートによる学びを分析した。結果504コードが抽出され、37小カテゴリ、8中カテゴリ、【食事における接触・嚥下に関する看護援助を学んだ】【看護師としてキャリア成熟に向けた自己の姿を考えた】の2大カテゴリに分類された。摂食嚥下障害認定看護師の教授活動で、経口摂取における食事の意義や自己洞察により学習への意欲が高められていることが示唆された。 (共同研究につき、本人担当分抽出不可能) 共同発表者：千葉今日子、萩原一美
外国人患者へのケアを経験した看護師の学び	—	2024. 10. 12	第89回 日本健康学会総会	外国人患者への看護実践を経験した看護師の学びを明らかにするために、半構面面接法にて6名の看護師へインタビューを実施した。結果、32コード、18サブカテゴリから、「非言語的コミュニケーションを活用する」「あきらめず関わり、関係性を構築する」「外国人という先入観や恐れをもち、一人の人と捉える」などの8カテゴリが生成された。この結果を踏まえ自段階の教育プログラム開発への示唆を得た。 (共同研究につき、本人担当分抽出不可能) 共同発表者：堀込由紀、萩原一美

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
群馬大学「多職種人材育成のために医療安全教育：臨床検査技師育成における医療安全教育FD	—	2025. 3. 4	群馬大学「多職種人材育成のための医療安全教育」	テーマ「臨床検査における医療安全の取り組みと求められる教育」で他大学や、看護師の立場から看護師育成のために医療安全教育の教授活動の具体的な方法を講演した。次に施設の臨床検査技師育成を担っている立場の方々と discussion を行った。

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属                      看護学科                      氏名                      堀込由紀

## 著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
該当なし				

## 学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等 の名称	概 要
該当なし				

## その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
外国人患者へのケアを経験した看護師の学び	—	2024年10月12日	第89回日本健康学会総会	外国人患者へケアの提供の経験を通じた日本人看護師の学びを明らかにする目的で、外国人患者のケアの経験のある日本人看護師6名に対してインタビューを実施し、質的に分析した。その結果、18のサブカテゴリーから8つのカテゴリーがまとめられた。その内容をさらに分類すると、コミュニケーション、受容的態度、情報共有、問題解決のための多職種連携、看護師のストレス管理等が上がることを示唆された。

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属                      看護学科                      氏名                      千葉 今日子

### 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

### 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

### その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
看護基礎教育において摂食嚥下障害看護認定看護師が「食事援助」の講義を教授する意義	—	2024, 10	第34回日本看護技術学会学術学会講演集 Page89.	看護基礎教育において摂食嚥下障害看護認定看護師が「食事援助」の講義を教授する意義を明らかにした。学生レポートから研究目的に該当する内容について、内容分析を行った。特に、摂食嚥下障害看護認定看護師がの講義を教授する特徴的なカテゴリとして、【摂食嚥下障害看護認定看護師の役割、ほか認定看護師の存在を知った】【自分が目指す看護師像を認識した】が抽出された。 千葉今日子 伊藤順子 萩原一美

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学部 氏名 長嶺めぐみ

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
21. 看護基礎教育における国際看護学講義及びIT環境の実態：遠隔教育支援システムの開発に向けて（査読付き）	共著	2024年7月	日本国際看護学会誌 第8巻2号 P.1-11	21. 国際看護学は内容が多岐に渡るため全てを一人で教授するのは難しく、かつ担当教員の不足も教育上の課題である。これに対応するため、看護基礎教育における国際看護学講義およびIT環境の実態を明らかにし、国際看護学講義の遠隔教育システムの導入への示唆を得ることを本研究の目的とした。  研究代表者： <u>長嶺めぐみ</u> 共同研究者：辻村弘美，大植崇，森淑江，山田智恵里 共同研究により担当箇所抽出不可能
22. Nursing Students' Intercultural Learning Through Joint Classes with International Students and the Resultant Changes in those Nursing Students (留学生との合同授業を通じた看護学生の異文化学習と学びの変化)（査読付き）	共著	2024年11月	北関東医学会，74(4) (pp.283-290)	22. 在留外国人や外国人観光客の数が増えるにつれ、様々な文化的背景を有する患者に対応するために、看護師には文化的能力の獲得が期待される。それは将来看護師になる看護学生においても同様であり、日本の看護教育において、文化的能力を身につけることが求められていると言える。本研究は留学生と関わり、協働するという体験をしたことで看護学生にどのような思考の変化が起きたのかを明らかにした。  研究代表者： <u>Megumi Nagamine</u> ， 共同研究者：Hiroko Joboshi 共同研究により担当箇所抽出不可能

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
23. 看護学生の異文化コミュニケーション能力の向上を目指した取り組み 異文化コミュニケーション体感ゲーム「Barnga」を 国際看護学の授業で導入して	単著	2025年3月	看護教育 第66巻2号 P.224-228	23. 国内の国際化が進むにつれて、看護教育においても異文化コミュニケーション能力を獲得することが求められている。そこで国際看護論の授業において、異文化コミュニケーション体感ゲーム「Barnga」を導入し、学生の異文化理解に向けた教育的介入を行った。 研究代表者： <b>長嶺めぐみ</b>

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
39 国際看護学補完講義映像の作成と評価；プレテストの実施	—	令和6年10月	第8回日本国際看護学会 学術集会	39 国際看護学を教授する上で、専門知識を持つ教員の確保が課題として挙げられる。我々は、全国に点在する国際看護経験者の知識と経験をサーバー上に集合させ、共有するシステムを構築し、人材不足の中にあっても網羅的な国際看護学の教授が可能になることを目指し、研究に取り組んでいる。第一段階では、全国の看護師養成機関に対して質問紙調査を実施し、どのような分野で教授上の課題を抱えているのかを明らかにした。第二段階として、補完の必要な分野のプレテスト版講義映像（以下講義映像）を作成し、その映像を実際に学生に視聴してもらい、理解度の確認等の調査を行ったので報告する。 研究代表者： <b>長嶺めぐみ</b> 共同研究者：大植崇、辻村弘美、山田智恵里、森淑江 共同研究により担当箇所抽出不可能
40 Effectiveness of Intercultural Learning in a Joint Classes with International Students and Nursing Students (留学生と看護学生との合同授業における異文化学習の有効性)	—	令和7年2月	26nd East Asian Forum of Nursing Scholars	40 日本は多様な国籍の人々が暮らし、国際化が進んでいる。外国人居住者や観光客の増加に伴い、日本の医療機関を訪れる機会も増加しているため、看護師は、多様な文化的背景を持つ患者の状態を理解し、対応することが求められる。これらのことから看護学生が基礎教育の段階から異文化理解能力を身につけることが重要と言える。本研究では、看護学生が留学生との合同授業を通して経験した異文化への学びと、異文化接触の効果を明らかにした。 研究代表者：Hiroko Joboshi 共同研究者： <b>Megumi Nagamine</b> 共同研究につき担当箇所抽出不可能

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 反町 真由

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
地域・在宅看護展開論における模擬患者参加型シミュレーション教育の実践(査読付き)	共著	2025. 3	群馬パース大学紀要第31号	地域・在宅看護展開論において模擬患者参加型シミュレーション教育を行った。今回の訪問看護演習は、在宅看護の場面でどのような聞き方をすれば生活の状況を上手に情報収集できるのかを体験するのに効果的であったと考える。教員のファシリテーション能力の向上や学習効果の評価方法が課題として上がった。(筆頭論文)共著者：反町真由・林恵・齋藤基

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
子育て期の女性がん療養者の意思決定を支える訪問看護実践	-	2024. 12	第44回日本看護科学学会学術集会、熊本市	子育て期の女性がん療養者の意思決定を支える訪問看護師の看護実践を明らかにすることを目的に訪問看護師10名に半構成的面接を行い、質的帰納的に分析した。訪問看護実践として【療養者がタイミングを逃さず在宅療養を実現するための調整】【限られた時間の中で子どもと充実した生活を過ごすための対応】等の6カテゴリが抽出された。子育て期の女性がん療養者が、本人が望む在宅療養を可能な限り継続し、残された人生を家族とともに有意義に過ごすためには、訪問看護師による早期の在宅移行の調整に向けた病院との看視連携、症状コントロールやセルフケア支援、家族支援、子どもへのグリーフケアの必要性が示唆された。共著者；反町真由、林恵
医療的ケア児の児童発達支援または保育所等利用に対する親の認識の構造	-	2024. 12	第44回日本看護科学学会学術集会、熊本市	本研究は医療的ケア児の児童発達支援等の利用に対する親の認識の構造を明らかにすることを目的に、児童発達支援等の利用を経験した医療的ケア児の親10人に半構造化面接を行いKJ法で分析した。結果は、医療的ケア児の親の認識は、3つの要素から成り、利用ニーズと負担感が交錯していた。医療的ケア児の親が児童発達支援等を利用しやすくするための示唆が得られた。(担当分抽出不可能)共著者；林恵、飯田早苗、反町真由、齋藤基

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属                      看護学科 氏名                      東泉貴子

### 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
なし				

### 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
なし				

### その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
なし				

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 高野 直美

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
看護基礎教育における血糖自己測定演習への持続血糖測定機器活用の試み ―測定機器を使用した看護学生に対する質問紙調査― (査読付)	共著	2025年3月	看護理工学会誌 第12巻	目的：看護基礎教育における血糖自己測定演習への持続血糖測定機器の活用可能性を検証すること。方法：健常な看護学生17名を対象に、持続血糖測定機器（以下CGM機器）を装着させた。装着後、質問紙調査を実施し、有害事象の有無、CGM機器を装着しての感想などを収集した。結果：有害事象は出血6.3%、かゆみ18.8%、疼痛6.3%であり、重大な問題は発生しなかった。質問項目では操作の理解のしやすさ、興味の引き方、健康関心の高まりなどが高評価を得た。自由記述では患者理解の視点の内容はなかった。結論：有害事象リスクは低く、看護基礎教育の血糖自己測定演習へのCGM機器活用の可能性が示唆された。土屋守克, 高野直美, 真野響子, 間藤 卓。

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
看護系大学における初期教育としての「基礎ゼミ」演習授業の構築及び考察	―	2024年8月	第56回 日本医学教育学会大会	目的：看護系大学1年生向け「基礎ゼミ」演習を、ガニエの9教授事象理論に基づいて構築・考察すること。方法：A大学の1年生80名を対象に、同理論に基づいた授業を実施した。結果・考察：マニュアル配布により目標が明確化され、学生は、レポートやスライド作成を通じて倫理的思考とスキルを習得できた。また、発表や質疑応答、学生同士の評価により自己評価が促進されたと考えられた。 豊吉泰典, 高野直美
看護基礎教育における血糖自己測定機器活用の試み ―血糖機器を使用した看護学生に対する質問紙調査―	―	2024年11月	第12回 看護理工学会学術集会	A大学看護学科の「成人看護学援助論Ⅰ」では、2023年度に従来のSMBGに加えCGMを用いた演習を実施した。看護学生17名にCGMを装着し、有害事象と感想を調査した結果、軽微な有害事象はあったが重大な問題はなく、操作理解や健康意識向上が得られた。一方、運動習慣への影響や患者理解の記述は少なかった。CGMは教育利用に有用であり、SMBGとの併用で学習効果の向上が期待される。高野直美, 土屋守克, 真野響子, 間藤 卓。

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 佐藤 和也

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
6 精神科病院における看護職員の看取りに対する看護部長の評価 (査読付)	共著	令和7年3月	仏教看護・ビハーラ, 19, 40-59	本研究の目的は、精神科病院における看護職員による終末期ケアに関する看護部長の評価を明らかにすることである。単科精神科病院801箇所の全数に所属する看護部長を対象とした。看護部長の終末期ケアに関する認識に関する探索的因子分析を用いて目標因子を導出した。また、看護職員の特性などを含む複数の説明因子を用いたステップワイズ重回帰分析を実施した。その結果、看護助手・准看護師数、および看護師の平均勤続年数に関して有意な増加が認められた。 共著者：西川薫、佐藤和也、傳谷典子、瀧口徹 本人担当部分：研究計画の遂行、考察、執筆を担当した。

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 川尻洋美

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
就労支援の現状と課題 - 難病者に寄り添う支援のために -	-	2025年3月	難病者の社会参加を考える研究会（運営）NPO法人両育わーど、難病者の社会参加白書2025	当事者団体が監修した難病者の就労支援の現状と課題を報告する白書に掲載。難病者の就労支援の現状と課題を事例を交えて解説した。特に、難病者の就労上の困難を解決するための合理的配慮について、本人と職場との関係性や実践例、本人主体の就労支援について視点を置き提言した。
アプリを併用した就労アセスメントの専門性向上のための研修の開発について	-	2025年3月	2024年度研究報告書、障害者政策総合研究事業（身体・知的・感覚器等障害分野）「アプリを併用した就労アセスメントの専門性向上のための研修の開発についての研究」班	2024年度の研究班で実施したモデル研修の内容・アンケート結果を考察し、報告書を作成した。研究対象者は身体、知的・精神、難病の障害者で、就労支援アプリを開発し、今年度は検証作業を行い、取り扱い説明書を作成した。また、本人主体の就労選択支援をアセスメントを中心に学ぶアドバンテージ研修プログラムを開発し、モデル事業を2回実施した。

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属                      看護学科 氏名                      村田亜夕美

### 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

### 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

### その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属                      看護学科 氏名                      湯澤香緒里

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 日下田那美

## 著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

## 学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
1. Subjective Effects of Self-Monitoring Intervention for Chemotherapy-Induced Peripheral Neuropathy (慢性末梢神経障害に対するセルフモニタリング介入の客観的効果) (査読付)	共著	2024年5月	The Kitakanto Medical Journal 74 (2) 131-139, 2024	慢性末梢神経障害を抱える患者へのセルフモニタリング介入の主観的効果を明らかにするために、介入群と対照群を対象に分析を行い、質的機能的に分析した。慢性末梢神経障害を抱える患者へのセルフモニタリング介入は、患者の認知行動変容を促進する効果的な看護支援であることが示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) Ayumi Kyota, Kiyoko Kanda, <u>Tomomi Higeta</u>
2. Self-Management Behaviors Regarding the Role of Cooking Among Female Cancer Survivors with Taste Alterations (味覚異常のある女性がんサバイバーにおける調理の役割に関するセルフマネジメント行動) (査読付)	共著	2024年5月	The Kitakanto Medical Journal 74 (2) 147-152, 2024	外来化学療法により味覚障害を経験し、家族の食事の準備を担当している婦人科がんまたは乳がんサバイバー15名が半構造化面接調査を行い、質的帰納的に分析した。味覚障害のあるサバイバーには、味覚障害を改善するための具体的な情報提供やセルフケア行動を促進する看護支援が重要であることが示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) Yumi Iijima, Saki Sawada, Ayumi Kyota, <u>Tomomi Higeta</u> , Kiyoko Kanda

## その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属      看護学科      氏名      吉野めぐみ

### 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

### 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
グリーフケアツールを使用した看護者の死産に対する感情の変化（査読付）	共著	2025年3月	群馬バース大学紀要第31号 pp17-21	死産に関わる看護者は、死産を経験した夫婦や死児に対して様々な感情を抱きながら看護を行っている。本研究では、看護者が死産の看護の経験を想起してグリーフケアツールに記入する前後の感情の変化を明らかにした。グリーフケアツールを使用することにより看護者の死産の看護の辛さの感情が減少した。ツールの使用は、看護者の感情表出の機会となり、看護者自身のグリーフケアから精神的安定が図られる可能性がある。 共著者：吉野めぐみ、中島久美子

### その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 森田綾子

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
(学術論文) 1. 看護学実習中に目標達成度を学生に伝達するための教授活動の解明 (修士論文)	単著	2023年9月	群馬県立県民健康科学大学大学院	実習中に目標達成度を学生に伝達するための教授活動を明らかにし、その特徴を考察することを目的とし、Berelson, B. の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を適用した。全国の看護基礎教育機関に所属し実習を担当している教員798名を対象に、郵送法による質問紙を配布し、回答した270名の記述を、意味内容の類似性に基づき分類しカテゴリ化した。結果は、実習中に目標達成度を学生に伝達するための教授活動を表す38カテゴリが形成され、考察により7の特徴を示した。
2. 看護学実習中に目標達成度を学生に伝達するための教授活動の解明 (査読付き)	共著	2025年3月	群馬県立県民健康科学大学紀要Vol. 20, pp. 1-15	実習中に目標達成度を学生に伝達するための教授活動を明らかにし、その特徴を考察することを目的とし、Berelson, B. の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を適用した。全国の看護基礎教育機関に所属し実習を担当している教員798名を対象に、郵送法による質問紙を配布し、回答した270名の記述を、意味内容の類似性に基づき分類しカテゴリ化した。結果は、実習中に目標達成度を学生に伝達するための教授活動を表す38カテゴリが形成され、考察により7の特徴を示した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：森田綾子・山下暢子・松田安弘・服部美香

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 看護学実習中に目標達成度を学生に伝達するための教授活動の解明	-	2024年8月20日	日本看護学教育学会第34回学術集会, 東京	実習中に目標達成度を学生に伝達するための教授活動を明らかにし、その特徴を考察することを目的とし、Berelson, B. の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を適用した。全国の看護基礎教育機関に所属し実習を担当している教員798名を対象に、郵送法による質問紙を配布し、回答した270名の記述を、意味内容の類似性に基づき分類しカテゴリ化した。結果は、実習中に目標達成度を学生に伝達するための教授活動を表す38カテゴリが形成され、考察により7の特徴を示した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：森田綾子・山下暢子・松田安弘・服部美香

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 林恵

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 地域・在宅看護展開論における模擬患者参加型シミュレーション教育の実践（査読付）	共著	2025年3月	群馬パース大学紀要第31号	地域・在宅看護展開論において模擬患者参加型シミュレーション教育を行った。今回の訪問看護演習は、在宅看護の場面でどのような聞き方をすれば生活の状況を上手に情報収集できるのかを体験するのに効果的であったと考える。教員のファンリテーション能力の向上や学習効果の評価方法が課題として上がった。 共著者：反町真由、林恵、斎藤基 担当：考察、執筆を担当するが、共同作業のため担当部分抽出不可能

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 医療的ケア児の児童発達支援または保育所等の利用に対する親の認識の構造	—	2024年12月	第44回日本看護科学学会学術集会	本研究は医療的ケア児の児童発達支援等の利用に対する親の認識の構造を明らかにすることを目的に、児童発達支援等の利用を経験した医療的ケア児の親10人に半構造化面接を行いKJ法で分析した。結果は、医療的ケア児の親の認識は、3つの要素から成り利用ニーズと負担感が交錯していた。医療的ケア児の親が児童発達支援等を利用しやすくするための示唆が得られた。 共同発表者：林恵、飯田苗恵、反町真由、斎藤基 担当：研究計画、データ収集、分析、代表発表者
2. 子育て期の女性がん療養者の意思決定を支える訪問看護実践	—	2024年12月	第45回日本看護科学学会学術集会	子育て期の女性がん療養者の意思決定を支える訪問看護師の看護実践を明らかにすることを目的に訪問看護師10名に半構成的面接を行い、質的帰納的に分析した。訪問看護実践として【療養者がタイミングを逃さず在宅療養を実現するための調整】【限られた時間の中で子どもと充実した生活を過ごすための対応】等の6カテゴリが抽出された。子育て期の女性がん療養者が、本人が望む在宅療養を可能な限り継続し、残された人生を家族とともに有意義に過ごすためには、訪問看護師による早期の在宅移行の調整に向けた病院との看看護連携、症状コントロールやセルフケア支援、家族支援、子どもへのグリーフケアの必要性が示唆された。 共同発表者：反町真由、林恵 担当：共同研究のため担当部分抽出不可能

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 伊藤順子

### 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

### 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

### その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「災害における高齢者への継続支援の実態と今後の課題 亜急性期における入所介護施設の食支援 ―摂食嚥下障害看護認定看護師の活動報告―」（査読なし）	単著	2025年3月	日本リハビリテーション看護学会, No.14, 2025.	本論文は、災害発生時における高齢者への継続的支援の実態と課題に焦点を当て、特に亜急性期における入所型介護施設での食支援の現状について検討したものである。摂食嚥下障害看護認定看護師が能登半島地震後に実施した老人保健施設でのボランティア活動を振り返り、災害時における嚥下評価や食形態の調整、多職種連携の実践を通じた支援の実態を報告している。実践から得られた知見をもとに、今後の災害支援体制の整備や継続的ケアの在り方についての課題と展望を示唆した。

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 板垣 卓美

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
第36回日本リハビリテーション看護学会学術大会 特別企画1 モーニングエクササイズ ― 身体の動きを意識する― (司会)		2024年11月3日	日本リハビリテーション看護学会	
令和6年度群馬パース大学摂食嚥下障害看護研究会・修了生合同研修会 教育講演「咽頭喉頭感覚について改めて考える」		2025年2月24日	群馬パース大学摂食嚥下障害看護研究会	

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属      看護学科      氏名      綿貫真歩

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 妊娠中から産後1カ月における「妻への夫の関わり満足感尺度」改訂版を用いた夫婦面接	—	2024年10月	第38回日本助産学会学術集会	「妻への夫の関わり満足感尺度」改訂版を用いて夫婦面接を行い、夫婦の認識を捉え、相互理解を促す看護支援について検討した。夫婦の認識が一致しない場合には、看護師が原因の確認や双方の思いを代弁し、夫婦が理解し合えるように関わる必要がある。尺度を使用した夫婦面接の実施は夫婦の良好な関係性の構築に働きかける可能性があることが示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 綿貫真歩、小栗一紗、平松まどか、中島久美子
2 Effectiveness of peer education in preventing dating violence among university students (大学生のデートDV予防におけるピア・エデュケーションの効果)	—	2025年2月	28th EAFONS	アサーションを取り入れたデートDV予防プログラムをピアエデュケーションにて実施し、知識・意識への効果、コミュニケーションへの効果を検討した。結果、受講により知識・意識の得点は有意に上昇した。7割以上の対象者アサーティブなコミュニケーションを実施できていた。デートDVの知識やアサーションの認識を高め、ロールプレイでの実践がアサーションの実践に繋がることが示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 綿貫真歩、中島久美子
3 Health behavior changes associated with preconception care in nursing students based on health promotion theory (ヘルスプロモーション理論に基づく看護学生のプレコンセプションケアに伴う健康行動の変化)	—	2025年2月	28th EAFONS	プレコンセプションケアを見据えた看護学生の健康行動の変容をヘルスプロモーション理論を用いて明らかにした。高得点群では具体的に柔軟性のある計画修正ができていたが、低得点群では柔軟性が乏しく、行動変容に心理的負担を強いられていた。若者自らがプレコンセプションを見据えたヘルスケアに活用できることが示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 中島久美子、綿貫真歩

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 看護学科 氏名 林 真由美

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
体験してみよう！腎代替療法やACPに活用できる「聞き書き」	—	2024/11/10	第27回日本腎不全看護学術集会・総会 交流集会	事例紹介を行い、聞き書きの実施方法について説明。普段の会話から患者の本当の思いを聞き出し、聞き書き実施後の患者の心の変化、家族の反応、治療と共にどう生きるか等ACPに活用する。これらを踏まえて、交流集会の参加者に腎代替療法選択時を想定した場面の語りからディスカッションを行った。
ACPを踏まえた事例の意思決定支援OOVL表の作成体験と討論	—	2024/12/7	第44回日本看護科学学会学術集会	OOVLとは、意思決定の場面で、患者の思いを見える化することによって、最適化を導き出す方法。本人や家族だけではなく、医療者の意思決定も支援するために開発されたツールである。選択肢を整理し、意思決定を自分自身で行う過程で思考をまとめていく。1. 問題の認識を特定 2. 選択肢の列挙 (Options) 3. 成果の特定 (Outcomes) 4. 成果の重みづけ (Values) 5. 実現可能性 (Likelihoods) 参加者がこれらをもとに討論を行った。

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属      看護学科      氏名      根岸仁美

---

### 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

### 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

### その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 理学療法学科

氏名

佐藤 満

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
1. 図解でわかるリハビリテーション	共著	2025年3月	中央法規出版	編著：川手信行 分担執筆：関勝, 平岡崇, 高橋忠志, 渡部喬之, 上間清司, 木村百合子, 勝谷将史, 佐藤満, 他 担当：第4章11, 12, 13節 (pp 84-89) バリアフリー・ユニバーサルデザイン, 福祉用具, ロボット

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	P
1. Predictors of flatfoot in 11-12-year olds: a longitudinal cohort study (11～12歳児の扁平足の予測因子:縦断的コホート研究) (査読付)	共著	2024年8月	BioMedical Engineering OnLine, Vol. 23, Article number 83	成長過程で扁平足発症を予測し,適切な介入に導くために,小学生の足部構造を新開発の3D装置で計測し,舟状骨の高さに影響を与える因子を縦断的解析で特定した. 足趾-踵-舟状骨角と舟状骨高比は負の相関が認められ,舟状骨回旋変位が舟状骨の下降の予測因子であることが示唆された. (研究企画と原稿校閲を担当) 共著者: Yamashita T, Sato M, Ata S, Yamashita K

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 高齢者の転倒予防運動プログラムが足底感覚機能に及ぼす効果	-	2024年9月	第39回ライフサポート学会大会 (LIFE2024)	地域在住高齢者49名を対象に,6か月間の転倒予防事業前後での足底感覚機能を比較し,運動介入の効果として足底感覚機能が改善することを確認した. 転倒予防効果の一部は感覚機能の改善に因る可能性を示唆した. (共同研究につき担当部分抽出不可能) 共同発表者: 佐藤満, 浅田春美, 山下知子, 山下和彦
2. 変形性膝関節症リスク評価のための足部骨格3D計測システムの開発	-	2024年9月	第39回ライフサポート学会大会 (LIFE2024)	足部骨格構造の三次元解析データを用いて痛みのない段階から変形性膝関節症の潜在的リスクをスクリーニングするための簡易計測可能な機器を開発した. 中足部の骨格構造からリスクを評価する指標を構築した. (共同研究につき担当部分抽出不可能) 共同発表者: 山下和彦, 山下知子, 井野秀一, 佐藤満
3. 足部骨格3D計測システム開発による小学生の内側縦アーチ発達不全の抽出	-	2024年9月	第39回ライフサポート学会大会 (LIFE2024)	スマートフォン画像で足部骨格3D計測ができる装置を用いて,小学生の足部骨格を内側縦アーチの発達特性を計測した. 124名の結果から,舟状骨の高さより横方向変位量と外反母趾との関連が大きいことが明らかとなった. (共同研究につき担当部分抽出不可能) 共同発表者: 山下知子, 佐藤満, 井野秀一, 他2名
4. Analysis of development characteristics of elementary school children's feet using a smartphone-based 3D foot scanning system (スマートフォンによる足部骨格3D計測システムを用いた小学生の足の発達特性の解析)	-	2024年7月	46th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society (EMBC)	新たに開発した足部骨格3D計測装置を用いて,小学生の足部骨格を計測して,発達特性として有用な指標を足長,舟状骨高など10種の計測値より検討した. 年齢が増えるほど,足長,足高,前足幅が増加する一方で,舟状骨高の減少が明らかとなった. (共同研究につき担当部分抽出不可能) 共同発表者: Yamashita T, Sato M, Ino S, Ata S, Yamashita K

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5. 足部骨格3D計測システムとフットプリントによる小学生の足部の発達と運動特性の解析	-	2024年5月	第63回日本生体医工学会	新たに開発した足部骨格3D計測装置を用いて、小学生の足部骨格、足底と床面の設置面形状、重心動揺等の身体機能の動的特性との関連を検討した。中足部骨格形状の変数のうち、舟状骨高値の意義が明らかとなった。（共同研究につき担当部分抽出不可能）共同発表者：山下知子、宮下佳以、佐藤満、他3名
6. 足部の舟状骨モーメントアーム解析による中高年の足部変形への影響	-	2024年5月	第63回日本生体医工学会	足部骨格構造の三次元解析データを測定するために開発した簡易計測可能な機器で、中高年者の中足部骨格構造（舟状骨）と外反母趾との関連を検討し、リスク指標構築を模索した。（共同研究につき担当部分抽出不可能）共同発表者：山下和彦、山下知子、佐藤満

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 理学療法学科

氏名

木村 朗

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1 The Influence of Physical Attributes and Ranking on the Life Span of Sumo Wrestlers in the Meiji and Taisho Periods 明治・大正期の相撲力士における身体特性および番付と寿命の関連（査読付）	単著	2024年9月	JJPHPT, No11, 1. ISSN2189-5899. pp1-5.	明治・大正時代に活躍した力士を対象に、BMI（体格指数）と番付が寿命に与える影響を検討したものである。相撲力士は特有の身体的特徴を持ち、他の競技者とは異なる体格と食生活を有する。本研究は、2019年版『大相撲年鑑』を用いた後ろ向きコホート研究として、BMIと番付に基づき統計解析を行った。結果、標準的なBMIを持つ力士は肥満傾向の力士よりも寿命が長い傾向があった。また、高位の番付にある力士ほど、健康管理の環境が良好で寿命も長かった。BMIと番付はこの時期の力士の寿命に影響を与える重要な要因であることを示した。
2 Issues in Physiotherapy in Japanese Public Health from the Perspective of Differences with Other Countries 諸外国との違いから見る日本の公衆衛生における理学療法の課題（査読付）	単著	2024年9月	JJPHPT, No11, 1. ISSN2189-5899. pp6-14.	2024年時点における日本と他国（北米、カナダ、英国、オーストラリア、ドイツ）における理学療法士の公衆衛生分野での役割と課題を比較し、日本における改善点を明らかにすることを目的とした。各国の理学療法士協会や世界理学療法連盟の情報をもとに、定義・法制度・歴史・役割・必要スキルを分析し、AIで用語の統一と比較を行った。結果として、海外では理学療法士が健康増進や予防医療など公衆衛生活動に積極的に関与している一方、日本では医師の指示下での個別リハビリに限られ、法的制約や公衆衛生に関するスキル不足が課題である。今後は法制度の整備と疫学教育の充実が求められる。
3 Test-retest reliability of dynamic subjective visual vertical and visual dependency in older adults using virtual reality methods. バーチャルリアリティを用いた高齢者における動的・静的視覚垂直および視覚依存の再検査信頼性の評価（査読付）	共著	2024年12月	Perceptual and Motor Skills .131 (6). <a href="https://doi.org/10.1177/0031512524129209">https://doi.org/10.1177/0031512524129209</a>	健康な高齢者40名を対象に、スマートフォン型VR（SVR-SVV）を用いて動的・静的視覚垂直（SVV）および視覚依存（VD）の再検査信頼性を評価した。1週間後に再検査を実施し、ICCにより信頼性を分析した結果、すべての測定で良好～非常に高い信頼性が確認された。SVR-SVVは携帯性に優れ、臨床で有用である可能性が示唆された。（担当：方法論設計、データ解析、研究総括） Shota Hayashi, Tomohiko Kamo, Hirofumi Ogihara, Yuta Tani, Kazuya Hoshino, Kazutaka Kobayashi, Tatsuya Igarashi, <u>Akira Kimura</u>

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
4 Development of a Reaction Time Measurement Tool Using AI-Based Skeleton Estimation for Collision Avoidance in the Visually Impaired 視覚障害者の衝突回避のためのAI骨格推定を用いた反応時間測定ツールの開発 (査読付)	単著	2024年12月	SIG Technical Reports (AAC) 26(3) pp1-5 .	視覚障害者の衝突回避を支援するため、AIによる人体骨格推定プログラムをPythonコードで開発し、その有効性を検証した。群馬県の視覚障害者10名が参加し、電気刺激からの反応時間と姿勢回復時間を測定。平均反応時間は1.6秒、姿勢回復は2.8秒であった。本システムは、視覚障害者の安全性と自立を支援する有効な技術となる可能性が示唆された。
5 Feasibility of Neuro Prosthetic Functional Electrical Stimulation for Chronic Hemiplegia 慢性片麻痺に対する神経義肢(補綴)機能的電気刺激(FES)の実現可能性(査読付)	共著	2024年12月	J Clin Trials, Vol.15 Iss.1 No:1000580.	慢性期片麻痺患者において、麻痺手の運動認識を再喚起し廃用を予防するための神経補綴機能的電気刺激(NP-FES)の最適な刺激周波数が急性期と異なるかを検討した介入研究である。日本の介護施設や地域住民11名(50~90歳)を対象に、70Hzおよび120Hzの刺激を与え、35Hzを対照とした。結果、11名中9名が麻痺手の動きの再認識を報告し、70Hzで5名、120Hzで3名に手関節伸展角の安定化と疼痛軽減が認められた。これにより、慢性期におけるNP-FESの有効な初期設定は急性期と異なる可能性が示唆された。(担当: 方法論設計、データ解析、研究総括) Masaya Tanabe, Akira Kimura.
6 Relationship between sural nerve function, physical function, and the ability to perform activities of daily living in hospitalized elderly patients with proximal femoral fractures: A prospective observational study. 股関節近位部骨折を有する入院高齢者における腓腹神経機能、身体機能、および日常生活動作(ADL)の実施能力との関係: 前向き観察研究 (査読付)	共著	2025年3月	Cureus.17(3).e80 596.DOI:10.7759/cureus.80596	高齢者の大腿骨近位部骨折患者における、足根神経機能(CV/AP)が転倒リスクやリハビリ後の機能回復への影響を検討した。結果、足根神経の伝導速度(CV)とアクションポテンシャル(AP)が、日常生活活動の機能(SPPB、FIM)と有意に相関し、特に、FIMの排泄動作が低いAPと関連しており、年齢とAPが退院時の認知機能に影響を与えることが示された。これらは、足根神経機能の評価が転倒リスク管理やリハビリ計画に有用である可能性を示唆した。(担当: 方法論設計、データ解析、研究総括) Eisuke Takeshima, Akira Kimura.
7 Comparing electrode sites for clear electrical stimulation signals in the visually impaired 視覚障害者に向けた明確な電気刺激信号のための電極配置の比較 (査読付)	単著	2025年3月	JJPHT, No11,2. ISSN2189-5899.pp1-6.	視覚障害者向けの低周波電気刺激システムにおいて、心理的ストレスによる発汗が信号解像度に与える影響(ドライブ現象)を低減する条件を明らかにすることを目的に、6人の晴眼者に視覚剥奪下で、前腕背部とC7棘突起(逆神経支配法)の2つの部位に電極を配置して刺激を印加し、反応時間と信号認識率を測定した。結果、C7棘突起に配置した場合、前腕背部に比べて認識精度が高く(38.7% vs. 12.3%)、反応時間も短縮された(0.87秒 vs. 1.35秒)。これより、C7配置が発汗による信号劣化を軽減し、視覚障害者のガイドシステムの実用性向上に寄与する可能性が示された。
8 Translating visual information into electrical stimulation for person-position notification in the visually impaired 視覚障害者が対人の位置を知るための視覚情報を電氣的刺激に変換する技術(査読付)	単著	2025年3月	JJPHT, No11,2. ISSN2189-5899.pp7-12.	視覚障害者の社会参加と安全な移動を支援するため、低コストで実用的な人位置通知システムを開発し、その有効性と信頼性を検証した。6人の晴眼者に、視覚を遮ってモニターで人が移動する映像を利用し、その位置をRaspberry Piとカメラモジュールで検出し、腕に取り付けた電極を通じて触覚フィードバックを試みた。方向認識精度は91.7%、距離認識精度は85.0%で、全体の認識精度は85.6%、反応時間は平均2.1秒で、最速の反応は中央方向と近距離であった。主観的評価では、「刺激の明確さ」が最も高く(4.2/5.0)、一方で「刺激の快適さ」は低めの評価(3.5/5.0)であった。このシステムは高精度で方向と距離情報を伝達でき、視覚障害者の支援装置として、失明者の実験導入価値があると考えられた。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
9 Institutional limitations of Japanese physical therapy legislation and its contribution to public health: A critical analysis 日本の理学療法に関する法制度の制限と公衆衛生への貢献: 評価的分析 (査読付)	単著	2025年3月	JJPHPT, No11, 2. ISSN2189-5899. pp13-18.	1965年に制定された日本の理学療法士法は、医師の指導の下で医療支援を提供する枠組みを基盤としており、地域社会における予防活動や公衆衛生活動に関する法的基盤、制度的課題を明らかにし、地域社会での公衆衛生活動を支えるための制度設計の必要性を検討することを検討した。健康教室や災害支援、職場保健活動などは実施されているものの、制度的支援は少なく、72.5%の事例で継続的な公的資金の支援がなかった。地域社会での活動に参加するためには、制度的基盤の確立が必要であることを示した。
10 Unlocking public health potential: Reforming the Japanese PT law 公衆衛生の可能性を解放つ: 日本のPT法の改革 (査読付)	単著	2025年3月	JJPHPT, No11, 2. ISSN2189-5899. pp19-24.	先行研究で日本の理学療法士法 (PT法) が旧来の医療支援の枠組みに基づいており、予防や地域での公衆衛生活動を支える法的基盤が欠如している問題を指摘した。理学療法士は、医師の指導のもとで活動しており、地域社会での健康活動には十分な支援がないため、ボランティア的な活動が多い実態を明らかにした。調査結果は、73の活動のうち68.5%は継続的な公的支援を受けておらず、活動の拡大や報酬制度の反映が限られていた。これより、予防や災害支援、産業保健活動の持続可能性が脅かされていることが示された。理学療法士の公衆衛生活動への参加を支える法的基盤の整備が必要であり、現行法の改正の必要性を提示した。

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 2型糖尿病患者の療養支援に活かすヘルスリテラシーの組み合わせ評価の検討,	—	2024年5月	第57回日本糖尿病学会、東京	2型糖尿病患者の療養支援において、機能的・対話的・批判的ヘルスリテラシーの組み合わせを評価し、自己管理行動や療養成果との関連を明らかにすることで、個別化された支援の指針を導き出す試みの後、分析結果を報告した。小野澤しのぶ、木村朗、宇津木敏浩、他多数
2 Estimation of Arteriosclerosis Risk based on Health literacy Among Farmers in Suburban Japan 日本近郊農家におけるヘルスリテラシーに基づく動脈硬化リスクの推定	—	2024年5月	92nd European Atherosclerosis Society (EAS) Congress	日本の郊外の農業従事者における健康リテラシーをLS47を用いて測定し、血管機能としてPWVとの相関を調べた。女性参加者がほとんどを占めたため、性差の検討はできなかった。年代によってリテラシーとPWVの関係は逆転することが示された。Akira Kimura
3 Enhancing Patient Education: Leveraging Body Composition and Muscle Strength Data for Better HbA1c Control in Early-Stage Diabetes 患者教育の強化: 早期糖尿病におけるHbA1cコントロール向上のための体組成と筋力データの活用	—	2024年6月	American Diabetes Association 84th Scientific Sessions	日本の地方都市の基幹病院の糖尿病外来に初診で受診した館j多225名中95名に体組成測定を2か月ごと3回実施し、詳細な体組成の変化を記録した。分析はレインドロップ解析と名付けた前向きコホートでと後ろ向きコホートを組み合わせた手法を用いて分析した。HbA1cが正常化した群では3回目の体組成上右の腕の脂肪率と体幹の筋肉量が有意な血糖コントロールの何らかの予測因子となる可能性をベイズファクターによって示した。Akira Kimura

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 Effect of sarcopenia on vascular stiffness in a population of walkable older people living in long-lived areas using inverse probability weighting methods 長寿地域に住む歩行可能な高齢者集団におけるサルコペニアが血管スティフネスに及ぼす影響：逆確率重み付け法を用いた分析	—	2024年9月	23rd IEA World Congress of Epidemiology (WCE 2024)	長寿地域である沖縄県大宜見村で歩行可能な集団において、彼らのサルコペニアの罹患と血管硬度の影響を推定することである。そのために単純比較法を用いた推定と逆確率重み付け法を用いてリアルデータについて偽比較対照試験的分析による推定方法の結果を比較し、血管硬度に及ぼすサルコペニアの影響を報告した。 <a href="#">Akira Kimura</a>
5 大宜味村在住高齢者集団における血管硬度と高い関連性を持つESAS6の評価項目	—	2024年10月	第83回日本公衆衛生学会	長寿地域として沖縄県大宜見村で歩行可能な集団において、彼らの血管硬度とEAS6の影響を推定した。アウトカムを血管硬度とESAS6の相関で表した。フレイル・サルコペニア傾向では、外出回数が維持されると高い負の相関関係、椅子からの立ち上がりは何もつかまらず可能な場合にも負の相関が認められたことを報告した。 <a href="#">木村 朗</a> 、 <a href="#">小野澤しのぶ</a> 、 <a href="#">堀風雅</a> 。
6 Validation of an AI skeletal estimation program for calculating response times of object proximity perception devices for the visually impaired and others 視覚障害者等のための物体近接知覚デバイスのレスポンスタイム計算用AI骨格推定プログラムの妥当性検証	—	2024年10月	ACRM (American Congress of Rehabilitation Medicine) 101st ANNUAL FALL CONFERENCE & EXPO	視覚障害者等のための物体近接知覚デバイスのレスポンスタイム計算用AI骨格推定プログラムを開発し、その妥当性を検証した。被験者につき1時間のセッションを2回実施、実験映像を用いたプログラムの操作マニュアルを作成した。5分以内で時系列座標ポイントを取得させた。事前知識のない独立した研究者が厳しい時間制約の下でプログラムを文書化・使用できたことを報告した。 <a href="#">Akira Kimura</a>
7 Development of a Reaction Time Measurement Tool Using AI-Based Skeleton Estimation for Collision Avoidance in the Visually Impaired. 視覚障害者の衝突回避のためのAI骨格推定による反応時間測定ツールの開発	—	2024年12月	第26回情報アクセシビリティ研究会、浜松市	視覚障害者の衝突回避支援のため、AIベースの骨格推定プログラムを開発した。群馬県の視覚障害者10名を対象に反応時間を測定したところ、2メートル先の接近物体への平均反応時間は1.6秒、姿勢復帰に2.8秒を要した。この結果は、AI技術が視覚障害者の自立支援用安全デバイス開発に貢献できる可能性を示したことを報告した。 <a href="#">木村 朗</a>
8 Walkability Scoreと身体組成情報との複合要因による糖尿病外来通院患者の血糖コントロールの変動影響の検討	—	2025年2月	第35回日本疫学学会、高知市	Walkability Score (WS) と2型糖尿病患者の血糖管理 (HbA1c) および身体組成の関係をパネルデータ分析にて分析した。WSの異なる環境に住む2型糖尿病患者のHbA1cの時系列での変動を評価し、環境要因が血糖コントロールに与える複合要因として身体組成との組み合わせの影響を示したことを報告した。 <a href="#">木村 朗</a>

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 理学療法学科 氏名 鈴木 学

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
理学療法士養成機関に在籍中の学生が進路変更を考える要因	—	2024年10月	第43回関東甲信越ブロック理学療法学会（於：千葉）	A大学理学療法学科255名を対象に進路変更の考慮の有無について調査した。進路を変更したいと思う程度は重回帰分析の結果、目指している理学療法士像（ $\beta=-0.28$ ）、思い描いていた職業（ $\beta=-0.49$ ）という項目で標準偏回帰係数に有意差がみられた。 (共同研究につき本人の担当部分抽出不可能) 表者：小林桃子、鈴木学

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 理学療法学科 氏名 富田 浩

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 理学療法学科 氏名 岡崎大資

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
26 標準理学療法学 物理療法学第6版 IV水治療法	共著	2024年12月	医学書院	編集：菅原憲一、松田雅弘 分担執筆：菅原憲一、藤田峰子、大鶴直史、小山貫之、前重伯荘、工藤慎太郎、寒川美奈、岡崎大資、他 担当：IV水治療法（pp90-104） 水治療法の定義・分類、水治療法の基礎と生理学的作用、水治療法の実際、水治療法の実習、水治療法の臨床応用

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
19 やる気を引き出す行動変容技法	—	2024年11月	群馬県理学療法士作業療法士言語聴覚士連絡協議会 研修会	「やる気を引き出す行動変容技法」として、研修会にて依頼講演を行った。行動分析的知識を提供し、やる気を行動分析的に捉えた場合、やる気は個人の内から湧き出るものではなく、他者評価によってなされる事象であることを明確に提示した。また、行動分析学を用いたやる気を引き出す介入方法について、実践を含め分かりやすく説明した。 岡崎大資
20 やる気を引き出す行動変容技法	—	2024年11月	群馬県理学療法士作業療法士言語聴覚士連絡協議会 研修会	上記19の研修会と同じ内容を別日に実施した。「やる気を引き出す行動変容技法」として、研修会にて依頼講演を行った。行動分析的知識を提供し、やる気を行動分析的に捉えた場合、やる気は個人の内から湧き出るものではなく、他者評価によってなされる事象であることを明確に提示した。また、行動分析学を用いたやる気を引き出す介入方法について、実践を含め分かりやすく説明した。 岡崎大資
21 急性疼痛と慢性疼痛に対する理学療法のグローバルスタンダード	—	2025年1月	第32回埼玉県理学療法学会	当学会の教育講演IV（運動器系）急性疼痛と慢性疼痛に対する理学療法のグローバルスタンダードとして、講演した。第三世代の行動療法として紹介されるアクセプタンス&コミットメント・セラピーについて説明し、慢性疼痛に対する集学的治療方法を紹介した。 岡崎大資
22 やる気を引き出す行動変容技法	単著	2025年3月	群馬県地域リハビリテーション支援センター ニュースレター	「やる気を引き出す行動変容技法」として、やる気を環境からの刺激によって他者評価される個人の生起行動と捉えた場合、行動のきっかけや行動の結果を他者が操作することで、対象者のやる気が高まったように見えるということを分かりやすく解説し、具体的介入方法を記した。 岡崎大資

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 理学療法学科 氏名 宗宮 真

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. リハビリテーション専門職のための医療安全教育FD リハビリテーション医療と医療安全教育	—	2024年12月	医療安全教育手法に基づく多職種人材育成共同利用拠点 多職種人材育成のための医療安全教育センター医療安全教育FD	リハビリテーション医療における医療安全について、日本リハビリテーション医学会が提示しているガイドライン初版・第2版のポイントや変更点を示しながら、実際の事例や対応、各疾患領域での特に注意すべきリスク管理について、各臨床現場へ提案を交えて報告した。さらに、発表者である他の専門職や座長とともに医療安全教育の在り方について議論した。（文献検討・事例提示・考察）宗宮 真

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 理学療法学科

氏名

浅田 春美

### 著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

### 学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等 の名称	概 要

### その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
1. 高齢者の転倒予防運動プログラムが足底感覚機能に及ぼす効果	-	2024年9月	第39回ライフサポート学会大会（LIFE2024）	地域在住高齢者49名を対象に、6か月間の転倒予防事業前後での足底感覚機能を比較し、運動介入の効果として足底感覚機能が改善することを確認した。転倒予防効果の一部は感覚機能の改善に因る可能性を示唆した。（共同研究につき担当部分抽出不可能）共同発表者：佐藤満、浅田春美、山下知子、山下和彦

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 理学療法学科

氏名

城下 貴司

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Analysis of windlass mechanism according to one walking cycle (一歩行周期におけるウインドラス機構の解析) (査読付き)	単著	2024. 4	J Phys Ther Sci. 2024 Apr;36(4):155-160.	本研究は、歩行周期における内側縦アーチ (MLA) の高さ変化からウインドラス機構を算出し、関節モーメント、角度、重心移動と比較した。20名の健康成人を対象に三次元動作解析を行った。終末期 (49%歩行周期) にMLA高さは最小 (20.6±6.0mm) となり、足関節背屈角や内側足底屈モーメント、重心前方移動が最大に。62%ではMLAが最大 (26.8±4.8mm) となり、ウインドラス機構の発動が示された。さらに69%ではMLAが急上昇 (61.7±22.7mm) し、第2のウインドラス機構が確認された。

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Yバランステストと足関節背屈可動域の関係-静的ストレッチとマリガンMWMとの違い	—	2024. 9	日本スポーツ整形外科学会2024	ストレッチとモビライゼーションとの効果を違いをYbalance testを使用して4週間の縦断研究で判定した。特に後外側方向で有意にストレッチよりもモビライゼーション群が良くなった。前方方向が着目されるが前方方向はむしろ悪化した。
走行におけるウインドラス機構の再考	—	2024. 12	一般社団法人 日本足の外科学会 2024	ランニング動作におけるウインドラス機構について、新たな知見があったので報告した。今までの報告は立脚相の65-70%でウインドラス機構が巻き上がるという報告が多かった。しかしながら、足内側縦アーチの形状を動的に計測すると98%で巻き上がることを報告した。

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 理学療法学科

氏名

洞口貴弘

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Lifestyle changes of chronic stroke survivors from disused upper extremity to assistive upper extremity: a single-case qualitative study the effects of purposeful electrical stimulation therapy in home-based rehabilitation (在宅リハビリにおける目的志向型電気刺激療法の効果：使用不能な上肢から補助的上肢への変化に伴う慢性期脳卒中者の生活の変容 — 単一事例による質的研究 —) (査読付)	共著	令和6年12月 2024/12	Cognition Rehabilitation 5(1) : 43-49	本研究は、重度片麻痺により使用不能だった上肢が、PA-ESTにより補助的に使えるようになった慢性期脳卒中者の生活変容を質的研究で明らかにしたものである。分析の結果、「無意味な生活の強要」「自己変容」「生活環境への適応」など7カテゴリが抽出された。使用不能な上肢の機能回復は、生活の中核を再発見させ、自己の存在意義や生活様式の再構築につながることを示唆された。 (実験、考察を担当) 共著者：Minami, S., Nakamura, F., Kobayashi, R., <u>Horaguchi, T.</u> , Aoki, H., Fukumoto, Y., Shinoda, A., and Aoyama, T.
Increased activity in frontopolar cortex when writing meaningful sentences (意味のある文章を書いた時に亢進される前頭極皮質の活動) (査読付)	共著	令和6年12月 2024/12	Cognition Rehabilitation 5(1) : 50-58	単語や一文字を書く際の前頭葉・頭頂葉の関与は広く知られているが、日常的な姿勢で長い文章を書く際の脳活動は未検討であった。本研究では近赤外分光法 (fNIRS) を用いて、意味のある文章を書く場合と、同じ文字を無作為に並べた文字列を書く場合の脳活動を比較した。その結果、意味のある文章を書くとき、右前頭極の活動が有意に高まることが明らかとなった。この部位は、自然な姿勢での手の運動制御とともに、文の意味処理に関与している可能性が示唆された。 (実験、解析、考察、執筆を担当)(筆頭著者、責任著者) 共著者： <u>Horaguchi, T.</u> and Minami, S.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Transformative Rehabilitation Journey of Individuals with Chronic Severe Hemiplegic Upper Limb: A Qualitative Study on Purposeful Activity-Based Electrical Stimulation Therapy. (慢性期重度片麻痺上肢を有する者の変容的リハビリテーションの過程：目的志向型活動に基づく電気刺激療法に関する質的研究)(査読付)	-	令和6年 2024/10	1st Occupational Therapy Congress, Europe Krakow, Poland	本研究は、重度片麻痺上肢をもつ慢性期脳卒中者が目的志向型電気刺激療法 (PA-EST) を受けた経験を質的に探るものである。脳血管疾患の増加に伴い、患者の生きがいや幸福感に与えるリハビリの影響を理解することが重要となっている。対象は視床出血後7年経過した50代の日本人男性で、1年間の在宅PA-ESTにより上肢機能がFMA 28→50に改善した。複数回のインタビューに基づくグラウンデッド・セオリー分析により、「目標の明確化」「中核スキルの獲得」「生活環境への適応」など7つのカテゴリーが抽出され、リハビリによる生活の再構築と心理的成長が明らかとなった。(考察の一部を担当) 共著者：Minami, S., Nakamura, F., Kobayashi, R., <u>Horaguchi, T.</u> , Aoki, H., Fukumoto, Y., Shinoda, A., and Aoyama, T.
Development of the Family Caregiver Activity Questionnaire: Exploratory and Confirmatory Factor Analysis on Caregiving Status. (家族介護者活動質問紙の開発：介護状況に関する探索的および確認的因子分析)(査読付)	-	令和6年 2024/11	The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress, Sapporo, Japan	在宅療養者を介護する家族の状況を測定する質問紙を開発し、介護経験・対応環境を含む14項目について201名を対象に調査を実施。探索的および確認的因子分析の結果、「孤独感の優位」と「無力感」の2因子構造が得られ、質問紙の信頼性と妥当性が確認された。(考察の一部を担当) 共著者：Minami, S., Nakamura, F., Kobayashi, R., <u>Horaguchi, T.</u> , Aoki, H., Fukumoto, Y., Shinoda, A., and Aoyama, T.
Basic Knowledge of NIRS. In: Empowering Independence: A hands on exploration of purposeful activity-based electrical stimulation therapy for severe upper extremity paralysis. (近赤外分光法における基礎知識())(査読付)	-	令和6年 2024/11	Precongress workshop of The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress, Sapporo, Japan	脳の活動を計測する機器にはいくつかあるが、特に今後在宅で脳の活動を計測しつつリハビリをする際に用いられるであろう有力な機器である近赤外分光法(NIRS)について、その特徴や、導入のメリットとデメリットについて、NIRSを用いた研究を行った経験を基に講演した。小型で素人にも装着しやすく電気ノイズにも強く、在宅でのリハビリに適している反面、競合する機器である脳波計よりも高い側面がある。 (発表を担当) 共著者： <u>Horaguchi, T.</u>

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 理学療法学科 氏名 黒川 望

### 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
図解 運動の神経生理学	共著	2024年8月	北國新聞社	編著：藤原勝夫、清田直恵 分担執筆：藤原勝夫、清田直恵、国田賢治、矢口智恵、伊禮まり子、清田岳臣、黒川望 担当：6章（pp62-85） 感覚神経系の構造と機能

### 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
なし				

### その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
なし				

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 理学療法学科

氏名

橋口 優

## 著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

## 学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
13 Effects of Gait Speed and Sole Adjustment on Shoe-Floor Angles: Measurement Using Shoe-Type Sensor (査読付) (歩行速度と靴底調整が靴底角度に及ぼす影響：靴型センサーによる測定)	共著	令和6年10月1日	Biomechanics 4(4) 595-604	本研究では、靴型センサーを用いて、異なる歩行速度や靴底の傾き条件下での靴と床の角度（つま先上げ・下げ、回内・回外）を測定した。その結果、歩行速度の上昇により多くの角度が有意に増加し、特につま先上げ・下げ角や回内・回外角に影響を与えた。一方、靴底の傾きによる影響は限定的で、初期接地時の回外角のみが有意に変化した。これにより、靴の動きは靴底の調整よりも歩行速度の影響を強く受けることが示された。 (研究計画、データ測定・解析、結果の考察、論文執筆を担当) (筆頭論文) [共著者]Yu Hashiguchi, Tsuguru Numabe, Ryosuke Goto.
14 Muscle synergy in several locomotor modes in chimpanzees and Japanese macaques, and its implications for the evolutionary origin of bipedalism through shared muscle synergies (査読付) (チンパンジーとニホンザルのいくつかの運動様式における筋シナジーと、筋シナジーの共有による二足歩行の進化的起源への示唆)	共著	令和6年12月28日	Scientific Reports 14(1)	本研究は、チンパンジーとニホンザルを対象に、直立二足歩行・四足歩行・垂直登攀における筋シナジーを分析し、異なる移動様式に共通する運動制御の基盤を明らかにした。チンパンジーでは、直立歩行中の支持期と遊脚期のシナジーが、それぞれ垂直登攀と四足歩行のものと類似しており、これらの運動様式間でシナジーが共有されることが示唆された。一方、ニホンザルでは直立歩行の安定性の低さから、完全な共通性は認められなかった。(研究計画、結果の考察を担当) [共著者]Ryosuke Goto, Susan Larson, Tetsuya Shitara, Yu Hashiguchi, Yoshihiko Nakano.

## その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 理学療法学科

氏名

加茂智彦

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
7. 生活期におけるリハビリテーション・栄養・口腔管理の協働に関するケアガイドライン	共著	2024年5月	医学書院	要介護高齢者の日常生活活動および栄養状態、摂食嚥下や口腔内の問題は、相互に関連・影響するもので、単独介入ではなく、多職種による一体的な複合的介入こそ最も効果があると考えられてきた。しかし、その効果を検証した研究は少なく、ガイドラインも無かった。自立支援・重度化防止に向け、CQ11問・BQ21問を含む、リハビリテーション・栄養・口腔管理の一体的取り組みのための国内外初のガイドライン
8. 図解 理学療法技術ガイド 第5版	共著	2024年10月	文光堂	第1章 評価, 第2章 運動療法, 第3章 物理療法, 第4章 義肢装具・補助具, 第5章 各種疾患別理学療法, 第6章 地域リハビリテーション, 第7章 理学療法管理という構成で、理学療法を行ううえで重要なこと、臨床で役立つことがほぼ網羅されているガイドブック。前庭障害の章を担当。

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
52. Characteristics and Methodological Quality of the Top 50 Most Influential Articles on Stroke Rehabilitation: A Bibliometric Analysis (脳卒中リハビリテーションに関する最も影響力のある記事トップ50の特徴と方法論的品質: 書誌学的分析) (査読有)	共著	2024年4月	Am J Phys Med Rehabil. 2024 Apr 1;103(4):363-369.	この研究の目的は、脳卒中リハビリテーションに関する最も影響力の高い論文トップ50について、被引用回数、出版年、研究デザイン、研究テーマなどの特徴を包括的に調査し、エビデンスレベルと方法論的質を評価することである。被引用数だけでは研究の質を示す信頼できる指標にはならない可能性を示唆している。共著者: Ogihara H, Yamamoto N, Kurasawa Y, <b>Kamo T</b> , Hagiwara A, Hayashi S, Momosaki R.
53. Diagnostic accuracy of chest X-ray and CT using artificial intelligence for osteoporosis: systematic review and meta-analysis. (人工知能を用いた骨粗鬆症における胸部X線検査とCTの診断精度: 系統的レビューとメタ分析) (査読有)	共著	2024年9月	J Bone Miner Metab. 2024 Sep;42(5):483-491.	骨粗鬆症の診断における胸部X線検査とコンピュータ断層撮影 (CT) 検査の診断精度を評価するため、診断検査精度ガイドラインに従った系統的レビューとメタ解析を実施した。本レビューには、11,369名の参加者を対象とした9件の研究が含まれた。このレビューは、AIを用いた胸部X線検査が骨粗鬆症の診断において高い感度を有し、機会的スクリーニングにおける潜在的な有用性を示唆している。共著者: Yamamoto N, Shiroshita A, Kimura R, <b>Kamo T</b> , Ogihara H, Tsuge T
54. Test-Retest Reliability of Dynamic Subjective Visual Vertical and Visual Dependency in Older Adults Using Virtual Reality Methods (高齢者におけるバーチャルリアリティ手法を用いた動的視覚垂直感覚と視覚依存性のテスト-リテスト信頼性) (査読有)	共著	2024年12月	Percept Mot Skills. 2024 Dec;131(6):2069-2084.	本研究の目的は、VR手法を用いた動的SVVとVDのテスト-リテスト信頼性を評価することである。SVR-SVVを用いた動的SVVおよびVDの測定は、良好なテスト-リテスト信頼性を示した。共著者: Hayashi S, <b>Kamo T</b> , Ogihara H, Tani Y, Hoshino K, Kobayashi K, Igarashi T, Kimura A.

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
55. Impact of post-hospitalization dysphagia on dependence in activities of daily living at discharge in older adults with hip fracture: A nationwide inpatient database study(大腿骨骨折を伴う高齢者の退院時の日常生活動作(ADL)における依存度に対する退院後嚥下障害の影響: 全国入院患者データベース研究)(査読有)	共著	2025年1月	Clin Nutr ESPEN. 2025 Jun;67:355-361.	本研究の目的は、大腿骨骨折を伴う高齢者の日常生活動作における依存度に対する嚥下障害の影響を明らかにすることである。大腿骨骨折を有する高齢者において、嚥下障害は退院時の日常生活動作に負の影響を及ぼす。共著者: Tamura S, <b>Kamo T</b> , Kobayashi S, Saito H, Igarashi T, Kaizu Y, Miyata K, Kubo H, Ogihara H, Momosaki R.
56. Effectiveness of early rehabilitation interventions in patients with traumatic brain injury using a large database(外傷性脳損傷患者における早期リハビリテーション介入の有効性: 大規模データベースを用いた分析)(査読有)	共著	2025年2月	PM R. 2025 Feb;17(2):170-177.	本研究の目的は傾向スコア分析と大規模データベースを用いて、中等度から重度のTBI患者における早期リハビリテーションの有効性と安全性を検討すること。中等度から重度のTBI患者における早期リハビリテーションは、入院死亡率の増加なしに、機能改善の効率化と入院期間の短縮と関連している。共著者: Hayashi S, <b>Kamo T</b> , Momosaki R.
57. バランス機能低下と浮動性めまいを認めた右視床出血症例に対する前庭リハビリテーションの実践	共著	2025年2月	神経理学療法学, 2025年 4 巻 1 号 p. 12-25	目的: 右視床出血症例に対し、バランス練習を含めた前庭リハビリテーションを実施し、バランス機能や浮動性めまいの改善を認めたため、ここに報告する。結論: 前庭機能低下を呈した右視床出血症例に対する前庭リハビリテーションはバランス機能の改善に有用である可能性が示唆された。共著者: 平野 晋吾, 五十嵐 達也, 林 翔太, 猪岡 弘行, <b>加茂 智彦</b>
58. Effects of Customized Web Video-Based Vestibular Rehabilitation for Patients With Vestibular Hypofunction: A Randomized Controlled Study(カスタム設計のウェブ動画を用いた前庭機能障害患者に対する前庭リハビリテーションの効果: ランダム化比較試験)(査読有)	共著	2025年1月	Otol Neurotol. 2025 Jun 1;46(5):573-580.	目的: 慢性前庭機能障害患者におけるカスタマイズされたウェブ動画ベースの前庭リハビリテーションの効果を調査すること。結論: 本研究では、カスタマイズされたウェブ動画ベースのVRが冊子ベースのVRと比較してDGIを改善し、介入効果は6週間後のフォローアップでも維持されたことが示された。共著者: <b>Kamo T</b> , Ogihara H, Tanaka R, Azami M, Kato T, Tsunoda R, Fushiki H.

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 理学療法学科

氏名

田辺将也

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
7 Feasibility of Neuro Prosthetic Functional Electrical Stimulation for Chronic Hemiplegia(慢性片麻痺に対する神経補綴的機能電気刺激の実現可能性)(査読付)	共著	2024年12月	J Clin Trials, Vol.15 Iss. 1 No:1000580	慢性期片麻痺患者12名を対象に、Neuro-Prosthetic Functional Electrical Stimulation (NP-FES) の周波数別効果 (35Hz、70Hz、120Hz) を比較した。刺激により「麻痺手の感覚が戻った」と答えた人数は70Hzで最多、痛みや手首の安定性の面でも70Hzが最もバランス良好だった。これにより、NP-FESは70Hz条件で安全かつ実用的に使用できる可能性が示された。「主として研究計画の立案、刺激条件設計、解析、論文執筆を担当」 Masaya Tanabe, Akira Kimura (筆頭論文)

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14 外出困難高齢者はオーラルフレイルのリスクが高いのか？	—	2024年11月	第11回日本地域理学療法学会学術大会	群馬県高崎市在住の高齢者を対象に、通いの場参加者 (18名) と移動販売車利用者 (8名) を比較し、オーラルフレイルリスクと生活環境の違いを調査した。身体機能やフレイル指標に有意差はなかったが、移動販売車利用者はスーパーまでの距離が遠く、外出頻度・通いの場参加が少ない傾向がみられた。また、歯科受診頻度が有意に少ないことが明らかとなり、外出困難がオーラルフレイルに影響を及ぼす可能性が示唆された。今後は移動販売車を活用した健康支援の可能性が期待される。「主として研究計画の立案、データの測定、統計処理、考察を担当」田辺 将也, 田村 奈々, 三上 杏奈, 久保 翔舞, 佐藤 嶺, 伊東友希乃, 田沼 未帆, 浅川 優佳

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 理学療法学科 氏名 林 翔太

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Effectiveness of early rehabilitation interventions in patients with traumatic brain injury using a large database. (外傷性脳損傷患者における早期リハビリテーション介入の有効性：大規模データベースを用いた分析) (査読付き)	共著	2024年8月	PM & R. 17(2): 170-177.	傾向スコア分析と大規模データベースを使用して、中度から重度の TBI 患者の早期リハビリテーションの有効性と安全性を検証した。三次医療施設の大規模な医療データベース (JMDC データベース) を使用して、早期リハビリテーションと遅延リハビリテーションの結果を比較した。傾向スコアを用いた逆確率重み付けを行った結果、合計患者数は6152人となった。そのうち3074人 (50.0%) が早期リハビリテーションを受けた。早期リハビリテーション群では、入院死亡率 ( $p = .438$ ) に差は認められなかったが、BI効率は改善し ( $\beta = 0.86, p < .001$ )、入院期間は短縮した ( $\beta = -5.00, p = .018$ )。結論：中等度から重度の TBI 患者に対する早期のリハビリテーションは、入院患者の死亡率の増加なしに、より効率的な機能改善と入院期間の短縮につながった。(全体構想、全体の考察、執筆を担当)筆頭著者 <b>Shota Hayashi</b> , Tomohiko Kamo, Ryo Momosaki
Estimation of minimal clinically important difference for 6-minute walking distance in patients with acute stroke using anchor-based methods and credibility instruments. (急性脳卒中患者における6分間歩行距離の最小臨床的意義のある差の推定：アンカーベース手法と信頼性評価ツールを用いた分析) (査読付き)	共著	2024年10月	Physiother Res Int. 29(4):e2119.	アンカー法を用いて、急性期脳卒中患者における歩行持久力の指標である6MWDのMCIDを推定することを目的とした。ベースラインから2週間後の追跡測定までの6MWDの変化に基づき、患者とセラピストによる全般的変化評価尺度 (p-GRC, t-GRC) を外部アンカーとして、アンカーベースの手法 (受信者動作特性曲線、予測モデル、調整モデル) を用いてMCIDを推定した。「意味のある変化」の精度は、曲線下面積から推定した。解析対象は58例であった。各アンカーのMCIDは、p-GRCでは78.7~100.0m、t-GRCでは95.2~99.5mであった。p-GRCは優れた精度を示した (曲線下面積 > 0.8)。p-GRCをアンカーとして用いた場合、患者の50%以上で改善がみられた。p-GRCは高い精度と信頼性を示したため、MCIDは78.7mと推定された。(実験の遂行、全体の考察、執筆を担当)筆頭著者 <b>Shota Hayashi</b> , Ren Takeda, Kazuhiro Miyata, Takamitsu Iizuka, Tatsuya Igarashi, Shigeru Usuda
Test-Retest Reliability of Dynamic Subjective Visual Vertical and Visual Dependency in Older Adults using Virtual Reality Methods. (高齢者における動的主観的視覚垂直感覚と視覚依存性のテスト-リテスト信頼性：バーチャルリアリティ法を用いた研究) (査読付き)	共著	2024年10月	Percept Mot Skills. 131(6): 2069-2084.	VR法を使用して動的SVVとVDの再テスト信頼性を評価した。スマートフォンベースのVRシステムを使用して、40人の高齢者の静的および動的SVVを評価しました (SVR-SVV)。再検査信頼性は、静的SVV ( $ICC = .817, p < .001$ )、CW-SVV ( $ICC = .896, p < .001$ ) で良好であり、CCW-SVV ( $ICC = .914, p < .001$ )、VD ( $ICC = .937, p < .001$ ) では非常に良好であった。(実験の遂行、全体の考察、執筆を担当)筆頭著者 <b>Shota Hayashi</b> , Tomohiko Kamo, Hirofumi Ogihara, Yuta Tani, Kazuya Hoshino, Kazutaka Kobayashi, Tatsuya Igarashi, Akira Kimura

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
バランス機能低下と浮動性めまいを認めた右視床出血症例に対する前庭リハビリテーションの実践。(査読付き)	共著	2024年12月	神経理学療法学. 2024, 4(1), 12-25.	視床出血を呈した70代男性。運動麻痺や体性感覚の低下は軽度であったが、立位保持時や歩行における方向転換時にふらつきを認め、日常生活活動で常に見守りを要した。バランス練習を含めた前庭リハビリテーションを1カ月間行った。その結果、自覚的視性垂直位、Head Impulse Test、Mini-Balance Evaluation Systems Test、10m歩行速度、Timed Up and Go Testが改善し、浮動性めまいは消失した。重心動揺計を用いたmodified Clinical Test of Sensory Interaction and Balanceでは閉眼条件における各パラメーターの改善を認めた。日常生活活動では歩行自立に至った。前庭機能低下を呈した右視床出血症例に対する前庭リハビリテーションはバランス機能の改善に有用である可能性が示唆された。 共同著者(共同研究のため抽出困難) 平野 晋吾, 五十嵐 達也, <b>林 翔太</b> , 猪岡 弘行, 加茂 智彦
Digital health interventions for non-older individuals at risk of frailty: A systematic review and meta-analysis (脆弱性リスクを有する非高齢者に対するデジタルヘルス介入: 系統的レビューとメタ分析) (査読付き)	共著	2025年3月	Digit Health. 21:11:2055207625132856 6.	フレイルリスクのある非高齢者におけるデジタルヘルス介入が、身体活動、身体機能、および社会機能の改善に及ぼす影響を検証することを目的とした。フレイルリスクのある非高齢者を対象とし、身体活動、身体機能、および社会機能に関するフレイル関連アウトカムを報告するデジタルヘルス介入に関するランダム化比較試験を収集した。文献をレビューし、バイアスリスクを評価した。本レビューには合計63件の記録が含まれた。メタアナリシスの結果、デジタルヘルス介入は、身体活動量、1日歩数、歩行テスト、歩行速度、最大酸素摂取量 (VO2peak)、動的歩行指数、タイムドアップアンドゴーテスト、およびMOS 36項目簡易健康調査 (社会機能) にプラスの影響を与えたことが示されました。しかし、身体活動時間への有意な影響は認められなかった。 共同研究のため抽出困難 Momoko Tohyama, Ryo Momosaki, Yuka Shirai, Kenta Ushida, Yuki Kato, Miho Shimizu, Issei Kameda, Yuya Sakurai, Asuka Hori, Masatsugu Okamura, Takahiro Tsuge, Hiroki Sato, Yuki Nakashima, Kaori Endo, <b>Shota Hayashi</b> , Norio Yamamoto, Daisuke Matsumoto, Kenichi Fudeyasu, Hidenori Arai.

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
18 動的SVVの評価: 適正な施行回数の検討	-	2024年6月	第3回日本前庭理学療法研究会学術集会 (福岡)	健康な高齢者において動的SVVを含めて級内相関が高い最少施行回数を検証することを目的とした。SVVはスマートフォンアプリ (SVV, Kuroda ENT clinic) とVRゴーグル (VRG-D02PBK, ELECOM) を使用し、静的SVV (Static SVV: S-SVV), 時計回りSVV (Clockwise SVV: CW-SVV), 反時計回りSVV (Counter-clockwise SVV: CCW-SVV) をランダムに測定した。それぞれ10回ずつ測定し、3回、6回、10回の平均値 (°) を代表値として用いた。SVVは1週間後に再評価を実施した。各平均値 (3回、6回、10回) の級内相関係数 (ICC1, 1) を推定した。VR-SVVによる各SVV測定は中等度~良好な信頼性が確認された。 測定の遂行、全体の構成、筆頭演者 <b>林翔太</b> , 加茂智彦, 荻原啓文
視床出血を呈した一症例に対する前庭リハビリテーションのバランス機能に対する効果	-	2024年6月	第3回日本前庭理学療法研究会学術集会 (福岡)	右視床出血によりバランス機能低下と浮動性めまいを呈した症例に対して、前庭リハビリテーションを取り入れたバランス練習を行い、その有効性を検討した。前庭リハビリテーションはGaze Stabilization Exercises (GSE) とBalance Exercisesで構成され、それぞれ約12分間ずつ実施した。前庭リハビリテーションによる反復的な求心性前庭情報の入力、中枢代償を促進し、前庭機能やバランス機能改善に寄与した可能性が示唆された。 共同研究のため抽出不可能 平野 晋吾, 五十嵐 達也, 猪岡 弘行, <b>林翔太</b> , 加茂智彦

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
健康高齢者における静的SVVと側方性の反動的姿勢制御の関係	-	2024年6月	第3回日本前庭理学療法研究会学術集会（福岡）	本研究は健康高齢者の静的SVVと側方性の反動的姿勢制御の関係を明らかにした。対象は健康高齢者36名（年齢71.6±4.2歳，女性14名）であった。側方性の反動的姿勢制御の指標には日本語版Mini-Balance Evaluation Systems Testの項目6(MB-LR)を用いた。0点はいずれかあるいは両方で回復不可(poor群)，1点はいずれかあるいは両方で数歩のステップで回復(fair群)，2点は両側とも1歩で回復(good群)と判定される。各群に分類し，静的SVVの絶対値を一元配置分散分析(ANOVA)で比較した。側方性の反動的姿勢制御は接地面を視覚で捉えることのできない特異な課題であり，より前庭系の貢献が必要な課題である可能性が示唆された。共同研究のため抽出不可能 五十嵐達也， <b>林翔太</b> ，加茂智彦
脳卒中患者における歩行自立度を予測するTWIST toolの外的検証	-	2024年9月	第22回日本神経理学療法学術大会（福岡）	本研究はTWIST toolの外的検証を行うことを目的とした。対象は急性期脳卒中患者であった。予測因子として年齢、発症後7日以内の麻痺側膝関節伸展筋力(Manual Muscle Testing: MMT)、BBS、アウトカムとして発症後4・6・9・16・26週のfunctional ambulation categories (FAC)を測定し、退院後のFACは電話連絡にて評価した。TWIST toolに基づき、年齢、麻痺側膝関節伸展MMT、BBSよりスコアリングを行い、FAC4以上を歩行自立として発症後4～26週の各タイムポイントにおける歩行自立度を算出した。スコアが高いほど歩行自立度が高く、スコア0では発症後26週まで全期間にて0%であったが、スコア4では発症後4週で75%、16週で100%となった。TWIST toolの外的検証を行った結果、報告されているモデルと同様の傾向を示した。AUCは0.934で識別能は良好、O/E比は0.7以上で較正能も比較的良好であった。共同研究のため抽出不可能 岩村佳世、武田廉、高橋瑞刀、五十嵐達也、秋山裕樹、 <b>林翔太</b> 、宮田一弘、和田直樹、臼田滋
脳卒中者の発症6か月後の歩行自立を予測するAustralian modelの外部検証	-	2024年9月	第22回日本神経理学療法学術大会（福岡）	本研究では本邦の脳卒中者を対象に歩行自立を予測するAustralian modelの外的検証を行い、臨床活用可能か検討することを目的とした。予測因子の年齢とNIHSSの測定は第7病日以内に実施した。アウトカムの歩行自立度の測定にはFunctional Ambulation Categories (FAC)を用い、発症6ヶ月後に電話連絡にて調査を行った。統計解析として回帰式 $P=1/(1+\exp(-11.3-0.11*\text{age}-0.24*\text{NIHSS}))$ に測定値を投入し、予測確率を計算し観測確率との関係を確認することCPMの較正と識別を評価した。Australian modelの識別能は良好であったものの較正能が低く、本邦において十分な妥当性を示さなかった。共同研究のため抽出不可能 宮田一弘、武田廉、岩村佳世、高橋瑞刀、秋山祐樹、 <b>林翔太</b> 、五十嵐達也、臼田滋
自施設の急性期脳卒中患者を対象とした転帰先を予測するモデルの時間的検証	-	2024年10月	第31回群馬県理学療法士学会（群馬）	本研究では、昨年開発したCPMの臨床での有用性を検討した。上記対象者に対して入院1週間以内に測定したNIHSSとFIMの運動項目合計点(m-FIM)、実際の転帰先を収集した。CPMの回帰式である $p=1/(1+\exp(-\text{NIHSS} \times 0.135 + \text{FIM} - m \times -0.040 + 0.791))$ に測定値を投入し、予測確率を計算した昨年開発した転帰先を予測するCPMは、予測精度は良好で臨床使用可能であると考えられる。共同研究のため抽出困難 柿間 洋信、谷 友太、遠藤 樹、 <b>林翔太</b> 、五十嵐 達也
視覚刺激がバランス機能に及ぼす影響-脳卒中患者と健康高齢者の比較-	-	2024年10月	第31回群馬県理学療法士学会（群馬）	本研究は脳卒中患者と高齢者が視覚刺激に対してバランス制御に影響を受けやすいかを検証することを目的とした。視覚依存はStatic subjective visual vertical (sSVV, °)と動的SVV(dSVV, °)の差によって測定した(dSVV-sSVV, °)。バランス機能は重心動揺計(アニマ株式会社、MG-100)によって測定した総軌跡長、振幅、平均速度とした。重心動揺測定は測定条件は視覚刺激/開眼で実施し、ロンベルグ比を算出した。左右平均速度のロンベルグ比は右回転/開眼(1.7±0.8cm/秒 vs 1.3±0.4cm/秒, p=.020)および左回転/開眼(1.2±0.2cm/秒 vs 1.1±0.2cm/秒, p=.003)で脳卒中患者が高値であった。共同研究のため抽出困難 <b>林翔太</b> 、加茂智彦、高橋直哉、柿間洋信、周東達彦、本間竹千代、西須一紗、木村朗

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
急性期脳卒中患者における退院時の階段昇降動作能力を予測するClinical Prediction Modelの開発と検証	-	2025年1月	第32回埼玉県理学療法士学会（埼玉）	本研究の目的は、急性期脳卒中患者を対象に退院時の階段昇降動作を予測するCPMを開発することである。退院時のFIMの階段項目で $\geq 6$ 点を自立と定義した。退院時のFIM階段項目を従属変数、入院初期の年齢、MMSE、FMA-LE、FACを独立変数とし、ロジスティック回帰分析を行った。対象の年齢は $74.6 \pm 11.9$ 歳、MMSEは $23.7 \pm 5.5$ 点、FMA-LEは $23.7 \pm 9.9$ 点、FACは $1.5 \pm 1.6$ 点であった。CPMは $P = 1 / \{1 + \text{Exp}(0.049 \text{年齢} - 0.095 \text{MMSE} - 0.077 \text{FMA-LE} - 0.284 \text{FAC} + 2.104)\}$ であった。AUC (95%CI) は $0.81 (0.75-0.87)$ であり、予測精度は良好であった。 共同研究のため抽出困難 五十嵐達也、柿間 洋信、谷 友太、西須 一紗、平野 晋吾、 <b>林 翔太</b>

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 作業療法 氏名 村田和香

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. Predictive Value of Social-cognitive Function in Physical Restraint use in Older Patients: A Retrospective Study (高齢者の身体拘束における社会認知機能の予測価値：回顧的研究) (査読付)	共著	2024年5月	The Kitakanto medical journal	高齢入院患者に対する身体拘束の実施に関連する要因として、社会的認知機能の予測的価値を検討した後方視的研究である。電子カルテ情報を用いて、身体拘束の有無と社会的認知機能の関係を分析した結果、低下した社会的認知機能が身体拘束使用と有意に関連することが示された。本研究の結果は、身体拘束予防における早期スクリーニングの重要性を示唆している。 Ken Kondo, Siyeong Kim, Naoto Noguchi, Ryoto Akiyama, Haruka toeda, akihito Yanai, Kazura Kobayashi, <u>Waka Murata</u> , Bumsuk Lee
2. Learning program enhances rehabilitation professionals' perceived ease of using 3d printing: a pilot randomized controlled trial (学習プログラムは、リハビリテーション専門家の3Dプリントの使いやすさを向上させる：パイロットランダム化比較試験) (査読付)	共著	2024年11月8日	Disability and rehabilitation. Assistive technology (IF:2.4)	本研究は、リハビリテーション専門職を対象に、3Dプリンティングの活用に対する認知的受容性に焦点を当て、学習プログラムの効果を検証したパイロットランダム化比較試験である。介入群はプログラム受講後、使用の容易さに対する認識が有意に向上し、3Dプリンタ活用への心理的ハードルが低下した。これにより、教育的介入が専門職の技術受容を促進する有効な手段である可能性が示唆された。 Ken Kondo, Siyeong Kim, Naoto Noguchi, Ryoto Akiyama, <u>Waka Murata</u> , Bumsuk Lee
3. ベッド - 車椅子間移乗介助における誘導技術の定量的指標の検討	共著	2025年3月	日本作業療法研究会雑誌	本研究では、ベッド - 車椅子間の移乗介助における誘導技術に着目し、その技術を定量的に評価する指標の構築を目的とした。熟練介助者と初学者の動作を比較し、身体の動きや接触部位、タイミングなどの特徴を分析することで、誘導技術の違いを数値化した。これにより、介助技術の可視化や教育への応用が期待されるとともに、質の高い介護実践の普及に寄与する可能性が示唆された。 近藤 健, 黒崎 紘史, 小田垣 雅人, 野口 直人, 秋山稜登, 十枝はるか, <u>村田和香</u>

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 看護師と作業療法士の協働実践が医療機関に勤務する看護職員のバーンアウトに及ぼす影響	-	2024年9月	第18回日本作業療法研究会学会学術大会	医療機関勤務の看護職員に対する看護師と作業療法士の協働実践がバーンアウトに与える影響を検討した。専門職間の協働の促進により職員のストレス軽減や職務満足度向上が認められ、バーンアウト予防に寄与する可能性が示された。(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 近藤健, 田嶋尚美, 松谷信枝, 李範爽, <u>村田和香</u>

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. Development of a Model of Nurse-Occupational Therapist Collaborative Model of Nurse-Occupational Therapist Collaborative Practice (MONOTCP) on activities  (看護師・作業療法士協働実践モデル (MONOTCP) の開発)	-	2024年11月	The 8th Asia Pacific Occupational therapy congress	入院高齢者の活動を促進することを目的に、看護師と作業療法士の協働実践モデル (MONOTCP) を開発した。文献検討と専門家の意見を基にモデルを構築し、活動の捉え方、役割分担、情報共有、協働の実践過程などを含む枠組みを示した。今後の臨床応用に向けた有効性検証が期待される。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) Ken kondo, Sunnya Honda, Naomi Tajima, <u>Waka Murata</u> , Lee bumsuk

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属      作業療法      氏名      石井良和

---

### 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

### 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

### その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 リハビリテーション学部  
作業療法学科

氏名

竹原 敦

## 著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
1 最新作業療法学講座 日常生活活動（ADL）	共著	2025年2月	医歯薬出版，東京	作業療法における日常生活活動に関する関連理論として人間作業モデルについて概説した。特に，いくつかの評価法，作業適応，作業同一性，作業有能性について説明した。 小川真寛，白井はる奈・編 担当：竹原敦：第4章 3. ADL評価・介入理論の紹介 人間作業モデル（MOHO） pp. 210～213

## 学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
1 高齢者や認知症の人がより良い人生を継続するために—作業療法士は何ができるのか?—	単著	2024年5月	秋田作業療法学研究27：9-12、2024.	高齢化率が高い秋田県の人口統計を概観し，高齢者が活用できる資源と環境について論じた。具体的に，高齢者が活躍する場や雇用の可能性について考察した。また，認知症の人の能力の可能性，役割獲得の整え方，スティグマに対する注意などについて考察し，地域共生社会における認知症の人と家族の適応について論じた。 竹原敦

## その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
1 対象者の役割に焦点を当てた作業療法実践に関するスコوپングレビュー	—	2024年6月15日 ～16日	第33回日本作業行動学会，岐阜	役割に対する作業療法実践の研究動向を概観し，今後の課題を明らかにするためにスコوپングレビューを実施した。結果として，3524件の論文が得られ，適格性が確認された論文は101件（事例報告67件，実験研究と調査研究34件）であった。1988年から役割支援に関する報告が散見されるようになり，MOHOやMTDLPの影響が考えられた。役割の評価は面接や観察等の非構成的評価が最も多く使用されたが，アウトカム指標として役割評価の活用も不十分であることが明らかとなり，今後の検討が必要であることが示唆された。 （共同研究につき，担当部分抽出不可能）佐々木剛，二村元気，竹原敦，山田孝
2 介護に活かす生活期リハビリテーション	—	2024年9月4日	盛岡北部圏域 介護保険施設職員対象 介護予防研修会「介護に活かす生活期リハビリテーション」（岩手県）	岩手県の実情に合う高齢者介護の視点を5つ論じた。特に，作業療法の視点から当事者の生活とQOLおよび岩手県の風土への適応等について考察した。 竹原敦
3 認定作業療法士取得研修選択 老年期 老年期障害の作業療法②高齢者に対する作業療法	—	2024年9月7日 ～8日	日本作業療法士協会	認定作業療法取得条件のための研修を行った。老年期の作業療法実践の評価，介入，成果の示し方，事例検討などを実施した。 竹原敦

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 Effectiveness of Occupational Therapy for Hospice Clients - Weaving Hope through Storytelling (ホスピスのクライアントに対する作業療法の効果～語りにより希望を紡ぐ～)	—	2024年11月6日～9日	8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress 2024 (APOTC 2024)	本研究の目的は、ホスピスのクライアントに対する作業療法の効果を自己効力感の観点から報告することであった。A氏は、40歳代前半の女性。X年に左乳癌発症し、X+5年に転移性脳腫瘍と診断された。腫瘍摘出術後、左片麻痺となり、その後ホスピスへ転院した。BRSは上肢Ⅱ、下肢Ⅳ、FIM67点。COPMの重要度はトイレ10点と車椅子移動8点で、その遂行度と満足度は全て1点。がん患者の病気に対する効力感尺度（以下SEAC）における病気に対する自己効力感（以下SE）は34.5であった。トイレと車椅子移動のため、それぞれの目標とそのスモールステップを設定し、達成感が得られやすいように介入した。また語りを通し作業の意味づけやその価値を実感できるようにした。ホスピスのクライアントと作業の意味づけを共有する作業療法は、自己効力感を高め、人生の目標を決定することに寄与した。 (共同研究につき、担当部分抽出不可能) Ayumi Kunitake, Ono Hironori, <u>Shun Takehara</u>
5 がんの終末期にあるクライアントが自分らしく生き抜くことを実現した作業療法—ケアの意味を見つめる事例研究による分析—	—	2024年11月9日～10日	第58回日本作業療法学会、札幌	本研究は終末期がん患者に対する作業療法実践において、患者が最期まで自己の存在価値を高めながら生きることを全うできた一事例について、その意味を明らかにすることを目的に検討した。対象は肺がんを呈する80歳代後半女性A氏であった。ケアの意味を見つめる事例研究により分析した結果、この実践の意味は4つの大見出しと9つの小見出しで構造化された。A氏にとって大切な折り紙を通して対話を繰り返し、多様な想いを汲み共感しつつ、レジリエンスを引き出し、その作業を最期まで途切れさせないように支援したことにより、A氏は死という恐怖、自らの人生の苦悩に向き合いながらも今を生きる喜びとして自己の存在価値を高めていくことに繋がった。作業療法は、最期の時まで作業を通してその人らしく生き抜くことを支援できると示唆された。 (共同研究につき、担当部分抽出不可能) 國武亜由美, 松尾圭介, 永松美穂子, <u>竹原敦</u> , 雨宮有子
6 森田療法を背景としたリワークの実践により自分らしい働き方に繋がった一事例	—	2024年11月9日～10日	第58回日本作業療法学会、札幌	森田療法を背景とした心理教育を軸に、作業療法に基づくプログラムやスタッフとの個別面談、利用者同士の交流を通して、復職・再就職とその先の自分らしい生き方の実現を目指し、2度のリワーク通所を通して自分自身の傾向と折り合いをつけ、自分らしい働き方に繋がった事例について報告した。本事例は「あるがまま」に、できることを検討し実践した結果、意欲が賦活され、自分により合った働き方の体現と仕事の役割を中心に習慣化された生活に結びついた。森田療法では、自然な感情である「不安」はそのままに、その裏にある生の欲望を発揮すべく、建設的な行動を促す。そのためには、外的な事実には手を着け、その瞬間を味わい尽くすことが重要であるとされるが、この姿勢は作業療法との親和性も高く、効果を高める一助となり得る。 (共同研究につき、担当部分抽出不可能) 尾形茜, <u>竹原敦</u>
7 読み聞かせ～読む、覚える、話す、交流～	—	2024年11月13日	神奈川県宮前図書館市民講座	読み聞かせの効果について6つの視点を論じた。特に、視覚と聴覚、役割、多様な活動、脳機能の吟味の重要性について解説した。 <u>竹原敦</u>
8 認知症共生社会のための認知症の人と家族のみかた	—	2025年2月8日	群馬県作業療法士会 第2回認知症ケア資質向上のための研修：共生社会におけるの第一歩	未曾有の認知症の人の増加に伴い、ご本人・ご家族はどのような悩みを抱え、どう生きるのだろうか。作業療法士はどのような貢献ができるのだろうか。共生社会のための第一歩としての作業療法のとらえ方として、役割獲得モデル、動機づけ、予防とスティグマに焦点を当てて論じた。 <u>竹原敦</u>

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 作業療法学科 氏名

馬場順子

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
統合失調症と聴覚障害を重複する人への地域生活支援：クライアント中心の作業療法の実践 (筆頭論文, 査読付き)	共著	令和6年 8月	作業療法43 (4), 540-547, 2024.	聴覚・精神の重複障害を抱える人は意思疎通の問題から適切な支援を受けられず、地域生活に生きづらさを抱えることがある。今回精神科病院への入退院を繰り返し、家族や支援関係者から生活能力が乏しいとみられていた統合失調症と聴覚障害を抱えるクライアントに対し、筆者が地域生活支援員として作業療法の視点でクライアントを理解し支援を行った。結果、クライアントが本来持つ生活能力が引き出され、多機関におけるチーム支援が構築されクライアントの希望する生活につなげることが出来た。作業療法士が地域生活支援において関わることの有効性を示唆した論文。  担当部分：研究計画，データ収集，分析，論文執筆 共著者：馬場順子，岡田直純，谷村厚子
精神科デイケアで一人暮らしを目指す不注意の特性をもつ自閉スペクトラム症の方に対する作業療法介入プロセスモデル (OPIPM)を用いた介入 (査読付き)	共著	令和7年 2月	神奈川作業療法研究 14(1) 27-34, 2025.	精神科デイケアに通所し、1人暮らしをしながら復学を希望する不注意の特性をもつ自閉スペクトラム症のクライアントに対し、OTIPM（作業療法介入プロセス）に基づいた介入を実施した事例。OTIPMでの介入によって主担当職員（看護師）の支援内容の変化も確認された。作業療法士が対象者の活動と参加の促進に向けた作業遂行に焦点を当てて評価や介入を行うことは、クライアントと意味のある作業を協業することに寄与するだけでなく、協働した多職種連携に寄与できることを示唆した論文。  担当部分：共同研究のため担当部分の抽出不可 共著者：村岡和也，馬場順子

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
職場定着支援従事者の精神障害がある利用者に対する支援とその根拠に関する分析 (査読付き)	—	令和6年 8月	第51回日本職業リハビリテーション学会 (於：松江テルサ)	精神障害者の早期離職の問題を受けて、近年就労定着支援事業が開始されているが、支援実態は明らかになっていない。本研究は職場定着支援従事者を対象に、精神障害者への職場定着支援のプロセスとその支援を決定する根拠を質的研究を用いて明らかにすることを目的とした。結果、支援従事者は勤労者役割を支えるプロセス、支援者の心がけ、支援を決める拠りどころをコアカテゴリとし、支援のプロセスと判断を決定していたことが明らかになった。  担当部分：共同研究につき担当部分の抽出不可 共同発表者：浅黄真紀子，谷村厚子，馬場順子
精神障害者の就労支援従事者に対するアンケート調査～パイロットスタディ～ (査読付き)	—	令和6年 8月	第51回日本職業リハビリテーション学会 (於：松江テルサ)	近年、精神障害者の新規就職者数は急増している。一方で精神障害者の早期離職が問題になっているなか、就労支援従事者はどのような専門性と視点を持ち支援をしているのかは明らかになっていない。本研究では精神障害者に対する支援従事者の専門性における現状把握を目的とした。結果、就労支援従事者に共通した理論はなく、それぞれの資格専門職における理論を用いた支援が行われていた。しかし作業療法士は共通してPEO理論が用いられていた。本研究の結果から本研究に移行予定である。  担当部分：データ収集，序論，方法，結果，考察の全て 共同発表者：馬場順子，谷村厚子，浅黄真紀子
Qualitative analysis of the concerns of company personnel who employ people with mental and developmental disabilities (精神障害と発達障害者を雇用する企業担当者の困難さに関する質的研究) (査読付き)	—	令和6年 11月	The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress 2024 (in Sapporo)	精神障害者、発達障害者の雇用をする企業側はどのような点で雇用に困難さを感じているかについて、37社35名の企業担当者から聞き取り調査を実施し、Berelsonの内容分析を用いて質的に検討した。結果、企業担当者は雇用前には社内のコンセンサスの不一致などの困難さを感じており、雇用後は、特に発達障害者の行動特性に対する対処に困難さを感じていた。また彼らの障害特性だけでなくどのような作業環境を作り出すかにも困難さを抱えていた。就労支援における企業支援においては、作業療法士の得意とする障害特性と環境調整とを同時に遂行できる支援が必要であることを示唆した。  担当部分：データ収集，序論，方法，結果，考察の全て 共同発表者：馬場順子，田中啓介，尾上暁子，宮寺寛子，谷村厚子

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Qualitative Evaluation of a Disaster Rehabilitation and Education Program for Occupational Therapy Students (作業療法学生のための災害リハビリテーション教育プログラムに関する質的評価) (査読付き)	—	令和6年11月	The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress 2024 (in Sapporo)	
Impact of peer support staff consultation on the recovery of clients with mental health problems in employment support services: a mixed method study (精神障害者の就労移行支援においてピアサポーターと相談することに対する影響：混合研究) (査読付き)	—	令和6年11月	The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress 2024 (in Sapporo)	精神障害者を対象とした就労移行支援事業所において、同じ精神障害を持つピアサポーターによる支援が対象者の就労にどのような影響を及ぼすのかについて混合研究方法を用いて質的、量的に調査した研究。結果、ピアサポーターの支援を受けた対象者はピアサポーターの支援を受けなかった対象者よりも、就労に向けたリカバリーが促進していた。  担当部分：共同研究のため担当部分の抽出不可。 共同発表者：浅黄真紀子，矢吹友子，土屋英美子，川口敬之，田原智明，馬場順子

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 作業療法学科 氏名 吉岡和哉

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
・ Consultations listed by preschool teachers in the Occupational Therapist's Professional Travel Support Program. (作業療法士の専門職巡回支援事業で保育園の先生から挙げられる相談内容) (査読付)	—	2024年11月	The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress. 2024 (Sapporo, Japan)	群馬県A市の専門職巡回支援事業において、作業療法士が保育園で児童を観察し、教諭に対して児童の理解や関わり方について助言を行った。本研究は、教諭からの相談依頼文を分析し、作業療法士に求められていることと地域における役割を検討した。結果、運動面、学習場面、集団行動、園児対応方法の4つの課題が明らかになり、作業療法士の役割として日常生活の課題に対応する支援が求められていることが示唆された。 演者：Kazuya Yoshioka
Utilization of Occupational Therapist's Expertise in a Cram School - From a Survey of Parents of Children with Developmental Disabilities (ASD/ADHD/LD)- (学習塾における作業療法士の専門性の活用 -発達障がい児 (ASD/ADHD/LD) の保護者調査から-) (査読付)	—	2024年11月	The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress. 2024 (Sapporo, Japan)	筆頭演者が所属する塾は作業療法士が運営している。塾では教科学習支援に関する調査で、小学生の保護者が抱える学習の困りごとを明らかにした。調査結果は、普通級の児童でもケアレスミスや長文読解が苦手な点が多く、作業療法士による学習サポートの必要性が示された。また、保護者が診断名を把握していない中で服薬が行われるなど、家族の理解にギャップがあることが考えられた。 共同演者：Ayu Nakajima, Hiromi Kitazume, Rina Kubota, Kazuya Yoshioka
Educational practice to train school-based occupational therapists by the Japanese Association of Occupational Therapists (日本作業療法士協会における学校作業療法士養成の教育的取り組み) (査読付)	—	2024年11月	The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress. 2024 (Sapporo, Japan)	日本作業療法士協会は、特別支援教育に寄与できる作業療法士の育成を目指し、研修プログラム「学校を理解して支援ができる作業療法士の育成研修会」を実施した。2014年から2022年にかけて、全国で延べ876名が受講し、学校との連携が広がった。今後も地域に合わせた学校教育現場との協働を進めていく。 共同演者：Masanori Yoshida, Mayumi Arikawa, Kazuya Yoshioka, Sei Sennari, Hidetaka Honma, Hiroyasu Shiozu, Yusuke Nakayama, Chifuyu Endo, Yasutoshi Sakai
群馬県における母子保健領域への作業療法士の連携および活用について一各市町村へのアンケート調査から一 (査読付)	—	2024年11月	第58回日本作業療法学会 (北海道)	群馬県における作業療法士 (OT) の母子保健事業への関与状況を調査した結果、約30%の市町村がOTを雇用し、その多くが非常勤での雇用であった。業務内容は健診後のフォローや個別相談、他機関へのコンサルテーションなどが中心であったが、一部市町村ではOTの役割や必要性が認識されていないことが明らかになった。これに対し、OTの啓発や広報活動、人材育成が今後の課題として示唆された。 共同演者：六本木温子, 小澤 恵, 河合健人, 十枝はるか, 吉岡和哉

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 作業療法学科

氏名

近藤健

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
該当なし				

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
消化器がん術後患者における退院時の精神的苦痛に関する予測因子の検討（査読付）	共著	2024年4月	作業療法ジャーナル 58(4) 352-357	本研究は、消化器がん術後患者における退院時の精神的苦痛に影響を与える予測因子を明らかにすることを目的とした。術前の不安や抑うつ、サポート体制の有無などが関連しており、これらの要因を把握することで、精神的支援の必要性を早期に評価し、個別的な介入につなげる可能性が示唆された。 堀越 晃子, 近藤 健, 深澤 旭, 阿部 真也, 中村 純
Predictive Value of Social-cognitive Function in Physical Restraint use in Older Patients: A Retrospective Study (高齢者の身体拘束における社会認知機能の予測価値: 回顧的研究) (査読付)	共著	2024年5月	The Kitakanto Medical Journal 74(2)141-146	本研究は、高齢入院患者に対する身体拘束の実施に関連する要因として、社会的認知機能の予測的価値を検討した後方視的研究である。電子カルテ情報を用いて、身体拘束の有無と社会的認知機能の関係を分析した結果、低下した社会的認知機能が身体拘束使用と有意に関連することが示された。本研究の結果は、身体拘束予防における早期スクリーニングの重要性を示唆している。 Ken Kondo, Siyeong Kim, Naoto Noguchi, Ryoto Akiyama, Haruka toeda, akihito Yanai, Kazura Kobayashi, Waka Murata, Bumsuk Lee
Learning program enhances rehabilitation professionals' perceived ease of using 3d printing: a pilot randomized controlled trial (学習プログラムは、リハビリテーション専門家の3Dプリントの使いやすさを向上させる:パイロットランダム化比較試験) (査読付)	共著	2024年11月8日	Disability and rehabilitation. Assistive technology 20 (4) 992-1000 (IF:2.4)	本研究は、リハビリテーション専門職を対象に、3Dプリンティングの活用に対する認知的受容性に焦点を当て、学習プログラムの効果を検証したパイロットランダム化比較試験である。介入群はプログラム受講後、使用の容易さに対する認識が有意に向上し、3Dプリンタ活用への心理的ハードルが低下した。これにより、教育的介入が専門職の技術受容を促進する有効な手段である可能性が示唆された。 Ken Kondo, Siyeong Kim, Naoto Noguchi, Ryoto Akiyama, Waka Murata, Bumsuk Lee

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
ベッド-車椅子間移乗介助における誘導技術の定量的指標の検討	共著	2025年3月	日本作業療法研究学会雑誌 27(1) 7-13	本研究では、ベッド-車椅子間の移乗介助における誘導技術に着目し、その技術を定量的に評価する指標の構築を目的とした。熟練介助者と初学者の動作を比較し、身体の動きや接触部位、タイミングなどの特徴を分析することで、誘導技術の違いを数値化した。これにより、介助技術の可視化や教育への応用が期待されるとともに、質の高い介護実践の普及に寄与する可能性が示唆された。 近藤 健, 黒崎 紘史, 小田垣 雅人, 野口 直人, 秋山稜登, 十枝はるか, 村田和香

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
看護師と作業療法士の情報共有が身体拘束解除につながった高齢入院患者の一例	-	2024年9月	ぐんま作業療法研究 27 (学会発表)	本報告は、看護師と作業療法士の情報共有が身体拘束解除に寄与した高齢入院患者の一例を示す。両職種間の連携強化により患者の状態把握が深まり、適切なケア計画が立案され、拘束の早期解除が可能となったことが示唆された。 大貫翔平, 本多俊弥, 近藤健, 赤池優, 加藤積良, 松谷信枝, 田嶋尚美
看護師と作業療法士の協働実践が医療機関に勤務する看護職員のバーンアウトに及ぼす影響	-	2024年9月	第18回日本作業療法研究学会学術大会 (学会発表)	本研究は、医療機関勤務の看護職員に対する看護師と作業療法士の協働実践がバーンアウトに与える影響を検討した。協働の促進により職員のストレス軽減や職務満足度向上が認められ、バーンアウト予防に寄与する可能性が示された。 近藤健, 田嶋尚美, 松谷信枝, 李範爽, 村田和香
Development of a Model of Nurse-Occupational Therapist Collaborative Model of Nurse-Occupational Therapist Collaborative Practice(MONOTCP) on activities (看護師・作業療法士協働実践モデル(MONOTCP)の開発)	-	2024年11月	The 8th Asia pacific Occupational therapy congress (学会発表)	本研究は、入院高齢者の活動を促進することを目的に、看護師と作業療法士の協働実践モデル(MONOTCP)を開発した。文献検討と専門家の意見を基にモデルを構築し、活動の捉え方、役割分担、情報共有、協働の実践過程などを含む枠組みを示した。今後の臨床応用に向けた有効性検証が期待される。 Ken kondo, Sunnya Honda, Naomi Tajima, Waka Murata, Lee bumsuk
The usefulness of multi-interventions for resuming cooking after home discharge: a case report (自宅退院後の調理再開に向けた多面的介入の有用性: 症例報告)	-	2024年11月	The 8th Asia pacific Occupational therapy congress (学会発表)	本報告は、退院後調理再開に向けた多面的介入の有用性を検討した一症例である。身体機能訓練、認知面への働きかけ、環境調整を組み合わせた支援により、対象者は安全かつ自立的に調理を再開できた。多面的介入は在宅生活の質向上に寄与することが示唆された。 Chihaya Machida, Ken Kondo, Hideo Sakane, Maho Tanikawa, Hirokuni Fujii, Keisuke Sekine
A program of resuming riding on a bicycle after cerebrovascular disease: a case report (脳血管疾患後の自転車走行再開プログラム: 症例報告)	-	2024年11月	The 8th Asia pacific Occupational therapy congress (学会発表)	本報告は、脳血管疾患後の自転車再乗車に向けた支援プログラムの実践を通じて、身体機能・認知機能・安全意識に配慮した段階的介入の有効性を検討した。一症例を通じて、本人の希望に寄り添った目標設定と多面的評価が再乗車支援に重要であることが示唆された。 Motoko Tsunemi, Ken Kondo, Misa Nakano

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Predictive factors associated with delirium among perioperative gastrointestinal cancer patients: A retrospective study (消化器癌患者における周術期せん妄に関連する予測因子: 後ろ向き研究)	-	2024年11月	The 8th Asia pacific Occupational therapy congress(学会発表)	本研究は、消化器がん周術期患者におけるせん妄の予測因子を後ろ視的に検討した。年齢、認知機能、術前ADL低下などが有意な関連因子として抽出された。これらの因子は、早期介入やせん妄予防策の立案に有用である可能性が示唆された。 Hirokuni Fujii, <u>Ken Kondo</u> , Shimoda Aoi, Aya Fukazawa, Masataka sakimoto, Keisuke Sekine
The relationship between improvement in functional ability and a decrease in physical restraint use in a Model of Nurse-Occupational Therapist Collaborative Practice in hospital settings: a case report (病院における看護師・作業療法士協働実践モデルにおける機能能力の改善と身体拘束使用の減少の関係: 症例報告)	-	2024年11月	The 8th Asia pacific Occupational therapy congress(学会発表)	本報告は、病院における看護師-作業療法士協働モデルの実践を通じて、身体拘束の使用が減少し、機能的能力が改善した一症例を検討した。多職種連携による日常生活活動の支援が、拘束削減と自立支援の双方に有効である可能性が示唆された。 Syunya Honda, <u>Ken Kondo</u> , Kota Itagaki, Yu Akaike, Naomi Tajima
訪問リハビリテーションにおける目標達成のための作業療法士の役割: ケーススタディ	-	2024年11月	第58回日本作業療法学会(学会発表)	本研究は、訪問リハビリテーションにおいて利用者の目標達成を支援する作業療法士の役割を、ケーススタディを通して明らかにした。作業療法士は、生活環境や家族との関係を踏まえた調整や支援を行い、利用者主体の目標達成に貢献していた。 笹谷 朋弘, <u>近藤 健</u> , 神部 千亜紀
The relationship between improvement in functional ability and a decrease in physical restraint use in a Model of Nurse-Occupational Therapist Collaborative Practice in hospital settings: a case report (病院における看護師・作業療法士協働実践モデルにおける機能能力の改善と身体拘束使用の減少の関係: 症例報告)	-	2024年11月	The 8th Asia pacific Occupational therapy congress(学会発表)	本研究は、入院高齢者のADL改善を目的とした看護師-作業療法士協働モデル(MONOTCP)を開発した。協働の要素を抽出・統合し、実践に即した協働モデルを構築した。MONOTCPは多職種連携の質を高め、ADL支援の効果向上に寄与する可能性が示された。 Kota Inagaki, Syunya Haneda, <u>Ken Kondo</u> , Yu Akaike, Naomi Tajima
脳卒中後の運転再開に影響を与えるTrail Making Test遂行プロセスの分析	-	2024年12月	第8回日本安全運転医療学会学術集会(学会発表)	本研究は、脳卒中後の運転再開に影響を与える要因として、Trail Making Test(TMT)の遂行プロセスに着目し、その分析を行った。TMT遂行中の視線移動や手の動きなどの行動指標を評価し、運転再開との関連を検討した結果、遂行プロセスの質的特徴が運転再開の可否に関与する可能性が示唆された。 秋山稜登, 野口直人, <u>近藤健</u> , 栗原純一, 堀口布美子, 伊部洋子, 李範爽

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 作業療法学科 氏名 石代 敏拓

### 著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

### 学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

### その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
高次脳機能障害の当事者と家族の公正を実現するためのニーズ	-	2024年6月	第33回日本作業行動学会 学術集会（岐阜県）	高次脳機能障害の当事者・家族・支援者の会員が経験している不公正を分析し、高次脳機能障害に関わる人々のニーズを検討した。結果、彼らが経験している不公正の多くは社会的環境に影響を受けており、支援や制度が当事者のライフステージの変化に対応しきれていないという問題などが明らかになった。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (共同発表者：石代敏拓, 下田文枝, 岡村康子, 高橋洋輔, 山口智晴, 小林法一)
高次脳機能障害の当事者と家族の思いを表現するフォトボイスの有用性-パイロットスタディー	-	2024年11月	第26回群馬県作業療法学会（群馬県）	高次脳機能障害の当事者と家族の思いを表現する方法としてフォトボイスを活用し、この手法の有用性を検討した。研究開始時には、フォトボイスに懐疑的なメンバーもいたが、徐々に思いを開示するためらいが緩和され、メンバーの秘めた思いを表現する効果的な手法だと考えられた。 (共同発表者：石代敏拓, 下田文枝, 岡村康子, 高橋洋輔, 山口智晴, 小林法一)
The impact of creating assistive devices using a 3D printer through collaboration between an occupational therapist and a designer on the client's occupational performance: "Yaritai. Dekita. Lab (I want to do it. I could do it. Lab)" project (作業療法士とデザイナーによる3Dプリンターの自助具の作成がクライアントの作業遂行に及ぼす影響について: "やりたい、できた。ラボ" プロジェクト)	-	2024年11月	The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress 2024 (北海道)	作業療法士とデザイナーが協働して作成した自助具が、発達障害をもつ子どもの生活にどのような影響を与えたかを検討した。2名の子どもに対する支援を分析したところ、子どもの満足度や作業遂行を促進し、作業への結びつきを強めることに繋がっていた。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) (共同発表者：Hiroki Tanaka, Yusuke Sumimoto, <u>Toshihiro Ishidai</u> , Suzuko Domoto)

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Process of Creating 3D-Printed Assistive Devices by Occupational Therapist and Designer: Contribution of an Occupational Perspective to the Creation of Useful and Good-Designed Assistive Devices (作業療法士とデザイナーによる3Dプリンターを活用した自助具づくりのプロセス—便利でデザインの良い道具づくりへの作業的視点の貢献—)	-	2024年11月	The 8th Asia Pacific Occupational Therapy Congress 2024 (北海道)	3Dプリンターを使用した自助具づくりを協働した作業療法士とデザイナーへのインタビューをおこない、彼らの専門性がどのように作用しているかを検討した。結果、作業療法士とデザイナーは、問題解決に貢献するという共通の基盤を持っていたが、作業療法士は人の作業ニーズを理論的に捉えることに貢献し、デザイナーは既製品の自助具にはない発想で作業療法士が捉えたニーズを助ける道具を形にした。 (共同発表者：Toshihiro Ishidai, Hiroki Tanaka, Yusuke Sumimoto, Suzuko Domoto, Norikazu Kobayashi)

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 言語聴覚学科 氏名

白坂 康俊

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
障がい者の地域参加支援のために学生が街づくり事業を実施する「地域参加支援演習」の実践報告	—	8月30日	リハビリテーション学校協会・教育大会	本学科の特徴的授業である「地域参加支援演習」について、実践内容、参加者数、協力団体、メディアの関心などを通じて成果を報告した。

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 言語聴覚学科 氏名 \_\_\_\_\_

齊藤吉人

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 言語聴覚学科 氏名 浅見知市郎

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 新型コロナウイルスワクチン接種における免疫への影響について（査読付き）	共著	2024年4月	日本未病学会雑誌 30(1) 27-30	3回目の新型コロナウイルスワクチンの接種が、令和3年12月より開始された。それに伴い3回目のワクチンを接種した14名（性別：男性6名，女性8名，年齢：平均値48.4歳 ± 3.8）を対象にワクチン接種前後のCD4/CD8比，キラーT細胞比率，NK細胞比率並びに中和抗体価の測定と副反応調査を行った結果、高熱の副反応の発熱のあった群は発熱がなかった群に比して有意に高い抗体価を示すことが明らかとなった。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 藤本友香，梁明秀，宮川敬，浅見知市郎，林由里子，白井達也，佐田充，長田誠，亀子光明，木村博一
2. Do health sciences-related university students know the state of their dental health? (医療系大学生は自分の口腔内状態を把握しているか?) (査読付き)	共著	2025年3月	日本未病学会雑誌 30(3) 16-20	群馬県の医療系大学であるA大学在学中の1年生から4年生（18～23歳）の学生130名を対象に、自身の歯科疾患の有無の認識に関するアンケートを行った後、学校健診と同様の口腔診査を行った結果、自身の口腔内状況を正しく認識できていない者が全体の1/4以上であった。これは自分の口腔の状態を正確に把握することは難しく、高校卒業後の口腔診査の必要性を示唆するものである。 (実験の遂行，全体の考察，執筆を担当) (筆頭論文) Tomoichiro Asami, Yuka Fujimoto, David Andrews

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 高齢者におけるリンパ球サブセットの基準範囲設定の意義	-	2024/5/11	第73回日本医学検査学会	本研究では、65歳未満の群59名、65歳以上の群53名、合計112名を対象にリンパ球サブセット（CD4陽性細胞比率、CD8陽性細胞比率、CD4/CD8比、Th1細胞比率、Th2細胞比率、Th1/Th2比並びに制御性T細胞比率）を測定し、各群の比較と、基準範囲を求めた。その結果、65歳未満の群と65歳以上の群ではCD8陽性細胞比率、Th1細胞比率並びに制御性T細胞比率で有意差があったため、65歳以上独自の基準範囲を設ける必要があるという結論となった。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 藤本友香，浅見知市郎，古田島伸雄，林由里子，三村邦裕，村上正巳

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 言語聴覚学科 氏名 岡野 由実

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
1. 『最新 言語聴覚学講座 聴覚障害学』	共著	2025年2月	医歯薬出版	言語聴覚士を目指す学生を対象とした初學者向けの著で、聴覚障害領域の知識を網羅した教科書。 編著：中川尚志、廣田栄子 分担執筆：館野 誠、中市健志、福井恵子、石川浩太郎、堀井 新、佐野 肇、前山啓充、北 義子、樫尾明憲、尾形エリカ、赤松裕介、今川記恵、富澤晃文、原 由紀、白根美帆、野原 信、 <b>岡野由実</b> 、大金さや香、大原重洋、佐藤紀代子、三瀬和代、前田晃秀、柴崎美穂、中津真美 担当：第10章6「家族支援」(p214-216)

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 『当事者団体に登録する一側性難聴者を対象とした聞こえの障害状況に関する調査』(査読付)	共著	2024年4月	Audiology Japan, 67巻 p128-135 (日本聴覚医学会)	一側性難聴の当事者団体に登録する一側性難聴成人を対象としてWeb調査を実施した。主観的評価には The Speech, Spatial and Qualities of Hearing Scale (SSQ) を用い、425名より回答が得られた。難聴側の残存聴力により空間認識が比較的保たれる一方で、音の明瞭さや音の質ではかえって不自然な音印象が生じることが推測された。青年期以降の後天性発症ではより困難さを自覚するが、空間認識については発症時期に関わらず共通して困難が生じることを示唆した。 (研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) (筆頭論文) 共著者：岡野由実、久保田江里、高橋優宏、古館佐起子、岩崎 聡
2. 『新生児聴覚スクリーニングから診断・療育経緯における軽中等度難聴児保護者の心理の検討』(査読付)	共著	2024年8月	Audiology Japan 67巻 p185-294 (日本聴覚医学会)	就学前の軽中等度難聴児の保護者を対象として、新生児聴覚スクリーニング (NHS) リファーマ時から難聴診断・療育を経て現在に至るまでの心理経過について、自由記述および日本版 Edinburgh Postnatal Depression Scale (EPDS) への後方視的評価により検討した。難聴診断初期の受け入れがたい感情から、療育を経て前向きな受け止めへと変容しながらも将来への不安と往来する感情を抱えていく経過が示され、長期的発達を見通した知見の集積が必要と考えられた。 (研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) (筆頭論文) 共著者：岡野由実、廣田栄子、瀬戸由記子
3. 『成人補聴器臨床における言語聴覚士の役割の検討 —耳鼻咽喉科クリニックの補聴器外来における役割分担の違いから—』(査読付)	共著	2024年12月	言語聴覚研究 21巻 p489-497 (日本言語聴覚士協会)	耳鼻咽喉科クリニックの補聴器外来業務における言語聴覚士 (ST) の役割により3期に分け、診療録を後方視的に分析した。STによる初回ガイダンス、適合検査の実施および結果に基づく調整、本人および家族に対するコミュニケーションストラテジーの指導を含む装用指導が重要であることを示唆した。 (研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) (筆頭論文) 共著者：岡野由実、富澤晃文、坂崎弘幸、池田泰子、角田玲子
4. 『一側性難聴による障害の実態と支援』(査読付)	単著	2024年12月	Audiology Japan 67巻 p527-533 (日本聴覚医学会) (総説)	一側性難聴の聞こえの障害について、日常生活の具体的場面や発達の発容の観点から概説した。また、一側性難聴当事者が求める配慮や求められる医療の対応について、アンケート結果をもとに論じた。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
5. 『わが国における言語聴覚療法のエビデンス-システムティックレビューによる検討-小児聴覚障害に対する言語聴覚療法のエビデンス』	共著	2025年1月	言語聴覚研究 22巻 p98-122 (日本言語聴覚士協会)	わが国における小児聴覚障害に対する言語聴覚療法のエビデンスをシステムティックレビューによってまとめた。1次・2次スクリーニングを経て1,003編中43編の文献が採択され、各方法による指導・支援の結果、聴覚障害乳幼児が年齢相応の言語力を獲得したことが示された。しかし、指導法による差などを直接比較した研究はなく、今後、評価尺度・指標の共有などが進み、質の高い研究の必要性を論じた。 (文献レビューの2次スクリーニングと文献のまとめを担当) 共著者：原田浩美、平島ユイ子、野原 信、岡野由実、倉内紀子

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 『一側性難聴者に対する配慮に関する調査；発症時期および難聴程度による違い』	—	2024年6月	第50回日本コミュニケーション障害学会	一側性難聴者がコミュニケーション場面において日頃受けている配慮と希望する配慮についてWeb調査を実施した。発症時期や難聴程度による違いについて質的に検討した。 (単独での発表)
2. 『難聴を合併する18トリソミー症候群児の補聴器装用経過』	—	2024年7月	第19回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会	東邦大学医療センター大森病院耳鼻咽喉科小児難聴外来でフォローする18トリソミー児5例の聴力と補聴の経過について報告した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：瀬戸由記子、岡野由実、井上彰子、井関琢哉、松島康二、和田弘太
3. 『幼少期に診断された難聴児における補聴機器・補聴支援機器の使用実態調査 — 全国難聴児の保護者アンケート結果から—』	—	2024年10月	第69回日本音声言語医学会総会・学術講演会	難聴児と保護者への支援の状態を把握し時代に合った支援を検討することを目的として、全国の難聴児(者)の保護者を対象として調査を実施した。アンケート結果の中から、補聴機器および補聴援助機器の使用実態について報告した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：伊藤泰子、小林美穂、畠山 恵、志磨村早紀、氏田直子、岡野由実、北 義子
4. 『一側性難聴児保護者の診断期における支援ニーズ — 全国難聴児の保護者アンケート調査から—』	—	2024年10月	第69回日本音声言語医学会総会・学術講演会	難聴児と保護者への支援の状態を把握し時代に合った支援を検討することを目的として、全国の難聴児(者)の保護者を対象として調査を実施した。アンケート結果の中から、一側性難聴児支援の実態と希望について報告した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：岡野由実、畠山 恵、志磨村早紀、氏田直子、北 義子
5. 『聴覚障害生徒の高校在学中の課題と高校卒業後の進路 — 全国難聴児の保護者アンケート調査から—』	—	2024年10月	第69回日本聴覚医学会総会・学術講演会	難聴児と保護者への支援の状態を把握し時代に合った支援を検討することを目的として、全国の難聴児(者)の保護者を対象として調査を実施した。アンケート結果の中から、高校在学中の課題と高校卒業後の進路について報告した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：志磨村早紀、畠山 恵、伊藤泰子、小林美穂、岡野由実、氏田直子、北 義子
6. 『一側性難聴者の歯科診療における困りごとに関する調査』	—	2024年10月	第69回日本聴覚医学会総会・学術講演会	一側性難聴当事者に対しWeb調査を実施し、378名より回答を得た。一側性難聴者が歯科診療において抱える困りごとについて実態を報告した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：岡野由実、村上旬平
7. 『一側性難聴者への調査からみえる歯科空間において必要なきこえへの配慮』	—	2024年12月	第41回日本障害者歯科学会総会および学術大会	一側性難聴当事者に対しWeb調査を実施し、378名より回答を得た。一側性難聴者が歯科診療において必要と考える配慮事項について報告した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：村上旬平、岡野由実

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 言語聴覚学科 氏名

後藤 遼佑

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Effects of gait speed and sole adjustment on shoe-floor angles: measurement using shoe-type sensor. (速度と靴底調節が靴-床角度に与える影響: 靴型センサを用いて) (査読付き)	共著	2024年10月	Biomechanics 4 (4): 595-604	靴型センサを用いて、ヒト歩行中の床に対する靴の角度を計測した。その結果、速度の変化によって歩行中の足関節底背屈角度が変化し、靴底調節（インソール調節）によって前額面における靴-床角度が変化することが分かった。 (分析、考察を担当) 橋口 優、沼部 告、後藤 遼佑
Muscle synergy in several locomotor modes in chimpanzees and Japanese macaques, and its implications for the evolutionary origin of bipedalism through shared muscle synergies (チンパンジーとニホンザルにおける数種ロコモーション様式における筋シナジー: 筋シナジーを通じた二足性の進化に関する考察) (査読付き)	共著	2024年12月	Scientific Reports 14: Article number 32234	チンパンジーの二足歩行、垂直木登り、四足歩行、ニホンザルの二足歩行と四足歩行の後肢筋の筋電図を収集し、二足歩行の筋活動が他の非二足性ロコモーション様式のそれと類似しているかを検証した。後肢筋から4つの筋シナジーを抽出し、チンパンジーでは、二足歩行時に活動する筋シナジーのすべてが垂直木登りか四足歩行の筋シナジーによって近似できることを示した。また、ニホンザルではほとんどの二足歩行シナジーが四足歩行シナジーによって近似できたが、片脚支持時に活動するシナジーは四足歩行シナジーでは再現できなかった。これらの結果から、二足歩行の後肢筋の活動は、他のロコモーション様式を実行する筋シナジーを転用することで実現可能であり、すなわち、二足歩行は他のロコモーション様式を実行する神経メカニズムを転用することで派生してきたと考えられた。 (実験の計画から論文の執筆までのすべてを担当) 共著者: 後藤遼佑、スーザン・ラーソン、設楽哲弥、橋口優、中野良彦

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
ニホンザルの四足歩行における四肢の運び順と手足の位置制御	-	2024年10月	第78回 日本人類学会 (大阪市)	霊長類は不連続に散在する樹枝に手足を着きながら樹上を歩く。どのように手足の位置を正確に制御するのだろうか? 発表者らは霊長類特有の四肢の運び順が関係すると考えている。手の近くに足が着地するその運び順では、視覚的な制御が困難な足の誘導に手の位置に関する体性感覚情報が利用されるのかもしれない。本研究では、手が支持基体に着地すると手と支持基体が下降する不連続な歩行路を作成した。手の位置情報が足の位置の制御に使われていれば、手と支持基体の位置が変化しようとも足は円滑な軌跡で支持基体に到達するだろう。本発表では、ニホンザルがその歩行路を四足歩行で移動した際の手足の軌跡や四肢の運び順等を報告した。 発表者: 後藤遼佑、平崎鋭矢

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
霊長類の四肢の運び順と樹枝の不連続性	-	2024年10月	第78回 日本人類学会大会 キネシオロジー分科会主催シンポジウム 「直立二足歩行への適応と進化研究の展望」	多くの霊長類は四足歩行で移動するが、この四足歩行は他の四足性動物とは異なる歩き方である。特異な四足歩行を行っていたからこそ、霊長目の中から二足歩行が進化したのかもしれない。本発表では、霊長類を含む哺乳類の四足歩行の多様性をレビューし、なぜ霊長類が特異な四足歩行で歩くのか、発表者の研究データに基づいて、その進化的な理由について発表した。 発表者：後藤遼佑
霊長類の多様なロコモーションとヒトの二足歩行	-	2024年11月	第143回 理学療法科学学科 「類人猿・ヒトの進化と退化：リハビリテーションの新視点」特別講演	人類の起源についてレビューし、発表者が行ってきたロコモーション研究について概説した。特に、筋電図研究と体幹運動研究から明らかとなった知見を中心に発表した。 聴者には研究者だけでなくメディカル学生も多いとのことだったので、できるだけ分かりやすく、細部に入りすぎること避けた発表とした。 発表者：後藤遼佑

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 言語聴覚学科 氏名 遠藤俊介

## 著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
言語聴覚士テキスト第4版	共著	令和6年2月刊行	医師薬出版株式会社	脳性麻痺、重症心身障害児、医療的ケア時など、言語聴覚士が支援する小児の重複障害について、その概要および評価・支援方法についてまとめた。 編者：大森孝一、永井知代子、深浦順一 他 分担執筆：岡島康友、小林靖、小杉伊三夫 他 担当：Ⅶ章 2 小児の重複障害（脳性麻痺・重症心身障害など） pp.312～321

## 学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
日本語版文の多様性による早期言語発達評価法の妥当性の検討：30ヶ月児および36ヶ月児に対する調査から（査読付き）	共著	令和6年8月	コミュニケーション障害学, 41巻2号 pp55-63	2歳代の「言葉の遅れ」が個人差の範囲内なのかそれとも後の言語発達障害の兆候なのかを鑑別するための手法として「日本語版文の多様性による早期言語発達評価法」を開発し、30ヶ月児36名、36ヶ月児45名の定型発達児および6名の言語発達障害リスク児のデータを収集し、妥当性の検討を行なった。文の多様性は2歳代の文法発達を評価する方法として妥当性が高いことが示唆した。 （筆頭論文） 著者名：遠藤俊介, 田中裕美子, 工藤芳幸, 金屋麻衣

## その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
<学会発表>				
26. 文復唱を用いた言語発達障害(DLD)早期発見スクリーニング検査の開発1―課題開発の背景と主眼―	-	令和6年6月1日	第50回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 開催地：帝京平成大学（東京）	言語発達障害児を早期に発見するための評価法として文の復唱によるスクリーニング課題を開発した。開発の背景と検査の構成について解説した 発表者名：野波尚子 田中裕美子 遠藤俊介 伊藤敬市
27. 文復唱を用いた言語発達障害(DLD)早期発見スクリーニング検査の開発2―定型発達児の経年変化―	-	令和6年6月1日	第50回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 開催地：帝京平成大学（東京）	言語発達障害児を早期に発見するための評価法として文の復唱によるスクリーニング課題を開発した。本課題における定型発達児の成績を明らかにするため調査を実施し、その結果を報告した。 発表者名：遠藤俊介 田中裕美子 伊藤敬市 野波尚子（筆頭演者）
28. 文復唱を用いた言語発達障害(DLD)早期発見スクリーニング検査の開発3―言語発達障害児の反応特徴―	-	令和6年6月1日	第50回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 開催地：帝京平成大学（東京）	言語発達障害児を早期に発見するための評価法として文の復唱によるスクリーニング課題を開発した。本課題を言語発達障害児に実施し、その成績と反応特徴について報告した。 発表者名：伊藤敬市 田中裕美子 野波尚子 遠藤俊介

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
29. 文復唱課題を用いた人工内耳装用児の言語評価の試み—エラー分析による検討—	-	令和6年10月17日	第69回日本音声言語医学会学術講演会 開催地：学術総合センター（東京）	人工内耳装用児の言語問題を検出するため、文の復唱課題が有効であるかを検討した。定型発達児と人工内耳装用児を比較しエラー分析を行ったところ、人工内耳装用児は動詞語尾形態素のうち、ヴォイスでのエラーが多いことが明らかになった。 発表者名：野波尚子、田中裕美子、遠藤俊介、伊藤敬市、ほか
30. 幼児の文法発達を促進する保護者の言葉かけに関する研究 — 30か月定型発達幼児の母親の発話分析からの検討 —	-	令和6年11月17日	第8回 群馬県言語聴覚学会 開催地：群馬パーズ大学（群馬）	30ヶ月（2歳6か月）の定型発達幼児とその保護者を対象とし、保護者のどのような言葉かけが幼児の文法発達を促進するのかを検討した。幼児の言語表出に対して「応答的」に言葉かけをしている保護者の幼児の方が、文法的発達が良いことが示唆された。 発表者名：遠藤俊介

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 言語聴覚学科 氏名

及川 翔

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
4. 軽度失語症者における家族とのコミュニケーション活動の実態に関する研究	共著	令和7年3月	群馬パース大学紀要第31号	軽度失語症当事者らから語られる家族とのコミュニケーションの状況を分析することで、コミュニケーション活動、参加に影響を与える要因を検討し、生活期における軽度失語症者のコミュニケーション活動、参加の実態の把握の一助とすることを目的とし、都内で自立した生活を送る軽度失語症者3名を対象にインタビュー調査を実施し、内容を質的に分析した。その結果、本人の主観的なコミュニケーションの困難さや家族とのコミュニケーションの困難さを引き起こす要因として家族との関係性や家族のコミュニケーション態度（会話支援技術を含む）が重要である可能性が示唆された。コミュニケーション支援においては、失語症者を構成する環境因子が促進因子となるように働きかけることが重要であると考えられる。 共著者：及川翔、神山政恵

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 言語聴覚学科

氏名

酒井哲郎

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
4 Hyoid Bone Velocity and Distance during the Forward Phase Correlate with Pyriform Sinus Residue: A Retrospective Case Series (舌骨の前方への移動速度は梨状陥凹の咽頭残留と相関がある(嚥下造影検査による後方視的研究))	共著(最終)	令和6年4月	Progress Rehabilitation Medicine in	研究目的: 嚥下時の舌骨の動きと咽頭残留物の関係を調べた。 方法: 嚥下造影検査のデータを用いて、舌骨の上方・前方・下方への動きの速さと距離を測定し、咽頭残留との関連を分析。 結果: 舌骨の「前方」移動の速さと距離が、咽頭残留(特に梨状陥凹)と有意に関連していた。 結論: 舌骨の前方移動が嚥下機能の評価に重要であり、VFSSではその動きを段階的に評価することが有効。 (実験の遂行、方法の記載、統計の実施、考察の一部を担当) 共著者: Hironori Arii, Tetsuro Sakai

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8 ハンドヘルドダイナモメーターを用いた摂食嚥下機能の筋力評価の可能性の検討	-	令和6年6月19日	第25回日本言語聴覚学会	口演 ハンドヘルドダイナモメーターを用いた測定は簡便で再検査信頼性も高いため、臨床的应用が期待される結果が示唆された。 酒井 哲郎, 岡崎 泰, 豊田 竜暉
9 ハンドヘルドダイナモメーターを用いた摂食嚥下機能の筋力評価の信頼性と妥当性の検討	-	令和6年8月30日	第30回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会	口演 HHDを用いた頸部の測定は、再検査信頼性は高く、舌圧測定とシャキア法の持続時間の間に相関関係があるなど、簡便で客観的な評価として使用できる可能性がある。しかし舌圧測定とシャキア法の持続時間の間に相関関係がないことから、舌圧測定とは別の要素を評価していると考えられ、より咽頭期に即した評価として使用できる可能性が示唆された。
10 ハンドヘルドダイナモメーターを用いた嚥下機能の筋力評価(健常者での検討)	-	令和6年11月17日	第8回 群馬県言語聴覚学会	口演 HHDでの測定の再検査信頼性は $ICC(1, 1) = 0.975$ 、舌圧測定の再検査信頼性は $ICC(1, 1) = 0.925$ と共に高い再検査信頼性が得られた。各評価間の関係性では、HHDでの測定と舌圧測定は $r = 0.48$ と有意な相関関係が得られた 酒井 哲郎, 藤谷 順子, 關口 相和子

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 検査技術学科 氏名 松下 誠

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
ピロガロールレッド法を原理とする尿蛋白測定試薬の血清蛋白測定への応用（査読有）	共著	2024年10月	医学検査73(4): 691-698, 2024	小林麻里子、巖崎達矢、神山清志、篠塚洋明、大澤進、松下誠 尿蛋白測定法であるピロガロールレッド法を血清総蛋白測定法への応用について検討を行い、従来のピウレット法よりも蛋白質に特異性の高い測定法になりえることを実証した。（本論文は埼玉県立大学大学院博士前期課程（松下誠が特別研究指導教員）の修士論文をが学術雑誌に投稿・受理掲載されたものである）

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
基礎から学ぶ生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法 6. 試薬のpH低下に伴う酵素活性の低下 —ALP測定の例—	単著	2024年5月	Medical Technology, 52(5): 507~512. 2024.	現在の生化学検査は、生化学自動分析装置を用いる方法が中心となり、異常検査データおよびピットフォールを含めて検査データを保証することが重要である。そのためには、生化学自動分析装置に備わっている反応タイムコースモニタの解析法を身に着けることが大切となる。今回、生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法を学ぶための全10回の連載を企画することとなった。6回目は試薬のpH低下に伴う酵素活性の低下 —ALP測定の例—、について解説した。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
基礎から学ぶ生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法 7. 矛盾する検査データの解析—CKおよびCK-MBの逆転現象の例—	単著	2024年7月	. Medical Technology, 52(7) : 751~758. 2024.	現在の生化学検査は、生化学自動分析装置を用いる方法が中心となり、異常検査データおよびピットフォールを含めて検査データを保証することが重要である。そのためには、生化学自動分析装置に備わっている反応タイムコースモニタの解析法を身に着けることが大切となる。今回、生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法を学ぶための全10回の連載を企画することとなった。7回目は矛盾する検査データの解析—CKおよびCK-MBの逆転現象の例—について解説した。
基礎から学ぶ生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法 8. 構成成分の相違に伴う反応タイムコースの変動—A/G比の影響を受けるTP測定の例—	単著	2024年9月	Medical Technology, 52(9) : 965~971. 2024.	現在の生化学検査は、生化学自動分析装置を用いる方法が中心となり、異常検査データおよびピットフォールを含めて検査データを保証することが重要である。そのためには、生化学自動分析装置に備わっている反応タイムコースモニタの解析法を身に着けることが大切となる。今回、生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法を学ぶための全10回の連載を企画することとなった。8回目は、構成成分の相違に伴う反応タイムコースの変動—A/G比の影響を受けるTP測定—について解説した。
基礎から学ぶ生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法 9. 酵素のKm値が反応タイムコースに与える影響—尿酸およびクレアチニン測定の例—	単著	2024年11月	Medical Technology, 52(11) : 1176~1184. 2024.	現在の生化学検査は、生化学自動分析装置を用いる方法が中心となり、異常検査データおよびピットフォールを含めて検査データを保証することが重要である。そのためには、生化学自動分析装置に備わっている反応タイムコースモニタの解析法を身に着けることが大切となる。今回、生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法を学ぶための全10回の連載を企画することとなった。9回目は、酵素のKm値が反応タイムコースに与える影響—尿酸およびクレアチニン測定の例—について解説した。
基礎から学ぶ生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法 10. 本連載のまとめ（最終回）。	単著	2025年1月	Medical Technology, 53(1) : 94~100. 2025.	現在の生化学検査は、生化学自動分析装置を用いる方法が中心となり、異常検査データおよびピットフォールを含めて検査データを保証することが重要である。そのためには、生化学自動分析装置に備わっている反応タイムコースモニタの解析法を身に着けることが大切となる。今回、生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法を学ぶための全10回の連載を企画することとなった。10回目は、第1回~9回までのまとめを分かりやすく解説した。

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 検査着樹T学科

氏名

亀子光明

### 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
臨床検査データブック 2025-2026	共著	2025年1月	株式会社 医学書院	アミノ酸分析2種類（チロシン、フェニルアラニン）， p. 114-116

### 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
蛍光酵素免疫測定法によるB型肝炎ワクチン接種後の免疫獲得評価に関する研究	共著	2024年10月	臨床化学	53巻4号 Page234-238

### その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 検査技術学科 氏名 高橋克典

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
臨床検査学講座 検査機器総論 第2版	共著	令和7年3月	医歯薬出版	分担執筆：藤田清貴、高橋克典 他 担当：3章-C。水平回転機、免疫学用遠心分離機、プレートリーダー、プロテイング装置、イムノクロマトリーダー。臨床検査技師養成校向けの教科書として作成。免疫血清分野で使用する検査機器類に関する解説を担当。

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. Ester derivatives of Dictyostelium differentiation-inducing factors exhibit antibacterial activity, possibly via a prodrug-like function (エステル型DIF誘導体がプロドラッグ用機構により抗菌活性を示した)(査読付)	共著	令和7年1月	Molecules 18(1):40. doi: 10	細胞性粘菌分化誘導因子DIF-1の誘導体を用いた先行研究において、メチシリン感受性黄色ブドウ球菌(MSSA)、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)、バンコマイシン感受性エンテロコッカス・フェカリス(VSE)、およびバンコマイシン耐性エンテロコッカス・フェシウム(VRE)を含むグラム陽性菌に対する抗菌活性を示した誘導体に着目し、課題であったアルブミン存在下での薬効減弱下に対して疎水性の低い誘導体であるDIF-1-NH <sub>2</sub> とNH <sub>2</sub> -Bu-DIF-3でアプローチし、一定の成果を得た。(実験の遂行、結果の解析、執筆を担当)(筆頭論文) 共著者: Takahashi K, Kikuchi H, Ishigaki H, Miura Y, Takahashi A, Kubohara Y.
2. THP-1細胞を用いた新規抗炎症剤候補化合物の探索(査読付)	共著	令和7年3月	医学と薬学 82(3) pp.175-179	細胞性粘菌由来の含塩素レゾルシノール誘導体Monochasiol Aとそのアナログを対象に、新規抗炎症剤の候補化合物を探索した結果、THP-1細胞をLPSで刺激した際に誘導されるIL-8、IL-6、TNF- $\alpha$ は、Monochasiol B共存下においてそれぞれ32.6%、44.5%、53.5%まで抑制された。このとき、細胞生存率は9割を超えていた。このことからMonochasiol Bにより抑制されたサイトカインは、いずれも炎症反応経路に関与するNF- $\kappa$ Bに関与するものであり、細胞毒性も低いことからMonochasiol Bが慢性炎症性疾患の新規治療薬の候補になりうると結論づけた。(実験の遂行、結果の解析、執筆を担当)(筆頭論文)共著者:高橋克典, 石垣宏尚, 三浦佑介, 高橋あゆ子

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 検査技術学科 氏名 林 由里子

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 各施設の感染症対策 4 学校で流行しやすい感染症(査読付)(筆頭著者)	共著	令和6年(2024年)	感染制御と予防衛生 8(1) 23-33	【概要】学校(幼稚園, 小学校, 中学校, 大学)および保育園における感染症の集団発生メカニズムと健康危機管理体制について包括的に解析した。インフルエンザやCOVID-19等の感染症が学校で集団発生し, 家族内感染を経て職場内流行・地域流行へと拡大する感染経路を明らかにした。また, 学校保健安全法に基づく校長・学校医・学校保健技師・保健所の連携体制, 感染症の分類(第1種～第3種)と出席停止基準, 感染症法における五類感染症としての位置づけと発生動向調査システムについて詳細に検討し, 多層的な感染症管理体制の有効性と課題を示した。(筆頭著者) 共著者: 林由里子, 藤本友香, 木村龍介, 長澤紀佳, 宮下知也, 近土真由美, 木村博一, 木村博一
2. Molecular Evolutionary Analyses of the Fusion Genes in Human Parainfluenza Virus Type 4. (ヒトパラインフルエンザウイルス4型融合遺伝子の分子進化解析)(査読付)	共著	令和6年(2024年)	Microorganisms 12(8), 1633, 2024 (IF=4.6)	【概要】1966年から2022年にかけて収集された48のHPIV4株の融合遺伝子(F遺伝子)について, ベイズマルコフ連鎖モンテカルロ法を用いた時間スケールの進化系統樹解析を行った。その結果, 4aと4bの2つのサブタイプの分岐は1823年頃に発生し, 遺伝子の進化速度は $4.41 \times 10^{-4}$ substitutions/site/yearと低く, 各サブタイプ内で遺伝子が保存されていることが示された。また, 三量体融合タンパク質の頂点部分にB細胞エピトープが予測され, HPIV4が200年前に分岐後さらに分化・進化したことを示唆した。(共著者として実験の遂行, データ解析を担当) 共著者: Fuminori Mizukoshi, Hirokazu Kimura, Satoko Sugimoto, Ryusuke Kimura, Norika Nagasawa, <u>Yuriko Hayashi</u> , Koichi Hashimoto, Mitsuaki Hosoya, Kazuya Shirato, Akihide Ryo
3. 米国臨床検査技師養成プログラムのメディカルダイレクターを招いた英語によるオンライン講演の開催報告(査読付)(筆頭著者)	共著	令和6年(2024年)	臨床検査学教育 Vol.16,(No.2) 106-109	【概要】検査技術学科学生を対象とした国際教育プログラムとして, 米国Emory大学のメディカルダイレクターによるオンライン講演会を開催した。学生は米国における臨床検査医学および臨床検査技師教育について英語で学習し, 海外での活躍機会を認識することができた。受講学生の中からASCP international (ASCPi) 資格取得希望者が現れるなど, 臨床検査における国際教育として有意義な成果が得られた。(筆頭論文) 共著者: 林由里子

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
4. Molecular Evolutionary Analyses of Shiga toxin type 2 subunit A Gene in the Enterohemorrhagic Escherichia coli (EHEC). (腸管出血性大腸菌におけるShiga毒素2型サブユニットA遺伝子の分子進化解析)(査読付)	共著	令和6年(2024年)	Microorganisms 12(9), 1812, 2024 (IF=4.6)	【概要】腸腸管出血性大腸菌(EHEC)のShiga毒素2型サブユニットA遺伝子(stx2A遺伝子)について、時間スケール系統解析、系統動態解析、選択圧解析等を用いた分子進化解析を行った。その結果、stx2A遺伝子の共通祖先は約18,600年前に遡り、その後2つの主要系統に分岐し、1930年代以降に個体群サイズが増加し世界的に拡散したことが判明した。また、一部のサブタイプは効果的な中和抗体を誘導する可能性が示唆された。(共著者として実験の遂行、データ解析を担当) 共著者: Ryusuke Kimura, Hirokazu Kimura, Tatsuya Shirai, <b>Yuriko Havashi</b> , Yuka Sato-Fujimoto, Wataru Kamitani, Akihideo Ryo, Haruyoshi Tomita
5. 蛍光酵素免疫測定法によるB型肝炎ワクチン接種後の免疫獲得評価に関する研究.(査読付)	共著	令和6年(2024年)	臨床化学	【概要】B型肝炎ワクチン接種後の免疫獲得評価におけるFEIA法の有用性を検討するため、FEIA法とCLEIA法でHBs抗体測定を実施した。判定一致率は81.7%であり、不一致検体(FEIA法陽性・CLEIA法陰性)の46.4%はCLIA法で陽性判定となった。中和試験で良好な阻害率が得られたことから、判定不一致は測定法の反応系の違いに起因し、FEIA法もワクチン接種の免疫獲得効果判定に有用である可能性が示唆された。(共著者として、研究企画・論文執筆を行った) 共著者: 高橋あゆ子, <b>林由里子</b> , 角田紀代美, 染谷凱斗, 藤田清貴, 松下誠, 亀子光明
6. Phylogenomic Analyses of the Hemagglutinin-Neuraminidase (HN) Gene in Human Parainfluenza Virus Type 4 Isolates in Japan.(日本におけるヒトパラインフルエンザウイルス4型のヘマグルチニン-ノイラミニダーゼ(HN)遺伝子の系統ゲノム解析)(査読付)	共著	令和6年(2024年)	Pediatric International 66(1):e15717, 2024 (IF=1.617)	【概要】ヒトパラインフルエンザウイルス4型(HPV4)のヘマグルチニン-ノイラミニダーゼ(HN)遺伝子とHNタンパク質の系統ゲノム学的理解のため、時間スケール系統解析、遺伝的距離評価、3次元構造マッピング等を用いた解析を行った。HNタンパク質の活性部位は頭部に位置し、立体構造エピトープが活性部位近傍に存在することから、再感染の可能性は低く、抗体による保護効果が期待される。(共著者として実験の遂行、データ解析を担当) 共著者: Kanako Otani, Ryusuke Kimura, Norika Nagasawa, <b>Yuriko Havashi</b> , Suguru Ohmiya, Oshi Watanabe, Irona Khandaker, Hirokazu Kimura, Hidekazu Nishimura
7. Reinfection Mechanisms of Various Viruses and Their Societal Implications.(ウイルス再感染のメカニズムと社会的影響)(査読付)(筆頭著者)	共著	令和7年(2025年)	Disease Biology, Genetics, and Socioecology 1(1), 4, 2025	【概要】一部のウイルスは終生免疫を誘導するが、インフルエンザやSARS-CoV-2、RSウイルスなどは抗原変異や免疫回避により再感染を引き起こす、これにはウイルスの構造的特徴や免疫応答の限界が関与する。こうした理解は、ワクチン開発や公衆衛生政策において重要であり、社会的対応や文化的要因も考慮する必要がある。(筆頭著者) 共著者: Ryusuke Kimura*, <b>Yuriko Havashi</b> *, Yuka Sato-Fujimoto, Kei Miyakawa, Kazuya Shirato, Koo Nagasawa, Fuminori Mizukoshi, Takeshi Tsugawa, Akihideo Ryo, Hirokazu Kimura

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 高齢者におけるリンパ球サブセットの基準範囲設定の意義	—	2024年5月12日	第74回医学検査学会	【概要】高齢者におけるリンパ球サブセットの基準範囲設定の意義について検討し報告した。 共著者: 藤本友香, 浅見知市郎, 古田島伸雄, <b>林由里子</b> , 三村邦裕, 村上正巳
2. マウス脳における保護型ミクログリア誘導制御メカニズムの解析	—	2024年6月15日	2024年度 日本生化学会関東支部例会	【概要】膜貫通型タンパク質であるSIRPαをMG特異的に欠損させたマウスでは、組織損傷のない正常な状態でもCD11c陽性MGが出現することを見出し、SIRPα欠損MGの細胞特異性と活性化制御メカニズムについて検討し報告した。 共著者: 守家優佳, 尾池恵摘, 榛澤春哉, 雨宮咲久良, 仲丸優香, 浦野江里子, 松本映子, 小林良祐, 堀居拓郎, 畑田出穂, <b>林由里子</b> , 的崎尚, 大西浩史

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3. 受容体型分子SIRPαの欠損がミクログリアの老化と発生に与える影響の解析	—	2024年6月15日	2024年度 日本生化学会関東支部例会	【概要】受容体型分子SIRPαを欠損したマウスでは、正常な状態でも脳内でCD11c陽性MGが増加し、脱髄モデルや、加齢性運動学習能低下へ抵抗性を示すことから、SIRPα欠損がMGに与える影響について、異なる週齢のマウスを用いて検討し報告した。 共著者：榛澤春哉、尾池恵摘、守家優佳、上田瑞姫、浦野江里子、松本映子、 <b>林由里子</b> 、的崎尚、大西浩史
4. ヒト末梢血好中球のライフサイクルリズムと細胞表面抗原の発現関連解析	—	2024年8月31日	第64回日本臨床化学会年次学術集会	【概要】顆粒球におけるCD172aの発現は他の末梢血細胞に比べ、個体によるバラツキが大きく、また、若年者では日差変動が大きい。CD172a発現強度の変動と顆粒球の多くを占める好中球の成熟サイクルとの相関について検討するために、朝7時から夜7時の12時間での末梢血顆粒球におけるCD172aの発現強度の変化について検討し報告した。 共著者：新井り香、 <b>林由里子</b> 、大西浩史、松下誠、藤田清貴
5. CD11c陽性ミクログリア誘導制御メカニズムの解析	—	2024年9月20日	第71回北関東医学会総会	【概要】膜型分子 SIRPαを MG 特異的に欠損させたマウスでは、組織損傷のない正常な状態でも CD11c 陽性 MG が出現することから、SIRPα 欠損マウスの表現型を手掛かりに、CD11c 陽性 MG 誘導制御メカニズムを検討し報告した。 共著者：守家優佳、仲丸優香、尾池恵摘、榛澤春哉、松本映子、浦野江里子、小林良祐、堀居拓郎、畑田出穂、 <b>林由里子</b> 、大西浩史
6. 老化と発達におけるミクログリア活性化と受容体型分子SIRPαの関連解析	—	2024年9月20日	第71回北関東医学会総会	【概要】MG に発現する受容体型分子 SIRPαを欠損したマウスでは、正常な状態でも脳内で CD11c 陽性 MG が増加し、脱髄モデルや、加齢性運動学習能低下へ抵抗性を示すことから、SIRPα 欠損が MG に与える影響について、成体、老化後、幼若期など、異なる週齢のマウスを用いて検討した。 共著者：長澤紀佳、 <b>林由里子</b> 、松下 誠、藤田清貴
7. ランニングホイールを用いた運動技能学習の加齢変化の解析	—	2024年9月20日	第71回北関東医学会総会	【概要】マウスで白質老化の評価法を検討するために、白質機能との密接な関連が報告されている自発的ランニングホイールを用いた運動技能シーケンステストを行い、加齢による表現型の変化を解析し報告した。 共著者：本澤拓郎、尾池恵摘、榛澤春哉、守家優佳、松本映子、浦野江里子、 <b>林由里子</b> 、大西浩史
8. 臨床検査技師教育における実務経験豊富な外部講師による実習指導の効果	—	2024年10月27日	2024年度 首都圏支部・関甲信支部医学検査学会	【概要】学内実習における外部講師による指導の有用性を評価することを目的に、学生へのアンケートを実施し、より学習効果の高い学内実習につながるかの検討を行い報告した。 共著者： <b>林由里子</b> 、静 怜子、長澤 紀佳、新井り香
9. マウスの協調運動学習能の加齢変化に関する自発的ランニングホイールテストを用いた行動学的解析	—	2024年11月29日	第47回日本分子生物学会年会	【概要】 マウスにおける協調運動学習能の加齢変化について、自発的ランニングホイールテストを用いて行動学的解析を実施し報告した。 共著者：本澤拓郎、尾池恵摘、榛澤春哉、守家優佳、松本映子、浦野江里子、 <b>林由里子</b> 、大西浩史
10. 膜型分子SIRPαによるCD11c陽性ミクログリア誘導制御メカニズムの解析	—	2024年11月29日	第47回日本分子生物学会年会	【概要】 CD11c + ミクログリア (MG) の誘導における膜型分子SIRPαによる制御メカニズムについて検討し報告した。 共著者：守家優佳、尾池恵摘、榛澤春哉、仲丸優香、松本映子、浦野江里子、小林良祐、堀居拓郎、畑田出穂、 <b>林由里子</b> 、的崎尚、大西浩史
11. 異なる週齢のマウスにおいて受容体型分子SIRPα欠損がミクログリア活性化に与える影響の解析	—	2024年11月29日	第47回日本分子生物学会年会	【概要】 受容体型分子SIRPαの欠損が、ミクログリア活性化に与える影響について異なる週齢のマウスを用いた解析を行い報告した。 共著者：榛澤春哉、尾池恵摘、守家優佳、本澤拓郎、松本映子、浦野江里子、 <b>林由里子</b> 、的崎尚、大西浩史

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
12. ヘパリン採血検体における低温保存による可逆的血小板凝集反応	—	2024年12月1日	第68回群馬県医学検査学会	【概要】ヘパリンが血小板凝集に及ぼす一つの因子として、採血後の温度変化が関与するか否かについて、温度変化による血小板数、形態学的変化に加え、ヘパリンと血小板膜蛋白における分子間相互作用機構を解明するため、ドッキングシミュレーションを行い両分子の分子間相互作用に関する解析を行い報告した。 共著者：宮崎 愛斗, 川田侑佳, 土屋友香, 新井りり香, 木村博一, <b>林由里子</b>
13. THE ASSOCIATION BETWEEN SIRP $\alpha$ SIGNALING AND AGE-RELATED INFLAMMATORY RESPONSES IN HUMAN MONOCYTES	—	2025年12月10日	Faseb Science Research Conference	【概要】加齢に伴う免疫老化 (immunosenescence) では、慢性炎症 (inflammaging) の亢進が問題となる。本研究では、末梢血単球におけるCD172a (SIRP $\alpha$ ) の発現をフローサイトメトリーで解析し、CD172aは特に非古典的単球で高く発現しCD172a <sup>+</sup> CD16 <sup>+</sup> 単球は高齢者で有意に増加しており、CD172aは加齢関連の慢性炎症やインフラマソーム形成に関与する可能性が示唆されることを報告した。 共著者： <b>Yuriko Havashi</b> , Ririka Arai, Rino Watanabe, Etsumi Oike, Hiroshi Ohnishi
14. SENEESCENCE-LIKE ACTIVATION OF ASTROCYTES IN THE BRIN OF MICROGLIA-SPECIFIC SIRP $\alpha$ DEFICIENT MICES	—	2025年12月10日	Faseb Science Research Conference	【概要】加齢関連の白質グリア活性化機構を調べるため、マイクログリア特異的SIRP $\alpha$ 欠損 (MG-SIRP $\alpha$ cKO) マウス脳を免疫染色解析し、マイクログリアSIRP $\alpha$ -SHPシグナルが白質の加齢様グリアネットワーク活性化を抑制する鍵である可能性について報告した。 共著者：Etsumi Oike, Shunya Hanzawa, Yuka Moriya, Eriko Urano, Eiko Matsumoto, <b>Yuriko Havashi</b> , Takashi Matozaki, Hiroshi Ohnishi
15. A CHECKPOINT SIGNAL OF MICROGLIA ACTIVATION IN MOUSE BRAIN	—	2025年12月10日	Faseb Science Research Conference	【概要】マイクログリア特異的SIRP $\alpha$ 欠損マウスでは損傷なしでも白質にCD11c陽性マイクログリア (DAM/WAM様) が誘導され、老化様・DAM関連遺伝子が上昇した。さらにTrem2欠損でこの誘導が抑制されたことから、SIRP $\alpha$ -SHP経路はTrem2依存的な保護的CD11c <sup>+</sup> マイクログリア生成を抑えるチェックポイントである可能性について報告した。 共著者：Hiroshi Ohnishi, Etsumi Oike, Yuka Moriya, Shunya Hanzawa, Takuro Honzawa, Yuka Nakamaru, Mizuki Ueda, Sakura Amemiy, Eiko Matsumoto, Eriko Urano, Takenori Kotani, Yoji Murata, Ryosuke Kobayashi, Takuro Horii, Izuho Hatada, <b>Yuriko Havashi</b> , Takashi Matozakii

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 検査技術学科 氏名 木村 鮎子

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 緑膿菌臨床分離株を用いたプロテオーム解析によるレボフロキサシン耐性関連因子の探索（口頭発表）	—	2024/8/30	第64回日本臨床化学会	<p>緑膿菌のレボフロキサシン(LVFX)耐性株において、LVFX添加に伴って変動する耐性関連タンパク質を探索するために、LVFX高耐性緑膿菌臨床分離株にレボフロキサシンを添加して培養し、1・2時間後に集菌してタンパク質を回収し、プロテオーム解析を行った。結果として、LVFX高耐性株においてのみ、緑膿菌の内在性LVFX制御因子のタンパク質レベルが完全に消失することが初めて明らかになり、よく知られているDNAジャイレースの変異に加え、内在性制御因子の発現変動がLVFX高耐性化に関わる可能性が初めて示唆された。</p> <p>共著者：高橋 佳佑, 木村 鮎子, 松下 誠, 藤田 清貴</p>

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 検査技術学科 氏名 荒木泰行

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 初診時の採血データから体外受精成績に影響を与える因子の探索 (P-42)	-	2024年8月	第42回日本受精着床学会学術講演会	体外受精の成績に影響する初診時の採血データとBMI値を調べた。結果として、卵子の獲得には血糖値 (HbA1c) と栄養状態 (TP値) が、受精や妊娠には採卵時年齢と卵巣予備能 (AMH値) が関連していることが示された。これらの知見から、不妊治療においては、血糖管理や栄養状態の改善、そして年齢やAMH値を考慮した適切な医療的介入の重要性が示唆される。 ○ 剣持智恵美、中橋真朗、大場奈穂子、神沢典子、加藤喜愛、大村生和子、八木遥香、荒木泰行、長井咲樹、志村隆行、小林時江、上村るり子、山口貴史、久保祐子、佐藤雄一、大阪国際会議場
2. 生殖補助医療（不妊治療）現状と保険適用について -検査と技術-	単著	2025年1月	検査と技術 53巻1号, 医学書院	検査技師対象に、生殖補助医療の現状と保険適用についての基本的な情報を幅広く記載した内容である。

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 検査技術学科 氏名 石垣宏尚

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
19. Ester derivatives of Dictyostelium differentiation-inducing factors exhibit antibacterial activity, possibly via a prodrug-like function (Dictyostelium 分化誘導因子のエステル誘導体によるプロドラッグ様機能を介した抗菌活性) (査読付)	共著	2025年2月	BMC Research Notes 2025. 18(40). 1-9	Takahashi K, Kikuchi H, Nishimura T, <u>Ishigaki H</u> , Miura Y, Takahashi A, Kubohara Y. DIF-1およびDIF-3誘導体のグラム陽性菌に対する抗菌活性を検討した。いくつかの誘導体はin vitroで抗菌活性を示したが、ヒト血清アルブミン (HSA) の存在下で効果が消失した。エステル誘導体はプロドラッグとして細菌エステラーゼにより活性化される可能性があり、DIF誘導体の新たな抗菌薬開発への応用が期待される。(共同研究につき、本人担当分抽出不可能)
20. THP-1細胞を用いた新規抗炎症剤候補化合物の探索 (査読付)	共著	2025年3月	医学と薬学 2025. 82(3) 175-179	高橋克典、石垣宏尚、三浦佑介、高橋あゆ子 細胞性粘菌由来の含塩素レゾルシノール誘導体とそのアナログを対象に、新規抗炎症剤の候補化合物の探索を行った。その結果、THP-1細胞をLPSで刺激した際に誘導されるIL-8, IL-6, TNF- $\alpha$ に抑制が認められた。これらサイトカインは、いずれも炎症反応経路を制御するNF- $\kappa$ bに関与するものであり、慢性炎症性疾患の新規治療薬の候補になりえると考える。(共同研究につき、本人担当分抽出不可能)
21. $\beta$ -TC細胞を用いた新規インスリノーマ治療薬候補化合物の探索 (査読付)	共著	2025年4月	医学と薬学 2025. 82(4) 223-228	高橋克典、三浦佑介、石垣宏尚、高橋あゆ子、澤田裕也 細胞性粘菌由来の柄細胞分化誘導因子DIF-1をシード化合物として合成したDIF誘導体を用いてマウス膵臓 $\beta$ 細胞由来細胞 $\beta$ -TC細胞に対する効果を検証した。その結果、いくつかのDIF-1誘導体において、インスリン分泌量が抑制された。そのなかでDIF-1A(+3)は細胞毒性が低く、インスリン分泌抑制率が高いことから副作用の少ない新規インスリノーマ治療薬候補になると考える。(共同研究につき、本人担当分抽出不可能)

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 検査技術学科 氏名 三浦 佑介

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. Ester derivatives of Dictyostelium differentiation-inducing factors exhibit antibacterial activity, possibly via a prodrug-like function (タマホコリカビの分化誘導因子のエステル誘導体は、プロドラッグ様機能を介して抗菌活性を示す。)	共著	2025年1月	BMC Research Notes 18(1) 40	細胞性粘菌の分化誘導因子であるDIF-1, DIF-3ならびにその誘導体は, ヒト血清アルブミン(HSA) 存在下で抗菌活性が消失した。しかし, DIF誘導体を適切なエステル修飾することでHSAの結合を回避し, 細菌の産生するエステラーゼによって抗菌活性を示すプロドラッグとして機能する可能性を示した。(共同研究につき, 本人担当部分抽出不可能) Katsunori Takahashi, Haruhisa Kikuchi, Takehiro Nishimura, Hirotaka Ishigaki, <b>Yusuke Miura</b> , Ayuko Takahashi, Yuzuru Kubohara
2. THP-1細胞を用いた新規抗炎症剤候補化合物の探索	共著	2025年3月	医学と薬学 82巻3号 pp175-179	細胞性粘菌由来の含塩素レゾルシノール誘導体 Monochasiol Aとその類縁化合物8種類を対象に, 新規抗炎症剤の候補化合物を探索した。ヒト単球性白血病細胞株(THP-1細胞)において, Monochasiol Bが炎症反応経路を制御するサイトカインを抑制し, 細胞毒性も低かったため, 慢性炎症性疾患の新規治療薬の候補になりうると結論付けた。(共同研究につき, 本人担当部分抽出不可能) 高橋克典、石垣宏尚、 <b>三浦佑介</b> 、高橋あゆ子

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 医療技術学部  
検査技術学科

氏名

澤田裕也

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
1 JAMT教本シリーズ 呼吸機能検査技術教本 第2版	共著	2024年9月	株式会社 じほう	医療現場や検査現場における標準的な必要知識をわかりやすく参照でき、実際の業務に活かせることを意図としたもの。4章 吸入負荷試験 4.1吸入負荷試験に必要な知識、4.2吸入負荷試験の実際（113～131ページ）

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
4 $\beta$ -TC細胞を用いた新規インスリノーマ治療薬候補化合物の探索	共著	2025年2月	医学と薬学 2025, 82(4) 223-228	細胞性粘菌由来の柄細胞分化誘導因子DIF-1およびその誘導体を用いて、マウス膵臓 $\beta$ 細胞腫由来の $\beta$ -TC細胞に対する増殖抑制効果を検討した。各DIF誘導体の添加により、細胞の増殖抑制や形態変化が認められ、新規インスリノーマ治療薬候補としての可能性が示された。 高橋克典、三浦佑介、石垣宏尚、高橋あゆ子、澤田裕也

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 検査技術学科

氏名

高橋 あゆ子

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 蛍光酵素免疫測定法によるB型肝炎ワクチン接種後の免疫獲得評価に関する研究(査読付)	共著	2024年10月	臨床化学 Vol. 53 No. 4 234-238	B型肝炎ワクチン接種後の免疫獲得評価における蛍光酵素免疫測定法（FEIA法）の有用性を検討するために、同一検体についてFEIA法とガイドラインに記載されている測定法でHBs抗体測定を実施した。測定法間の陽性率に一定の傾向があることから、陽性判定基準を見直すことで各測定法間の判定一致率が向上する可能性が示さ、さらに、ガイドライン記載の測定法と同様にFEIA法もワクチン接種の免疫獲得の効果判定に有用である可能性が示唆された。 共著者：高橋あゆ子、林由里子、角田紀代美、染谷凱斗、藤田清貴、松下誠、亀子光明
2. Ester derivatives of Dictyostelium differentiation-inducing factors exhibit antibacterial activity, possibly via a prodrug-like function(エステル型DIF誘導体がプロドラッグ様機能により抗菌活性を示した)(査読付)	共著	2025年1月	Molecules	細胞性粘菌分化誘導因子DIF-1の誘導体を用いた先行研究において、メチシリン感受性黄色ブドウ球菌(MSSA)、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)、バンコマイシン感受性エンテロコッカス・フェカリス(VRE)、およびバンコマイシン耐性エンテロコッカス。フェシウム(VRE)を含むグラム陽性菌に対する抗菌活性を示した誘導体に着目し、課題であったアルブミン存在下での薬効減少下に対して疎水性の低い誘導体であるDIF-1-NH2とNH2-Bu-DIF-3でアプローチし、一定の成果を得た。 共著者：Katsunori Takahashi, Haruhisa Kikuchi, Takehiro Nishimura, Hiroataka Ishigaki, Yusuke Miura, Ayuko Takahashi & Yuzuru Kubohara
3. THP-1細胞を用いた新規抗炎症剤候補化合物の探索(査読付)	共著	2025年3月	医学と薬学 82(3)175-179, 2025	細胞性粘菌由来の含塩素レゾルシノール誘導体 Monochasiol Aとそのアナログを対象に、新規抗炎症剤の候補化合物を探索した結果、THP-1細胞をLPSで刺激した際に誘導されるIL-8、IL-6、TNF- $\alpha$ はMonochasiol B共存下においてそれぞれ32.6%、44.5%、53.5%まで抑制された。このとき、細胞生存率は9割を超えていた。このことから、Monochasiol Bにより抑制されたサイトカインは、いずれも炎症反応経路に関与するNF- $\kappa$ Bに関与するものであり、細胞毒性も低いことから Monochasiol Bが慢性炎症性疾患の新規治療薬の候補になりうると結論付けた。 共著者：高橋克典、石垣宏尚、三浦佑介、高橋あゆ子

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 検査技術学科 氏名 新井 りり香

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. ヒト末梢血好中球のライフサイクルリズムと細胞表面抗原の発現相関解析	—	2024年8月	第64回日本臨床化学会年次学術集会	【概要】顆粒球におけるCD172aの発現は他の末梢血細胞に比べ、個体によるバラツキが大きく、また、若年者では日差変動が大きい。CD172a発現強度の変動と顆粒球の多くを占める好中球の成熟サイクルとの相関について検討するために、朝7時から夜7時の12時間での末梢血顆粒球におけるCD172aの発現強度の変化について検討し報告した。 共著者：新井りり香, 林由里子, 大西浩史, 松下誠, 藤田清貴
2. 臨床検査技師教育における実務経験豊富な外部講師による実習指導の効果	—	2024年10月	2024年度 首都圏支部・関甲信支部医学検査学会	【概要】学内実習における外部講師による指導の有用性を評価することを目的に、学生へのアンケートを実施し、より学習効果の高い学内実習につながるかの検討を行い報告した。 共著者：林由里子, 静怜子, 長澤紀佳, 新井りり香
3. ヘパリン採血検体における低温保存による可逆的血小板凝集反応	—	2024年12月	第68回群馬県医学検査学会	【概要】ヘパリンが血小板凝集に及ぼす一つの因子として、採血後の温度変化が関与するか否かについて温度変化による血小板数、形態学的変化に加え、ヘパリンと血小板膜蛋白における分子間相互作用機構を解明するため、ドッキングシミュレーションを行い両分子の分子間相互作用に関する解析を行い報告した。 共著者：宮崎 愛斗, 川田侑佳, 土屋友香, 新井りり香, 木村博一, 林由里子
4. THE ASSOCIATION BETWEEN SIRP $\alpha$ SIGNALING AND AGE-RELATED INFLAMMATORY RESPONSES IN HUMAN MONOCYTES	—	2024年12月	Faseb Science Research Conference	【概要】加齢に伴う免疫老化 (immunosenescence) では慢性炎症 (inflammaging) の亢進が問題となる。本研究では、末梢血単球におけるCD172a (SIRP $\alpha$ ) の発現をフローサイトメトリーで解析し、CD172aは特に非古典的単球で高く発現しCD172a <sup>+</sup> CD16 <sup>+</sup> 単球は高齢者で有意に増加しており、CD172aは加齢関連の慢性炎症やインフラマソーム形成に関与する可能性が示唆されることを報告した。 共著者：Yuriko Hayashi, <b>Ririka Arai</b> , Rino Watanabe, Etsumi Oike, Hiroshi Ohnishi

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 放射線学科 氏名 渡邊 浩

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
ERCPに使用される放射線防護具の改良研究—X線装置の荷重を考慮して（査読付）	共著	2025年3月	群馬パース大学紀要	X線診療室内の散乱線を低減するための防護クロスや防護スクリーンと呼ばれる防護具が利用されている。しかし、X線装置は開発・設計の段階で、防護具の重量の荷重がかかることを想定していない。したがって、X線装置の荷重を低減することも考慮すべきである。ERCPに使用される防護具の鉛当量別の線量低減効果の違いを明らかにするとともに、鉛当量と重量を勘案した防護具の改良を行った。現在、医用現場で汎用されている。0.175 mmPbと0.25 mmPbの防護具のそれぞれの線量低減率を初めて明らかにした。また、改良した防護具により、X線装置への荷重を減らすことができると同時に、従来よりも術者線量を低減できることが分かった。研究総括責任者。（渡邊 浩、新庄博斗、笠原脩平、入山拓斗、小見 翼、鈴木 格、竹澤綺梨、樋沢杏羽、小島美々子、浅田 光）

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
職業被ばく低減のための線量分布測定作業時間ならびに作業被ばく線量に関する研究	—	2024年12月	日本放射線技術学会関東支部合同研究発表大会2024（群馬）	エックス線診療室内の線量分布の線量分布測定法には、電離箱式サーベイメータを用いた方法（電離箱式サーベイメータ法）、クラフト紙製のポールと線量計を用いた方法（ポール法）ならびに半導体式サーベイセンサーを用いた方法（サーベイセンサー法）がある。これらの方法による作業時間ならびに作業被ばく線量に関する研究を行った。ポール法およびサーベイセンサー法は作業者の被ばく無しで室内線量分布測定を行うことができ、また、ポール法はサーベイセンサー法よりも短時間に室内線量分布を測定できることが分かった。研究総括責任者。（日向力也、大淵敦史、斎藤梨花、古田有沙、矢口優希、浅田 光、渡邊 浩）

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
ポール法における水晶体 等価線量換算係数の策定 研究	—	2024年12月	日本放射線技術学会関東 支部合同研究発表大会2024（群馬）	放射線業務に従事する前に放射線業務従事者の水晶体等価線量が推定できれば、高線量に至ってから防護眼鏡や水晶体専用線量計の着用を判断するのではなく、放射線業務従事前に着用の判断が可能になる。事前推定法としてポール法がある。しかし、ポール法は人体頭部表面に装着するのではなく、クラフト紙製の円柱形のポール上に貼り付けるため、実際の線量とは異なる可能性がある。ポール法測定値から水晶体等価線量換算係数を求めた。ポール法測定値に基づく水晶体等価線量換算係数は1.4～1.5であり、放射線業務従事者の水晶体等価線量を推定する精度を高めることができた。研究総括責任者。（大野 潤、絵面大輝、岸 遼河、堀込陸斗、浅田 光、渡邊 浩）
神経根ブロックにおける 照射野内の術者手指被ばく 線量の影響要因に関する 研究	—	2024年12月	日本放射線技術学会関東 支部合同研究発表大会2024（群馬）	神経根ブロックを想定し、X線照射野内による術者手指被ばく線量の要因別の評価を行った。管電圧と手指の高さで約2.67倍の線量差があること、管電圧による影響は大きく注意する意識が必要なこと、照射野内において術者手指は患者に近づけることで手指被ばくを低減できることならびに要因や影響度を評価し、術者手指被ばく線量低減のための教育が重要なことを示した。研究総括責任者。（浅田 光、渡邊 浩）

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 放射線学科 氏名 酒井 健一

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 放射線学科 氏名 西澤 徹

### 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
診療放射線技師 ブルーノート基礎編 5th edition	共著	2024年9月	メジカルビュー	分担執筆:佐藤英介 西澤徹 布施拓 小倉泉 細田正洋 小川雅之 福士政広 担当: (pp265～32pp) 放射線生物学

### 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

### その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概要
教育系研究で上位学位 (修士号)を取得	共著	2024年11月	日本放射線技師教育学会 論文誌 (32-39)	西澤 徹 島崎綾子 岩井譜憲 近年、診療放射線技師の領域においては、学修カリキュラムの評価や医療安全など、教育を主題とした研究が盛んに行われるようになってきている。しかしその一方で、研究発表の段階で止まり、論文文化にまで至らないケースが少ない現状がある。本稿では、こうした教育系研究を論文文化することの意義について解説するとともに、筆者自身の経験をもとに、当該テーマで学位を取得するための具体的なプロセスについて紹介している。

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 放射線学科 氏名 高橋 哲彦

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
-	-	-	-	-

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1 Verification of quantification of quantitative susceptibility mapping for estimating the amount of gadolinium deposited in the brain: a preliminary phantom study (脳内ガドリニウム沈着量推定のための定量的磁化率マッピングの定量化の検証：予備的ファントム研究) (査読付)	共著	令和6年11月 (2024年)	Applied Magnetic Resonance 2024, vol. 55, pp.1403-1419, 2024	脳内のガドリニウム沈着量を推定するための定量的磁化率マッピングQSMの定量性に関するファントムを使った予備的な研究に関する報告書である。(共同執筆のため担当部分抽出は不可能) (Yusuke Sato, Norio Hayashi, Tomokazu Takeuchi, <u>Tetsuhiko Takahashi</u> , Kouichi Ujita, Haruyuki Watanabe, Takayuki Suto, Yoshito Tsushima)
2 Comparison of qualitative and fully automated quantitative tools for classifying severity of white matter hyperintensity. (白質病変の重症度分類のための定性的ツールと全自動定量的ツールの比較) (査読付)	共著	令和6年8月 (2024年)	J stroke and cerebrovascular diseases, vol. 33, no. 8, 107772, 2024	白質病変の重症度評価を定性的な手法と全自動解析ツールを使った定量的手法で比較した研究に関する報告書である。(共同執筆のため担当部分抽出は不可能) (Ryuya Okawa, Norio Hayashi, <u>Tetsuhiko Takahashi</u> , Ryo Atarashi, Go Yasui, Ban Mihara)
3 Relationship between White Matter Hyperintensity Volume Analyzed from Fluid-Attenuated Inversion Recovery Using a Fully Automated Analysis Software and Cognitive Impairment. (全自動解析ソフトを用いて水抑制反転回復法から解析した白質高強度体積と認知機能障害との関係) (査読付)	共著	令和7年3月 (2025年)	Dementia and geriatric cognitive disorders 1-13 2025	白質病変WMHは認知機能障害と関連しているが、WMHの臨床的意義は不明なままである。本論文は、WMH体積の臨床的意義を明らかにし、WMHの完全自動定量分析が認知機能の有効なマーカーとなるかどうかを明らかにすることを目的とした。多重比較検定により、分類された診断結果の全群間でWMH容積に有意差が認められた。FLAIR画像からのWMH容積の定量的解析は、認知症治療に有用な情報を提供し、認知機能検査における新たなマーカーとして有効である可能性がある結論した。(共同執筆のため担当部分抽出は不可能) (Ryuya Okawa, Norio Hayashi, <u>Tetsuhiko Takahashi</u> , Go Yasui, Ban Mihara)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
国際会議論文 1 Correlation between quantitative software analysis-based white matter hyperintensity volume on FLAIR image and cognitive impairment (定量的ソフトウェア解析に基づくFLAIR画像上の白質高強度体積と認知障害との相関性)	-	令和6年5月(2024年)	ISMRM & ISMRT Annual Meeting & Exhibition, May 2024, Singapore	白質高信号領域を自動抽出し体積を計算する定量的ソフトウェアを用いて体積と認知障害との相関性を調べた研究について発表した。(共同執筆のため担当部分抽出は不可能) (Ryuuya Okawa, Norio Hayashi, Go Yasui, Ban Mihara, <u>Tetsuhiko Takahashi</u> , Ryo Atarashi)
学会論文(講演) 1 異なる磁場強度におけるヒトの脳のQSM値の比較	-	令和6年4月	第80回日本放射線技術学会総会学術大会、2024年4月、横浜	3Tと1.5Tで実施したヒト脳の定量的磁化率マッピングを比較検証した。脳幹のQSM値は磁場強度が異なっても強い相関があることについて発表した。研究責任者(橋本真衣子, <u>高橋哲彦</u> , 駒萌乃, 高橋雅彦, 林則夫)
2 定量的磁化率マッピング(QSM)の多施設比較に関する研究	-	令和6年4月	第80回日本放射線技術学会総会学術大会、2024年4月、横浜	3Tと1.5Tを含む3施設で実施したヒト脳の定量的磁化率マップを比較検証した。脳幹のQSM値は施設が異なっても再現性が高かったことについて発表した。研究責任者( <u>高橋哲彦</u> , 藤生敦哉, 橋本真衣子, 高橋雅彦, 林則夫, 佐藤有将, 竹内友一, 氏田浩一, 大川竜也, 駒萌乃, 丁嵐亮)
1. 定量的磁化率マップQSMの多施設比較試験	-	令和7年3月	令和6年度(第12回)群馬県地域保健研究発表会、前橋(紙上発表冊子pp. 35-36)	1.5T MRI装置3台と3TMRI装置3台、計6台の装置でQSMを取得した。大脳基底核を含む6部位のQSM値は3Tの先行研究と矛盾しなかった。また装置間のQSMとの相関は静磁場強度に依らず0.88以上と高かった。研究責任者。(高橋哲彦, 高橋雅彦, 藤生敦哉)

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 放射線学科

氏名

加藤英樹

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
なし				

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
9 視線検索パターンを用いた乳房における腫瘤状陰影の領域抽出(査読付)	共著	2024年5月	日本放射線技術学会誌, Vol180 No. 5 (2024) pp487-498	奥村英一郎、加藤英樹、本元強、鈴木信忠、奥村恵理香、東川拓治、安藤二郎、石田隆行 視線計測装置を用いてマンモグラフィ読影中の視線検索パターンを取得・解析し、腫瘤状陰影の自動領域抽出に応用する手法を提案した。読影者の視線情報から得られる注視点の空間分布を視線ヒートマップとして可視化し、視線の集中領域を病変候補として抽出するアルゴリズムを構築した。さらに、抽出精度の検証には実際の乳がん画像と病理診断結果を用い、従来手法との比較により本手法の有効性を確認した。読影者の認知的プロセスを反映した視線情報の利用により、画像診断支援における新たなアプローチとして、腫瘤検出の高精度化および読影効率の向上が期待される。(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能)

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
77 Can the generative artificial intelligence pass the national examination for the Radiological Technologist? : A Comparison of Japan and Korea	共著	2024年6月	2024年度関東甲信越診療放射線技師学術大会(宇都宮市)抄録集	Hideki Kato, Sho Maruyama, Masayuki Shimosegawa, Yeji Kim, Yongsu Yoon インターナショナルセッションにおいて口述発表した。 生成AIを用いて、政府が公開している過去の国家試験問題について、5年間分を対象に正答率を求めた。生成AIの回答は、日本及び韓国において、合格基準を超えた。
78 生成AIは放射線技師国家試験に合格できるのか：東アジア3か国の比較	共著	2024年10月	第1回日本放射線医療技術学術大会(那覇市)抄録集 日本放射線技術学会雑誌 巻：80号 Supplement ページ：S290 発行年：2024年10月	加藤英樹、丸山 星、下瀬川正幸、Chiung-Wen Kuo, Yeji Kim, Yongsu Yoon 日本、韓国、台湾の診療放射線技師国家試験について、生成AIを用いて過去5年間分を対象に正答率を求めた。生成AIの回答は、3か国において合格基準を超えた。

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 放射線学科 氏名 茂木 俊一

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Deep Learning Reconstruction併用VIBE法とVIBE法のコントラストにおける評価	-	2024年9月	第52回日本磁気共鳴医学会大会	全身MRI撮像におけるDeep learning Reconstruction (DLR) の導入で、呼吸停止下での短時間撮像が可能となった。本撮像法における画質・コントラスト、および病変の検出能について、物理評価及び視覚評価の検討を行った。持木 瑞規、茂木 俊一、丸山 克也、Nickel Dominik、堀越 浩幸
GRE法 整理整頓	-	2025年2月	第10回関東Pianissimo 教室	(特別講演) MRIの2大基本撮像法の1つであるgradient echo (GRE)法について、原理・基礎から臨床的応用法までフレッシューズを対象に解説を行った。

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 放射線学科 氏名 渡邊 城大

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
特記なし				

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
特記なし				

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
科研費研究分担者として追加された  CanonMRIアドバイザーボードミーティング:web  CanonMRIアドバイザーボードミーティング:大阪  東京都立大学共同研究員				研究課題：重度変形性膝関節症の関節変形を反映した筋骨格モデル開発と有限要素法による動作解析  全国研究会にて関東代表として司会をした  全国研究会にて関東代表として司会をした  有限要素解析の学外研究員として共同研究している

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 放射線学科 氏名 山崎 真

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
診療放射線技師の業務拡大に対する学生の意識調査 （査読付）	共著	2024年12月	診療放射線学教育学 (12), pp17-22	業務拡大での大きな変更点である静脈路確保についてはネガティブな意識を持つ学生が多かった。業務拡大に対する学生の意識に統一感がないことは今後の診療放射線技師の教育への問題点である。大学入学前から診療放射線技師の業務内容が拡大され、より侵襲的な行為も行う必要性の啓発や入学後、特に1年生において早期に学生自身に診療放射線技師育成のカリキュラムがどのように構成されているのか、を認識させる機会が必要であると結論付けた。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共著者：山崎真, 香山郁海

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 医療技術学部  
放射線学科

氏名

星野洋満

## 著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

## 学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
複合現実装置を用いた患者への放射性医薬品誤投与防止のための患者-放射性医薬品照合システムの開発-複合現実装置搭載カメラで取得した映像を基にした深層学習モデルの開発- (査読付)	共著	令和7年3月15日	RADIOISOTOPES, 74, 25-37 (2025)	佐藤充, 星野洋満, 清水正挙, 大崎洋充, 小倉敏裕, 市川翔太, 近藤達也, 岡本昌士  カメラのキャプチャ画像を深層学習モデルでリアルタイムに解析し診療放射線技師が手にとった放射性医薬品の種類を推定し, 複合現実装置によってホログラム表示するシステムを考案した. 3種類の深層学習モデルを使用し 10 分割交差検証を実施した. 全モデルで 99% を超える精度となった. 複合現実装置搭載カメラから取得された映像を基にした放射性医薬品の誤投与防止のための深層学習モデルが開発された. また, 今後は Hololens2 (Microsoft (株)) を用いた複合現実装置の活用により, 近い将来, 視野内で薬剤を持つのみで放射性医薬品容器を分類し, 誤投与を予防する可能性はある. 「協同研究のため担当部分抽出不可能」

## その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 放射線学科

氏名

土田 拓治

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Patient radiation exposure dose reduction using stent-enhanced image processing in percutaneous coronary intervention (PCI 施術時のステント強調処理による患者被ばく線量低減効果) (査読あり)	共著	2024/4/1	Radiological Physics and Technology 17, P433-440	経皮的冠動脈インターベンション (PCI) 中の患者放射線被ばく線量をステント強調処理によって低減について検討した。通常のデジタル血管造影よりも、20%、40%、60%の線量低減 (SV20、SV40、SV60) のステント強調画像のコントラスト (IC) を評価した。平均オピニオンスコア (MOS) を用いて粒状性とステント形状を視覚的に評価した結果、ステント強調処理によりステント画像の視認性が向上し、ステント確認撮影中の放射線被ばくを約40%低減できることを示唆した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者: Kazuya Mori, Toru Negishi, Ryou Sekiguchi, Takuji Tsuchida
画像類似度を用いた自動マンモグラフィ乳房構成判定ソフトの開発 (査読あり)	共著	2024/6/1	日本放射線技術学会誌 80(6):616-625	本研究は、画像類似度を指標とした自動マンモグラフィ乳房構成判定ソフトウェアを開発した。四つの乳房構成に分類した画像データベース (右内外斜位方向 [mediolateral oblique: MLO] 症例240枚) と、評価対象症例 (両側MLO症例741枚) をイメージマッチングした。画像間の類似度として正規化相互相関を使用した。使用したすべての画像は、あらかじめ主観的評価によって乳房構成カテゴリーに分類された結果を正解とした。画像データベース内で最大正規化相互相関値を示した症例の乳房構成と、主観的乳房構成分類結果との一致率、Cohenの重み付けkappa係数について評価した。また、各乳房構成間で最大正規化相互相関値が同じ場合、撮影乳房厚30 mm未満は脂肪性側に分類するようにした。その結果、主観的乳房構成分類との一致率は78.5%、重み付けkappa係数は0.98であった。当ソフトウェアは、主観的乳房構成分類結果との一致率も高く、廉価なコンピュータシステムでも解析可能なソフトウェアである。 (実験の遂行、全体の考察、執筆を担当) (筆頭論文) 共著者: 土田 拓治, 根岸 徹, 高橋 将斗, 森一也, 西村 竜子

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 放射線学科 氏名 今尾 仁

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
14 A Prospective Study of Muscle Stiffness Using Ultrasound Shear Wave Elastography in the Biceps Brachii of Patients with Parkinson's Disease (パーキンソン病患者の上腕二頭筋における剪断波エラストグラフィを用いた筋硬直性の検討) (査読付)	共著	2024年6月12日	Journal of JART 2024. 6. pp. 29-36	パーキンソン病患者の上腕二頭筋における超音波剪断弾性波を用いたSWEと、パーキンソン病統一評価スケール (MDS-UPDRS) の関係はあきらかではない。本研究では有意肢のSWEの値より得られた閾値により、上肢の筋強剛1～3の評価点を判別できる可能性を示唆した。(研究計画, 統計解析, 構成, 考察などを担当した) 共著者: 小林悟士, 笠井健治, 矢部仁, 今尾仁, 橋本祐二, 市川忠
15 ALPS処理水海洋放出による食物への影響およびその接種による影響の検討 (査読付)	共著	2024年12月	日本医療科学大学研究紀要 (第17号) pp. 23-29	東京電力によるALPS処理水の海洋放出により近海の水産物の接種による人体の内部被ばくに対する懸念に対して、水産物や身近な食品の放射能測定を行いALPS処理水の影響について検討した。γ線スペクトルによりALPS処理水に含まれるγ線放出核種は検出されなかった。(構成, 考察などを担当した) 共著者: 松山輝, 山本絵夢, 延澤忠真, , , 今尾仁, 桑山潤

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
45 東京都診療放射線技師会会員における施設別給与実態調査	共著	2024年5月1日	東京放射線 2024. 5, vol. 71/No. 827, p. 9-23	東京都内の医療機関を対象に診療放射線技師の給与・手当における新型コロナウイルス感染症や物価高, 医師のタスク・シェア/シフトの影響について, アンケート調査を実施し報告した。(立案, 研究計画, 調査, 統計解析, 考察を担当した) 共同研究者: 緒方達哉, 今尾仁, 江田哲男, 斉藤政治, 飯島文洋, 磯崎拓巳, 城尾俊
46 医療被ばく関係法規実態調査	共著	2025年3月1日	東京放射線 2025. 3, vol. 72/No. 836, p. 10-23	東京都内の医療機関を対象に線量管理方法, 診断参考レベルの比較・見直しなどについてアンケート調査を実施し報告した。(立案, 研究計画, 調査, 統計解析, 考察を担当した) 共同研究者: 菊池悟, 今尾仁, 斉藤政治, 緒方達也, 磯崎拓巳, 城尾俊

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 放射線学科 氏名 島崎綾子

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
教育系研究で上級学位（修士号）を取得	共著	2024年11月	日本放射線技師教育学会論文誌, Vol. 14 (1), 32-39	<p>診療放射線技師における教育系研究の重要性と上級学位取得の可能性に着目し、著者自身の経験をもとに、研究計画書の作成や大学院受験の実際、学位取得までのプロセスを紹介した。教育系研究を通じた修士・博士課程の進学支援を目的とし、診療放射線技師領域における教育研究の発展と教育人材の育成に寄与する内容である。</p> <p>本人担当部分：全体の考察 西澤徹、島崎綾子、岩井譜憲</p>

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
画像診断報告書の準緊急所見の発生と診療への影響	—	2024年11月	第19回医療の質・安全学会学術集会、横浜市	<p>画像診断検査で偶発的に発見された準緊急所見が診療に与える影響を検討するため、大学病院で2020年4-9月(半年間)に発行された報告書を後方視的に評価した。準緊急フラグが付与された検査は520検査であり、モダリティ別ではCTに最も多く、新たな悪性腫瘍や既知の悪性腫瘍の進行が多かった。新たな悪性腫瘍のうち41件で診断が確定し、放射線治療計画CTでは悪性腫瘍の予想外の進展が3例で発見されており、特に診療への影響が示唆される。入院時胸部単純Xp写真でも少なからず準緊急所見の指摘があり、注意が必要であることが示唆された。</p> <p>本人担当部分：研究計画の立案、データの分析、全体の考察 島崎綾子、勝又奈津美、高橋綾子、平澤裕美、福島康宏、中里智子、大石裕子、田中和美、対馬義人</p>

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 放射線学科

氏名

後藤 大輝

## 著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

## 学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

## その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 臨床工学科 氏名 大瀨和也

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
42 特集『在宅透析』：患者教育	単著	2024年4月	「腎と透析」96巻4号 東京医学社	昨今、見直されつつある血液透析の形として、在宅血液透析患者の導入施設での教育について検討した。特にチーム医療を前提とした臨床工学技士の役割も大きい。著者：大瀨和也（査読付）

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Long-term survival of patients receiving home hemodialysis with self-punctured arteriovenous access. (自己穿刺動静脈アクセスによる在宅血液透析を受けている患者の長期生存。)	共著	2024年5月	PLoS one. 2024;19(5):e0303055. pii: e0303055.	自己穿刺動静脈アクセスによる在宅血液透析（HHD）患者の長期生存を明らかにする。著者：友利浩司、井上勉、杉山正雄、大橋直人、村杉浩、大瀨和也、天野宏明、渡辺裕介、岡田浩一、
Usefulness of Hot Shot Intermittent Infusion Online Hemodiafiltration Plus Far-Infrared Therapy for Dialysis Patients with Lower Extremity Arterial Disease: A case report. (下肢動脈疾患を有する透析患者に対するホットショット間欠注入オンライン血液透析濾過プラス遠赤外線療法の有用性：症例報告)	共著	2024年11月	Renal Replacement Therapy.	症例は41歳男性で、LEAD透析患者で、I-OHDF+FIRからHS I-OHDF+FIRに切り替え前には下肢潰瘍の悪化がみられた。切り替え前と切り替え後の下肢血流量、PRR、創傷治癒度、自覚症状の経時的変化を比較した。HS I-OHDF+FIRではI-OHDF+FIR時と比べ下肢血流量とPRRが顕著に増加した。HS I-OHDF+FIR施行中は下肢創傷が経時的に改善し、6か月後には完全に治癒した。VASによる評価では、倦怠感、疼痛、冷え、不眠のいずれも改善し、自覚症状も改善したと報告している。HS I-OHDFとFIRの併用が創傷治癒を促進する有効性のメカニズムは不明ですが、間欠注入液の温度変化が真毛細血管の血流増加をもたらし、FIRの非温熱効果がより末梢の血管に伝播したのではないかと推測しています。共著：斎藤 慎、神宮 博臣、大山 雄介、田中 俊之、大瀨 和也、

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
よくわかるセミナー8 講師：陣内彦博	—	2024年4月	第50回日本血液浄化技術学会	よくわかるセミナー8『在宅血液透析について』 司会：大瀨和也
第69回日本透析医学会学術大会	—	2024年5月	セッション：座長	一般演題7血液浄化、座長：大瀨和也
第40回日本医工学治療学会ランチョンセミナー	—	2024年5月	第40回日本医工学治療学会	ランチョンセミナー演者：森實篤史 司会：大瀨和也
第4回関東甲信越臨床工学会シンポジウム	—	2024年9月	関東甲信越臨床工学会	シンポジスト
在宅血液透析における臨床工学技士の関わり	—	2024年11月	一般社団法人日本在宅血液透析学会	座長・演者：在宅血液透析（HHD）はチームの中の一員として特に臨床工学技士には透析液の管理を行うことから点検管理等について報告した。

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 臨床工学科

氏名

木村 博一

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
1. Phylogenomics : Foundations, Methods, and Pathogen Analysis (ゲノム系統学：基礎、方法および病原体解析)	共著	令和6年5月	Academic Press	Academic Press, 全612頁, Mokrousov Igor (Editor)/ Shitikov Egor (Editor) 19. Respiratory syncytial viruses (急性呼吸器感染症) 共著者 : Sada M, Shirai T, <u>Kimura H.</u> (pp.443-461)

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 新たに開発したリン酸・硫酸マグネシウム含有酸性エタノール製剤の各種ウイルスに対する不活化効果 (査読付)	共著	令和6年8月	感染制御と予防衛生 Vol.8, No.1 pp.60-67	非エンベロープウイルスHuNoV, HuRoVならびにHuAdVとエンベロープウイルスFluに対し、新たに開発したリン酸・硫酸マグネシウム含有酸性エタノール製剤(製剤A)を中心に不活化効果を検証した。その結果、製剤Aは、いずれのウイルスに対しても高い不活化効果を示した。(主要実験および論文執筆の一部を担当) 共著者：平石依里, 山上萌, 尾崎恵太, 赤阪天平, <u>木村博一</u>
2. Molecular Evolutionary Analyses of the Fusion Genes in Human Parainfluenza Virus Type 4. Microorganisms. (ヒトパラインフルエンザウイルス4型における膜融合遺伝子の分子進化的解析) (査読付)	共著	令和6年8月	Microorganisms Vol.12, No.8 pp.1633	ヒトパラインフルエンザウイルス4型(HPIV4)は、4aと4bの2つの異なるサブタイプに分類できる。1966年から2022年の間に収集された48のHPIV4株の融合遺伝子(F遺伝子)の全長を解析した。系統樹は、2つのサブタイプの最初の分割が1823年頃に起こり、各タイプの最新の共通祖先である4aと4bがそれぞれ1940年と1939年頃まで存在していたことを示した。(研究企画, 責任者として論文執筆) 共著者 : Mizukoshi F, <u>Kimura H.</u> , Sugimoto S, Kimura R, Nagasawa N, Hayashi Y, Hashimoto K, Hosoya M, Shirato K, Ryo A.
3. Molecular Evolutionary Analyses of Shiga toxin type 2 subunit A Gene in the Enterohemorrhagic Escherichia coli (EHEC). (腸管出血性大腸菌(EHEC)における志賀毒素2型サブユニットA遺伝子の分子進化的解析) (査読付)	共著	令和6年9月	Microorganisms Vol.12, No.9 pp.1812.	志賀毒素2型サブユニットA遺伝子(stx2A遺伝子)の分子遺伝学をより深く理解するために、stx2A遺伝子の多くのサブタイプを収集し、遺伝子の詳細な分子進化的解析を行った。(研究企画, 責任者として論文執筆) 共著者 : Kimura R, <u>Kimura H.</u> , Shirai T, Hayashi Y, Sato-Fujimoto Y, Kamitani W, Ryo A, Tomita H.
4. MARCH8 Restricts RSV Replication by Promoting Cellular Apoptosis Through Ubiquitin-Mediated Proteolysis of Viral SH Protein. Viruses. (ウイルスの低分子疎水性(SH)タンパク質を選択的に分解することにより、呼吸器合胞体ウイルス(RSV)の複製を制限するメカニズムの解明) (査読付)	共著	令和6年12月	Viruses Vol.16, No.12 pp.1935	MARCH8がウイルスの低分子疎水性(SH)タンパク質を選択的に分解することにより、呼吸器合胞体ウイルス(RSV)の複製を制限するメカニズムを解明した。本研究は宿主制限因子とウイルス回避戦略の間の相互作用に関する新たな洞察を提供し、RSV感染症の新しい治療アプローチを提供する可能性がある。(主要実験および論文執筆の一部を担当) 共著者 : Okura T, Takahashi T, Kameya T, Mizukoshi F, Nakai Y, Kakizaki M, Nishi M, Otsuki N, <u>Kimura H.</u> , Miyakawa K, Shirato K, Kamitani W and Ryo A

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
5. Molecular Evolutionary Analyses of the RNA-Dependent RNA Polymerase (RdRp) Region and VP1 Gene in Sapovirus GI.1 and GI.2. (サポウイルスGI.1およびGI.2におけるRNA依存性RNAポリメラーゼ(RdRp)領域およびVP1遺伝子の分子進化的解析) (査読付)	共著	令和7年1月	Microorganisms Vol.13, No.2 pp.322	本研究は、1976年から2020年までのHuSaV GI.1およびGI.2遺伝子型のRNA依存性RNAポリメラーゼ(RdRp)およびキャプシド(VP1)遺伝子の進化的ダイナミクスを分析することを目的としている。(主要実験および論文執筆の一部を担当) 共著者：Mizukoshi F, Kimura R, Shirai T, Hirata-Saito, A, Hiraishi E, Murakami K, Doan Y. H, Tsukagoshi Saruki N, Tsugawa T, Kidera K, Suzuki Y, Sakon N, Katayama K, Kageyama Ryo, A, <u>Kimura H.</u>
6. In Vitro Differential Virucidal Efficacy of Alcohol-Based Disinfectants Against Human Norovirus and Its Surrogates. (ヒトノロウイルスおよびその代理物に対するアルコール系消毒剤の殺菌効果の差次) (査読付)	共著	令和7年1月	Microorganisms Vol.13, No.2 pp.368	ヒトノロウイルス(HuNoV)は、食中毒の主要な原因物質であり、急性ウイルス性胃腸炎を引き起こす。この研究は、細胞培養感染性アッセイを使用して、マウスノロウイルスおよびネコカリシウイルスのHuNoVおよびその代理物に対するアルコールベースの消毒剤の殺ウイルス効果を比較することを目的とした。さらに、代理ウイルスに対する殺ウイルス効果の結果から、HuNoVに対する殺ウイルス効果を推定することの有効性を評価した。(主要実験および論文執筆の一部を担当) 共著者：Hiraishi E, Ozaki K, Yamakami M, Akasaka T, <u>Kimura H.</u>
7. Phylogenomic Analyses of the Hemagglutinin-Neuraminidase (HN) Gene in Human Parainfluenza Virus Type 4 Isolates in Japan. (日本におけるヒトパラインフルエンザウイルス4型分離株におけるヘマグルチニン-ノイラミニダーゼ(HN)遺伝子の系統ゲノム解析) (査読付)	共著	令和7年1月	Microorganisms Vol.13, No.2 pp.384	ヒトパラインフルエンザウイルス4型(HPIV4)におけるヘマグルチニン-ノイラミニダーゼ(HN)遺伝子とHNタンパク質の系統ゲノミクスをより深く理解するために、さまざまなバイオインフォマティクス手法を用いて系統解析を行った。(主要実験および論文執筆の一部を担当) 共著者：Otani K, Kimura R, Nagasawa N, Hayashi Y, Ohmiya S, Watanabe O, Irona Khandaker <u>Kimura H</u> and Nishimura H.
8. Molecular Evolution of the Fusion (F) Genes in Human Parainfluenza Virus Type 2. (ヒトパラインフルエンザウイルス2型における融合(F)遺伝子の分子進化) (査読付)	共著	令和7年2月	Microorganisms Vol.13, No.2 pp.399	数十年にわたる地理的地域にわたる包括的なデータセットを使用して、HPIV2融合(F)遺伝子の進化ダイナミクス、系統ダイナミクス、および構造特性を調査した。(主要実験および論文執筆の一部を担当) 共著者：Shirai T, Mizukoshi F, Kimura R, Matsuoka R, Sada M, Shirato K, Ishii H, Ryo A and <u>Kimura H.</u>
9. Identification of Putative Serum Autoantibodies Associated with Post-Acute Sequelae of COVID-19 via Comprehensive Protein Array Analysis. (包括的なタンパク質アレイ解析によるCOVID-19の急性後遺症に関連する推定血清自己抗体の同定) (査読付)	共著	令和7年2月	Int J Mol Sci Vol.26, No.4 pp.1751	本研究では、タンパク質ビーズアレイシステムを用いた包括的な自己抗体プロファイリングにより、これまで検出されていなかったSARS-CoV-2感染(PASC)のバイオマーカーを同定した。(主要実験および論文執筆の一部を担当) 共著者：Hatayama Y, Miyakawa K, Kimura Y, Horikawa K, Hirahata K, <u>Kimura H.</u> , Kato H, Goto A and Ryo A

## その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
1. 学校で流行しやすい感染症. (査読付)	共著	令和6年8月	感染制御と予防衛生 Vol.8, No.1 pp.23-33	学校で流行しやすい主な感染症の疫学、検査診断・治療法ならびに予防法を概説した。学校内で感染拡大しやすい感染症は、おもに飛沫感染と接触感染である。また、COVID-19 出現後、種々の感染症の動向においては変化がみられている。よって、学校現場においては、標準予防策の徹底や病原体の性質に応じた臨機応変の対策が必須となる。(責任著者として、研究企画・論文執筆を行った) 共著者：林由里子, 藤本友香, 木村龍介, 長澤紀佳, 宮下知也, 近土真由美, 木村博一

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2. Reinfection Mechanisms of Various Viruses and Their Societal Implications. (各種ウイルスの再感染メカニズムとその社会的意義) (査読付)	共著	令和7年2月	Dis Biol Genet Socioecol Vol.1, No.1 pp.4	麻疹ウイルスやインフルエンザウイルスなど、各種ウイルスの再感染メカニズムを理解することで社会的意義に繋げていくことを目的とした。(責任著者として、主要実験および論文執筆を担当) 共著者：Kimura R, Hayashi Y, Sato-Fujimoto Y, Miyakawa K, Shirato K, Nagasawa K, Mizukoshi F, Tsugawa T, Ryo A and <u>Kimura H.</u>
3. 呼吸器ウイルスを中心とした再感染の機序. (査読付)	共著	令和7年3月	臨床免疫・アレルギー科 Vol.83, No.3 pp.266-272.	多くの呼吸器ウイルス感染症においては、再感染することもよく知られているが、その一方麻疹のような再感染がみられないウイルス感染症もある。本稿においては、呼吸器ウイルスを中心としたウイルス抗原蛋白の進化と再感染の機序に関して概説した。(責任著者として、研究企画・論文執筆を行った) 共著者：木村博一, 木村龍介, 長澤紀佳, 林由里子, 長澤耕男, 水越文徳, 梁明秀

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 臨床工学科 氏名 花田 三四郎

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Origins and Molecular Mechanisms Underlying Renal Vascular Development (腎臓の血管発生の起源と分子メカニズムについて) (査読付)	共著	2024年4月	Kidney360	腎発生過程では、腎機能を獲得するための、最適な血管形成が求められるが、血管構成細胞の起源と発生メカニズムには、いくつかの仮説が提唱されているが不明な点が多い。本論文は、腎臓の血管発生に関する分子的な知見を広く解説し、iPS細胞由来の腎オルガノイドといった最新の研究において腎機能の核をなす糸球体血管形成における血流による意義などについて述べている。 (論文内容に関する検討及び執筆の一部を担当) Y. Nishimura, S. Hanada

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
生体现象の再現を目指した血管灌流モデルの開発	共著	2024年4月	生体医歯工学共同研究拠点成果報告書 2023	安定な流れの付与が可能なオンチップ三次元血管デバイスを作成し、流れによる血管安定化の再現を示した。(研究全般に従事) 花田 三四郎、梨本裕司、西山功一
生体现象の再現を目指した血管灌流モデルの開発	-	2025年3月	2024年度生体医歯工学共同研究拠点成果報告会、東京科学大学 すすかけ台キャンパス	流れの付与が可能なオンチップ三次元血管デバイスを用い、腫瘍モデルの血行性転移を再現した。(研究全般に従事) 花田 三四郎、梨本裕司、西山功一

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 臨床工学科

氏名

松岡 雄一郎

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
消化管内設置型RFコイルの共振特性の遠隔自動制御方法に関する研究	-	2024年8月	2024年度 群馬バース大学附属研究所研究成果報告会	松岡雄一郎 消化管内に挿入、設置して、体の内側からMR撮像するためのRFコイルの共振特性をMR撮像直前に遠隔で自動的に最適化する回路構成に関する研究を進めている。RFコイルを体内に設置すると、共振特性が変化するため得られる画像の画質低下が問題となっており、その要因と共振特性の自動制御条件を電磁界シミュレーションにより調べ、共振回路構成素子であるコンデンサに要求される静電容量の可変範囲が示された。
コイル開発の歴史とその先端技術、RF coil development and advanced techniques	-	2024年9月	第52回 日本磁気共鳴医学会大会	教育講演（松岡雄一郎） MR装置のRFコイル開発の歴史や最新技術に関して講演を行った。

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 臨床工学科 氏名 近土真由美

### 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

### 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
18. 「学校で流行しやすい感染症」（査読付）	共著	2024年8月	感染制御と予防衛生 vol. 8 No. 1	<p>学校で集団発生しやすい感染症（インフルエンザ、COVID-19、手足口病など）について、法制度に基づく対応基準とともに、疫学、診断法、予防策、治療の現状を概説するものである。とくにCOVID-19パンデミック以降の感染症流行動向の変化に焦点を当て、学校現場における感染対策の実践的指針を提示した。</p> <p>（共同研究につき、本人担当部分抽出不可能）</p> <p>共著者：林 由里子，藤本 友香，木村 龍介，長澤 紀佳，宮下 知也，近土 真由美，木村 博一</p>

### その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 臨床工学科

氏名

島崎直也

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
24. Optimization of various parameters of venous air trap chambers using computational fluid dynamics analysis (数値流体力学解析を用いた静脈側エアトラップチャンバの各種パラメータの最適化に関する検討)	-	2024年10月	18th TOIN International Symposium on Biomedical Engineering	静脈側エアトラップチャンバ内での血液凝固に関する設計要素を明らかにするため、血液流入口角度 $\theta$ およびチャンバ全長 $L$ が内部流れに与える影響をCFD解析で理論的に検証した。その結果、 $L$ が長くなると旋回流が乱れ、 $\theta$ が大きくなると流れが停滞する傾向が確認され、これらの設計因子が血液凝固に与える影響を定量的に評価できる可能性が示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：島崎直也、中根紀章、石垣秀記、奥知子、本橋由香、山内 忍、佐藤敏夫
25. エアトラップチャンバ内の血液凝固抑制効果を有する旋回流チャンバの提案	-	2024年11月	第62回日本人工臓器学会大会	チャンバ内での血液凝固を抑制するため、チャンバの長さ $L$ と流入口角度 $\theta$ が凝固完了時間(TCOAG)に与える影響をブタ血液を用いて検証した。さらに、内部に旋回流を発生させる独自のチャンバヘッド(羽根6枚)を設計・試作し、数値解析および実験でその効果を評価した。その結果、 $L$ が短いほど、また $\theta$ が $15^\circ$ のときにTCOAGが延長し、旋回流チャンバでは市販品より有意に凝固抑制効果が高いことが示された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：半田寛明、石垣秀記、須賀 拓、島崎直也、奥知子、本橋由香、山内 忍、佐藤敏夫

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 臨床工学科 氏名

齋藤 慎

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
1. Clinical Engineering Vol. 35 No. 5	共著	2024年5月	学研メディカル秀潤社	透析液供給装置の基礎について解説した。 共著者：浦邊俊一郎、齋藤慎、加藤基子、五十嵐一生、岡本裕美、宮本照彦、大谷浩一、安部貴之

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. パネルディスカッション14論文執筆にチャレンジしてみよう！総括と展望	共著	2024年10月	日本臨床工学会誌 No. 83 2024 pp. 59-61	論文の執筆方法や書くためのポイント、統計手法及び、英語論文の執筆方法について解説した。 (研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) (筆頭論文) 著者：齋藤慎、三木隆弘
2. 研究をはじめよう	共著	2024年10月	日本血液浄化技術学会誌 No. 32, No. 1 2024 pp. 105-106	臨床研究の計画の立て方や統計処理、倫理について解説した。 (研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) (筆頭論文) 著者：齋藤慎、今田寛人
2. 日本の透析と海外の透析ー違いから考えるより良い透析ー	共著	2024年10月	日本血液浄化技術学会誌 No. 32, No. 1 2024 pp. 123-124	日本の透析と海外の透析の違いからより良い透析を考えることを目的として、透析液、HDF、サルコペニア/フレイル、透析膜、透析条件について解説した。 (研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) (筆頭論文) 著者：安藤勝信、齋藤慎
4. Usefulness of Hot Shot Intermittent Infusion Online Hemodiafiltration Plus Far-Infrared Therapy for Dialysis Patients with Lower Extremity Arterial Disease: A case report	共著	2024年11月	Renal Replacement Therapy	The patient was a 41-year-old male dialysis patient with LEAD who showed worsening of the ulcers in the lower extremity before he was switched from I-OHDF plus FIR to HS I-OHDF plus FIR; we compared the changes in the lower extremity blood flow, PRR, degree of wound healing, and subjective symptoms over time after the switch to HS I-OHDF plus FIR as compared with the values prior to the switching. As compared with the values during I-OHDF plus FIR, the lower extremity blood flow and PRR increased markedly during HS I-OHDF plus FIR. The wounds in the lower extremity improved over time during HS I-OHDF plus FIR and complete healing after six months; evaluation by VASs showed improved scores for all of fatigue, pain, coldness, and insomnia, and the patient reported improved subjective symptoms. The mechanism underlying the effectiveness of HS I-OHDF plus FIR in promoting wound healing is unknown, however, we speculated that the temperature change in the intermittent infusion solution resulted in increased blood flow in the true capillaries and transfer of the nonthermal effects of FIR to more peripheral vessels (研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) Makoto Saito, Hiroomi Jingu, Yusuke Oyama, Toshiyuki Tanaka, Kazuya Ohama.

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. ワークショップ 2 末梢動脈疾患の最新医工学	—	2024年5月	第40回日本医工学治療学会	シンポジスト（齋藤慎）
2. ワークショップ10 レーザ血流計の活用方法	—	2024年6月	第69回日本透析医学会学術集会・総会	シンポジスト（齋藤慎）
3. シャントエコー評価・エコー下穿刺セミナー	—	2024年6月	第22回群馬県臨床工学技士会学術大会	講師（齋藤慎）
4. リサーチクエストを探そう①	—	2024年7月	第3回研究スキルアップセミナー	講師（齋藤慎）
5. ワークショップ 2 レーザ血流計の活用方法	—	2024年8月	第9回モニタリング技術研究会	シンポジスト（齋藤慎）
6. ランチョンセミナー フィラピーの臨床効果と作用機序	—	2024年9月	第4回関東甲信越臨床工学学会	講師（齋藤慎）

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 臨床工学科 氏名 西村裕介

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Revolutionizing renal research: The future of kidney-on-a-chip in biotechnology (腎臓研究に革命を起こす: バイオテクノロジーにおけるkidney-on-a-chipの未来) (査読付)	単著	2024年6月	Regenerative therapy	生体模倣システムは、腎臓のin vitroモデルとして機能させる取り組みが進められている。これらのシステムは、生理学的な培養環境を再現することを目指している。総説では、糸球体と尿細管を焦点とした腎臓のin vitroモデルとしてのkidney-on-a-chipの研究を概説し、さらに将来の展望についても議論している。 著者: <u>Nishimura Y*</u>
Origins and molecular mechanisms underlying renal vascular development (腎血管発生の起源と分子機構) (査読付)	共著	2024年11月	Kidney360	腎臓の血管発達に焦点を当て、腎血管系の起源と形成、およびそれに関与する重要な分子についての現在の理解を要約する。腎血管の発達を支配する細胞および分子メカニズムを解明することにより、腎再生医学の進歩を促し、腎疾患に対処するための治療的介入の可能性を提供することを目的としている。 著者: <u>Nishimura Y*</u> , Hanada S.

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 臨床工学科

氏名

宮川浩之

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
なし				

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
なし				

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
なし				

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 臨床工学科 氏名 丸下 洋一

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Increase in wall shear stress in a narrowed true lumen after type A aortic dissection repair analyzed by computed fluid dynamics	共著	2024年度	Frontiers in Cardiovascular Medicine	dSINE発生前後の血流シミュレーション（CFD解析）によるdSINEの発生の前狭窄部の流体力学的負荷影響に関する検討

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
A theoretical study of the hemodynamics of aortas of patients with acute Type A aortic dissection using computational fluid dynamics (数値流体力学を用いた急性A型大動脈解離症例に対する大動脈内の血行動態に関する理論検討)	-	2024/10/26	19th TOIN International Symposium on Biomedical Engineering	an analytical model based on medical image data was created, and exploratory computational fluid dynamics (CFD) analysis was performed to conduct a theoretical study of hemodynamic changes pre- and post-treatment of acute Type A aortic dissection with artificial graft replacement or two-stage stent grafting. (急性A型大動脈解離に対する人工血管置換術と2期的ステントグラフト内挿術による治療前後の血行動態の変化を理論的に検討するため、医用画像データを元に解析モデルを作成し、数値流体力学(CFD)解析を試みた。) 共著者：丸下 洋一, 飯田 泰功, 奥 知子, 山内 忍 本橋 由香 佐藤 敏夫

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 臨床工学科

氏名

松岡李奈

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Molecular Evolution of the Fusion(F) Genes in Human Parainfluenza Virus Type 2.	共著	2025	microorganisms	<p>ヒトパラインフルエンザウイルス2型 (HPIV2) は、臨床的に重要な呼吸器系病原体であり、現在、特効薬やワクチンがないことから、その分子進化に関する研究が重要であると考えられている。本研究では、宿主細胞膜に付着し融合する、HPIV2融合 (F) 遺伝子の進化ダイナミクス、系統力学、構造的特徴について調査・解析した。系統解析の結果、HPIV2 F遺伝子の配列に2つの異なるクラスターが存在することが明らかになった。これらのクラスターは、約1世紀前に共通の祖先から分岐した。クラスター1は、より安定したクラスター2と比較して、より高い進化率と遺伝的多様性を示した。Bayesian Skyline Plot解析では、2005年から2015年にかけてF遺伝子の有効集団サイズが有意に増加したことが示された。構造モデリングにより、主にFタンパク質の頂点領域と茎領域に保存されたコンフォメーションエピトープが同定された。これらの知見は、HPIV2 Fタンパク質の進化的制約と抗原性を強調するものである。</p> <p>共著者：Tatsuya Shirai, Fuminori Mizukoshi, Ryusuke Kimura, <u>Rina Matsuoka</u>, Mitsuru Sada, Kazuya Shirato, Haruyuki Ishii, Akihide Ryo, Hirokazu Kimura</p>

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属                      教養部                      氏名                      星野修平

### 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
なし				

### 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
なし				

### その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「医療現場に求められる情報の専門家のあるべき姿」 大学教員の視点から専門家のあるべき姿とその育成	-	2024. 4. 12	第 80 回総会学術大会（横浜） 第 43 回医療情報部会 シンポジウム	<p>第 80 回総会学術大会（横浜）にて、第 43 回医療情報部会 シンポジウム「医療現場に求められる情報の専門家のあるべき姿」では、医療現場で求められる情報の専門家像について議論が行われた。情報系の医療業務携わる専門家に関して、（1）システム調達における仕様書や資料の重要な要素、（2）臨床現場の視点からみた専門家のあるべき姿とその育成、（3）データ利活用で実現する必要とされる医療情報の専門家、（4）大学教育の視点から専門家のあるべき姿とその育成の観点から、4名のシンポジストがテーマ提示を行い、医療情報の専門家について議論がなされた。データ利活用で実現する必要とされる医療情報の専門家が今後重要視され、その必要性が強調され、今後の育成課題が示された。</p> <p>本人担当部分：大学教員の視点から専門家のあるべき姿とその育成とて、診療放射線技師教育における「情報」「医療情報」の教育実践の現状と教育課程における位置付けについて解説し、診療放射線技師教育（育成）の基盤となる大学設置基準、指定規則、ガイドライン等との関連を示した。</p> <p>共著者：原瀬 正敏、辻本 武志、荒木 隆博、星野修平</p>

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 教養部 氏名 アンドリュース デビッド

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. The Translator's Role in a World with AI (Aのある世界における翻訳者の役割)	単著	2024年10月	Translator Perspectives (翻訳者の目線) 2024, December 2024, JAT (日本翻訳者協会), pp. 1-2	AIは社会に急速に浸透し、翻訳業界にも大きな影響を与えている。かつては不正確だった機械翻訳も、現在ではGoogle翻訳やDeepLなどにより驚くほど高精度になった。その結果、企業は翻訳部門を縮小する動きも見られる。しかし、人間の翻訳者による自然で文脈に合った訳は今後も必要とされるでしょう。翻訳者の役割は変わりつつあるが、その専門的スキルの価値は依然として高いのである。
2. Do health sciences-related university students know the state of their dental health? (健康科学関連の大学生は自分の歯の健康状態を知っているか?) (査読付)	共著	2025年3月	The Journal of Japan Mibyou Association 30(3) 16-20 2025年3月	群馬県の医療系大学A大学の学生130名を対象にアンケートと口腔診査を行った結果、自身の歯や口の状態を正しく認識できていない学生が全体の4分の1以上いた。実際には問題がなくても不安を感じている者が多く、治療が必要な人の一部は自覚がなかった。これにより、高校卒業後も定期的な口腔健診が必要であることが示唆された。(全論文校閲・英文校正を担当) (共著: Tomoichiro Asami, Yuka Fujimoto, David Andrews)

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 切断装置及び切断システム (特許明細書翻訳) (査読付)	単訳	2024年5月	Coe Translation	従来技術：従来の切断装置は、作画済みのシート状媒体にカットラインを形成するときに、上下動可能なカッター部材と、載置台の上面に形成されたカッター溝とでシート状媒体を挟持しながら駆動ローラを駆動することで、シート状媒体を搬送方向に引っ張る。切断装置は、引っ張られた状態のシート状媒体にカッター刃で搬送方向と直交する方向に沿ってカットラインを形成する。
2. 印刷装置、印刷データ編集プログラムを記憶した記録媒体および印刷データ編集装置 (特許明細書翻訳) (査読付)	単訳	2024年5月	Coe Translation	従来技術：従来のラベルデータ作成装置は、レイアウト編集ソフトの起動時にテープ印刷装置にセットされているロールシートの情報を取得する。ラベルデータ作成装置は、取得した情報に基づき、ロールシートに印刷するためのラベルデータを編集するレイアウト編集画面を、ロールシートの種類に合わせた画面に設定することができる。
3. プリンタ、制御方法、およびコンピュータ可読命令を記憶した非一時的コンピュータ可読媒体 (特許明細書翻訳) (査読付)	単訳	2024年7月	Coe Translation	従来技術：液体吐出装置は吐出ヘッドと収容容器とキャップとを備える。吐出ヘッドは複数のノズルのそれぞれから吐出液を吐出する。収容容器は吐出液を貯留し、複数のノズルのそれぞれに接続する。キャップは複数のノズルを囲んで保持空間を形成し、保持空間内に保持液を保持する。

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. 盛上げタップ（特許明細書翻訳）（査読付）	単訳	2024年7月	Coe Translation	従来技術：特許文献1は、内径仕上げ刃を備えた盛上げタップに関する。雄ねじ部は完全山部と食付き部からなり、食付き部には突出部と逃げ部が交互に配置されている。突出部は塑性変形により雌ねじを形成し、内径仕上げ刃がねじ山の頂部を切削する。溝は軸方向に延び、ねじ山を分断している。
5. ミシン（特許明細書翻訳）（査読付）	単訳	2024年8月	Coe Translation	従来技術：従来のミシンは、被縫製物を移送する機構、投影画像を映すプロジェクタ、撮像するカメラを備え、プロジェクタとカメラのレンズは針棒の左前方に配置され、投影領域は横長の長方形である。
6. ミシン（特許明細書翻訳）（査読付）	単訳	2024年9月	Coe Translation	従来技術：従来のミシンの押え装置は、連結部材・移動部材・弾性部材を備え、主軸の動きに応じて押え棒への付勢力を調整する。送り歯の位置により押圧力を変化させ、布の厚みや硬さに応じた調整も可能である。
7. プリント（特許明細書翻訳）（査読付）	単訳	2024年11月	Coe Translation	従来技術：従来、印刷された媒体を切断するための切断機構を備えたプリントが知られている。例えば従来のテープ印刷装置はカッタ刃受け部材とガイドホルダとカッタ刃とを備える。カッタ刃受け部材は媒体を支持する。ガイドホルダはカッタ刃を退避位置と切断位置とに移動可能に支持する。カッタ刃は退避位置から切断位置に移動することで、カッタ刃受け部材との間で媒体を切断する。
8. ラベル貼付装置（特許明細書翻訳）（査読付）	単訳	2024年11月	Coe Translation	従来技術：従来より装置本体(12)の背面にクリップ(13)を有するラベルプリント(10)が知られている。使用者は、クリップ(13)と装置本体(12)との間に使用者のベルト等を挟むことで、ラベルプリント(10)を装着することができる。
9. プリント（特許明細書翻訳）（査読付）	単訳	2024年12月	Coe Translation	従来技術：特許文献1は、DCモータに連なるギヤが破損することを抑制するモータ制御装置を開示する。モータ制御装置は、検出部、判断部、及びモータ制御部を備える。検出部は、DCモータの回転速度を検出する。判断部は、検出された回転速度が下限回転速度を下回るかを判断する。モータ制御部は、検出された回転速度が下限回転速度を下回る場合、DCモータを停止する。
10. プリント、及び切断ユニット（特許明細書翻訳）（査読付）	単訳	2024年12月	Coe Translation	従来技術：特許文献1のプリントは、本体部、可動部、排出口、第一切断部、及び第二切断部を備える。本体部は、ロール紙を収容する。可動部は、本体部に対して開閉可能に設けられる。排出口は、本体部と可動部とにより形成される。第一切断部と第二切断部は、カッター刃で夫々構成される。第一切断部は、本体部に設けられる。第一切断部は、排出口から排出されるロール紙をカッター刃で切断する。第二切断部は、可動部に設けられる。第二切断部は、排出口から排出されるロール紙をカッター刃で切断する。

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 教養部 氏名 峯村優一

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Non-Maleficence Principle and Tolerance of Harm (無危害原則と危害の許容範囲), Formosan Journal of Medical Humanities, Vol.25 (査読付き)	単著	2024年12月	Formosan Journal of Medical Humanities, Vol.25	二重結果原理は、理性をもつ人間に危害を加えないという条件付きで認められるべきであり、この条件が加えられなければ、人間の生命を侵害する行為が正当化され、無害性原則の基本概念に反する結果が容認され問題であることを明らかにした。

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Principles of Respect for Autonomy and Justice, and the Problems of ALS Patients (自律性尊重原則、正義原則、難病療養者の問題)	—	2025年3月	34th Annual APPE International Conference	ALS療養者の病状が進行し絶望感をもつ時、医療者はその心情をどこまで理解し、療養者の自律性をどこまで尊重すべきか、医療資源が限られる場合、療養者にどのように公平に提供できるかについて考察した。

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 教養部 氏名 徳永慎也

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
(投稿論文) 自由を求める者たち ——『草の堅琴』に描かれた アメリカ南部の人種差別から 再考するカポーティ像—— Freedom Seekers: Reconsidering Truman Capote through the Racism of the American South Depicted in <i>The Grass Harp</i> (査読付き)	単著	令和7年3月31日	『東北アメリカ文学研究』48号、16-29頁。	『草の堅琴』を「自由」という視点から分析し、本作が社会から排除された人々の「自由の追求」を描いた社会的テキストであることを再評価する論考である。物語においては、白人少年コリンが黒人女性キャサリンの受難に共感しつつも無力感を抱く語りを通じて、南部アメリカに根強く残る人種差別構造と、公民権運動の胎動とを浮かび上がらせている。また、判事クールらの葛藤や、当時の分離政策への批判を読み解くことで、これまで「政治とは無縁」と見なされてきたカポーティを、むしろ社会的テーマに深く関与する作家として位置づけ直すことを試みる。そこには、のちの『冷血』へと継承されるマイノリティへのまなごしの萌芽が認められる。カポーティが追い求めた「自由」は排除ではなく包摂の志向を持つものであり、我々はその声に耳を傾けるべきである。 (英文要約あり)

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
研究報告発表（口頭発表） 『遠い声 遠い部屋』における ケアの役割——ケアの倫理 を手がかりに	—	令和6年12月7日	日本アメリカ文学会東北支部12月例会 於TKP仙台北ロビネスセンター	キャロル・ギリガンのケアの倫理を手がかりに、トルーマン・カポーティの『遠い声、遠い部屋』における孤児ジョエルの成長と、黒人女性ミズーリのケアの役割を論じる。ミズーリは周縁化された存在としてケアを担い、その関係性がジョエルに道徳的成熟を促す一方、彼女自身も暴力と抑圧に晒され救済を求める。ランディングという閉ざされた空間は社会的悪意からの避難所となり、「他の声」が交錯する場として、ケアの価値と限界を浮かび上がらせる。作品全体を通じ、ケアは抑圧構造を批判しながら登場人物を結び付ける倫理的契機として機能する。
(エッセイ) カポーティ ——生誕100年を迎えて—— Capote: For the Centenary of His Birth	単著	令和7年3月31日	『東北アメリカ文学研究』48号、62-64頁。	カポーティ生誕100年を契機に、その波乱の生涯と文学的遺産が改めて注目されている。1924年ニューオーリンズ生、南部体験を作品に昇華し、『冷血』で「ノンフィクション・ノヴェル」を確立したが、名声の裏で薬物と酒に溺れ1984年死去。近年のドキュメンタリー『真実のテーブル』やドラマFeud: Capote vs The Swansは、社交界の「白鳥」たちとの裏切り劇を通じ、現代ゴシップ文化の原型としてのカポーティ像を照射する。孤児や周縁者への深いまなごし、遠縁の従姉スックのジンジャー・クッキーに象徴される温かな記憶が、スキャンダルと同居しながらも彼の作品を今日まで鮮烈に響かせている。

## 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 教養部 氏名 衣川 隆

### 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

### 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
5. 骨盤傾斜からスポーツ動作と健康を考える(査読付き)	共著	2025年3月	群馬パース大学紀要 2025,3,no,31P.31-33.	<p>本研究報告は、骨盤傾斜位の違いにより、反応動作スピードや肩関節柔軟性に影響を及ぼすことが分かってきた。その違いによる筋肉の働きや関節可動域の変化が観察され、エビデンスが蓄積されてきている。一般的にスポーツは、骨盤を中心に動くことが多い。全身を使って運動する場合には、全身の運動連鎖が起こり、骨盤は上半身と下半身の骨格をつなぐ役割になるとても重要な骨である。すなわちパフォーマンスにも大きく関わっている。</p> <p>前述の報告を鑑み本稿では、骨盤傾斜位とスポーツ・健康がどのようにかかわるのかを先行する研究をもとにして紹介していく。                      (本人担当部分：研究計画の策定、トレーニング方法・プロトコルのデザイン、論文総括)(筆頭論文) 共著者:衣川隆、岩城翔平</p>

### その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 教養部 氏名 岩城 翔平

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要
該当なし				

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
11 骨盤傾斜からスポーツ動作と健康を考える	共著	令和7年3月	群馬バース大学紀要 第31号 p. 31-33. (令和6年度)	股関節伸張動作のスポーツパフォーマンスはもとより健康スポーツにも影響を及ぼし、胸郭や肩関節角度、姿勢や歩行機能に重要な筋肉など全身の運動連鎖にポジティブに作用することが推察される。一方で骨盤前傾位での腰椎の過剰な負荷は腰痛の原因と考えられているので、取り組み方には注意が必要である。 衣川隆、岩城翔平

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
10 大学野球選手のトレーニング再開期における体力変化のモニタリング	—	2024年9月	日本体育・スポーツ・健康学会第74回大会	本研究では、CMJの跳躍高を選手の体力評価の指標として、大学野球選手のDetraining期間からの活動再開後における体力変化についてモニタリングした。CMJによる跳躍高とパフォーマンスの指標としてスイング速度を測定し、筋力・パワーの指標としてスクワットおよびハイプルの最大パワーを測定した。Pre測定はDetraining期間（3週間）の直前に実施し、活動再開後の測定（Detraining）は傷害リスクを考慮し、週3回のグラウンドによる練習と1回のウェイトトレーニングを実施した後、2日間の休息を挟んで実施させた。Retraining期間中の測定については、CMJの跳躍高は、選手の体力変化をより詳細に捉えるため週に1回の頻度で計6回実施し、加えてスイング速度の測定も同様の頻度で実施した。また、スクワットおよびハイプルの最大パワーについては、2週に1回の頻度で計3回（2, 4, 6wks）実施した。その結果、Preと比較してDetrainingでは全ての測定項目が有意に低値を示し、6wksにはPreと比較して同程度まで回復した。さらに、全ての測定項目において、Detrainingから2wksおよび4wksから6wksの期間に記録の向上が認められたことから、Retraining期間中における各種測定とCMJの跳躍高の時系列変化は同位相で変動する傾向が見られた。 畑島一翔、岩城翔平、大木連汰、花木祐真、田中重陽
11 Tensiomyographyによる収縮様式が異なる運動後の筋収縮特性の比較	—	2025年3月	東京体育学会 第16回学会大会	本研究の目的は、TMG を用いてコンセントリック（CON）運動とエキセントリック（ECC）運動後の筋疲労および回復過程における筋収縮特性を比較することである。健康な男性 11 名が被験者として参加し、片腕で肘屈筋の ECC 収縮運動、もう片腕で同一の総仕事量による CON 収縮運動を実施した。最大随意等尺性収縮（MVC）トルク、可動域（ROM）、上腕周囲径（CIR）、筋肉痛（SOR）、および筋収縮特性を、運動前、運動後 1 時間、および運動後 1～5 日に評価した。MVC、ROM、CIR の変化は ECC 群で CON 群より有意に大きく、SOR の有意な増加は ECC 群のみに認められた。TMG パラメータは収縮様式間で有意に異なり、同一の総仕事量でも筋収縮特性が収縮様式に依存することが示された。これらの結果は、TMG が収縮様式による筋疲労および回復の過程を検出できることを示唆する。 平塚和也、岩城翔平、横沢翔平、畑島一翔、田中重陽

# 研究活動の記録（2024年4月～2025年3月）

所属 教養部 氏名 伊藤 栞

## 著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

## 学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

## その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 2種類の心臓活動の知覚に関する評価方法の比較ー Heartbeat countingと Heartbeat detectionを用いてー	—	2025年6月23日	日本バイオフィードバック学会	本研究の目的は、心臓活動の知覚の評価方法として、 Heartbeat counting task (以下, HCT) と Heartbeat detection task (以下, HDT) を用い、課題成績間を比較し、心臓活動の知覚の評価方法について検討することであった。2023年11月から2024年3月にかけて、実験参加への同意を得られた大学生・大学院生13名を対象に、HCTとHDTに取り組んでもらった。HCTとHDTとの成績の関係を検討したところ、13データ中5つのデータにおいて両課題で評価が一致していた。(研究の立案、研究の実施、口頭発表を担当) 共同発表者: 伊藤栞, 依田麻子
2. 自律訓練法初心者の自律訓練法練習過程における健康管理行動について	—	2025年8月31日	日本健康行動科学学会	本研究の目的は、自律訓練法の初心者が自律訓練法を練習する過程における観光管理行動への影響を検討した。実験協力者は全24名であり、各12名ずつコントロール群と実験群に分けた。分析の結果、自律訓練法を練習するなかで健康行動の増加はほとんど確認されなかった。自律訓練法で行うような局所的な身体への気づきから気づきを応用して健康行動につなげるには、自律訓練法の取り組む期間として短かったと考えられた。(研究の立案、研究の実施、口頭発表を担当) 共同発表者: 伊藤栞, 依田麻子